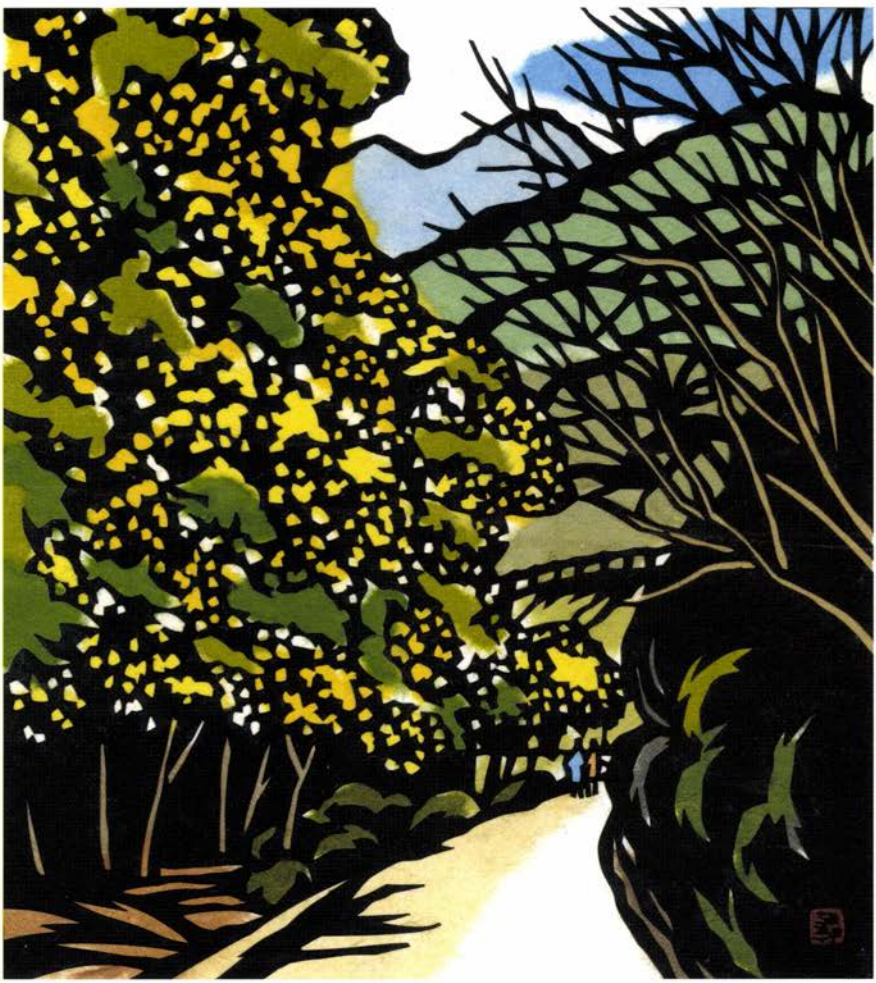
川柳塔

平成十年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九五九号



No. 959

特集　私の宝もの

四月号

日川協加盟

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱　看護２A・緩和ケア病棟

・消化器科・内科・外科
・放射線科・ホスピス
・デイサービスセンター

診療時間
月～金　8:30～16:00
土　8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)

自費出版　川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美研アート

〒530-0022　大阪市北区浪花町９番４号
TEL（06）6372－1178
FAX（06）6372－1196
E-mail：bikenart@wonder.ocn.ne.jp

手順

河内天笑

前人未踏の四百勝を成し遂げた「かねやん」こと金田正一投手（国鉄スワローズ―巨人）が現役を引退した直後のある談話で「勝負に生きる者は死んでも敵に弱味を見せたらあかん」という彼の哲学を聞かされ、未だに強烈な印象として金田正一の眼が私に残っている。

将棋の羽生名人は何処へ遠征に出かける時も鞄に専用スリッパを入れて行かれるそうだ。また日常的には七時起床、九時二十分に都内の会場へ到着するが、どんな日も駅までの二キロを歩いて体調を整えるとか。勝負に携わる人間にはその人なりの手順がきちんと出来ていて、その一つ一つが勝負への準備体操なのだと理解出来る。ヤンキースで四年目を迎える松井選手も例外ではない。この冬耳にした事だが、彼はベンチに入る前、必ずロッカールームでおにぎりを二つ食べる事を試合前の大事な手順にしているらしい。「胃袋におにぎり二つゴジラ君」などと思いながらバッターボックスの松井選手を見るのも面白い。

碁や将棋の棋聖戦とか名人戦など大きな試合になると持時間がお互いにたくさんあって勝負が二日に及ぶ事が常らしい。一手打つのに何十手も先を読んだり、それが何通りもあれば想像もつかないくらい一手一手に時間をかけて鏑を削る様子が理解出来る。ところが彼の羽生名人にしても秒読み段階の局面では一手を一分以内に差さねばならず、読み切る余裕あらばこそで頭の中が真っ白になる事も常時だとか。然しそんな時はいくさの局面を絵に浮かべるだけで雑念を捨て去り、培ってきた直感を信じて気合いの一手に賭けているそうだ。そしてその直感は殆ど七十パーセント成功しているという。

川柳の遊びはおよそ野球や将棋の世界とは縁遠いものの様だが、一句を完成させる為の集中力は鍛えれば鍛えるほど高まってゆく事に間違いなさそうだ。そして集中力を存分に発揮する為の手順は松井選手しかり、羽生名人しかり、人それぞれの工夫に則り独自に拓かれて自分流の「手順」が出来て行くのだ。

◆

自選句

流行に疎いが流感には罹り　天笑
タミフルをいただくこととなりにけり　〃
焼酎はお預けセブンロンリーデイズ　〃
白い神消えて桃色神の春　〃
センバツの春よここまで飛んでこい　〃



座右の句

雑踏へまぎれるときの好きな人　（薫　風）

私の句

ご放念下さいませと歯が抜けた　柿花和夫

川柳塔　四月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「ミモザの小道（小豆島）」

■巻頭言　手　順……河内天笑……（1）
薫風の遺志……栞原道夫……（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選……（4）
川柳塔の川柳讃歌(28)……木津川　計……（51）
自選集……（52）
水煙抄……奥田みつ子選……（56）
温故知新……（77）
○特集　私の宝もの……（78）
板尾岳人・瀬戸まさよ・仁部四郎・松本文子・川端一歩・山田耕治
北野哲男・白根ふみ・播本充子・清川玲子・瀧本きよし・森　茂美
米澤俶子・山岡冨美子・早川盛夫・松尾和香・園山多賀子
井上桂作・宮崎シマ子・喜田准一・岸田知香子・山本義子
愛染帖……新家完司選……（90）

薫風の遺志

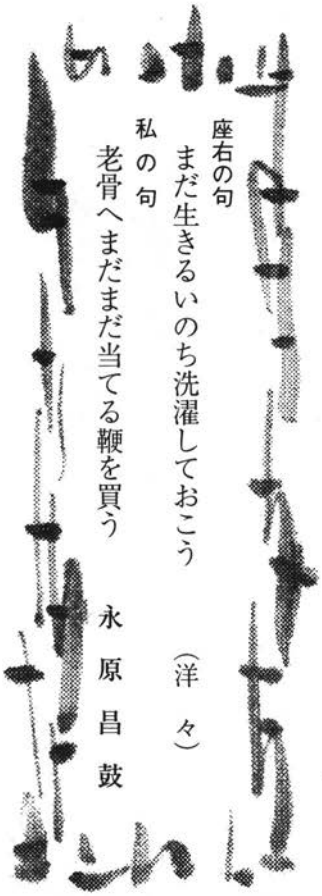
栞原道夫

昭和59年に雄山閣から出版された『川柳総合事典』が、四巻本『川柳大事典』として刊行されることになった。編纂担当の堺利彦氏から原稿執筆の依頼があった。なぜ私なのか不審に思っていると、薫風（川柳史に残る偉大な作家だからこそあえて敬称を略す）と親しくお付き合いなさっていて、同様に親しくなさっていた天根夢草氏が推薦して下さったということが分かり、これも薫風の遺徳によるものだと思い、ありがたくお受けした。

薫風亡き後、私と川柳との繋がりは、川柳塔わかやまの課題吟を担当していることと、川柳塔誌に何度か原稿を書かせて頂いたくらいである。平成14年に『橘高薫風川柳句集全句索引』を纏めて以来、索引を充実させねばと思っているうちに、薫風は他界し、「肉眼で棒標を見つめつづけます」という弔吟を詠んで、早くも二年経ってしまった。

今回『川柳大事典』の執筆に関わり痛感したことは、川柳界の記録を活字として後世に遺すことの大切さと資料の散逸を何とか防げないかということである。豆秋句集も私が担当したが、

誹風柳多留一一篇研究 20 …… (94)
檸檬抄「税」 …… 川上大輪・松本文子共選 … (96)
一路集「ロマン」 …… 長谷川呂万選 … (98)
「新入生」 …… 岩切康子選 … (98)
「つもり」 …… 小野句多留選 … (99)
初歩教室「もしも」 …… 三宅保州 … (100)
秀句鑑賞 同人吟 …… 榎原公子 … (102)
水煙抄 …… 谷口次男 … (104)
■各地句会だより 川柳塔きゃらぼく …… 政岡日枝子 … (105)
三月本社句会 …… (106)
嗚呼一〇三歳 乾喜与志さんを偲んで …… 森山盛桜 … (111)
各地柳壇（佳句地十選／中岡 妙） …… (112)
柳界展望 …… (129)
四月各地句会案内 …… (130)
■編集後記（ひとこと／小川注湖） …… 希久子・朱夏 … (132)



座右の句

まだ生きるいのち洗濯しておこう （洋々）

私の句

老骨へまだまだ当てる鞭を買う 永原昌鼓

『ふるさと』には、昭和29年初版、30年再版、33年三版がある。初版は持っていて、三版は楓楽さんからコピーさせて頂いたが、再版は未見である。収録句の違い・句の配列など記録しておきたいと思っている。

薫風句集の索引も充実させねばならない。まずは、初出を確認すること。初出と異なる句については、なぜそう変えたのか考えること。それによって、薫風の推敲の仕方も明らかになるだろう。

橘高薫風が構造社出版『麻生路郎』（昭和54年7月31日発行）の編集をしたとき、大阪市立中央図書館に日参したという。あとがきに、

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

の句は、「文芸春秋」昭和八年十月号に特集された「古今川柳百名吟」の中に、現代川柳のたった四句のうちの一句として選ばれた程の句だから、どうしても出生の一端なりと知りたくて、「川柳雑誌」を更に丹念に調べ始めたところ、それは大正十五年七月十一日午後一時から開かれた第五回遅日荘柳談会（於鳴尾の路郎先生居）席上で発表されたものであることが判った。その日のお昼少し前に私自身も生まれたのだから、これは私にとって感激的な出会いだった。とある。真似ることなど到底できないが、その精神の一端は受け継ぎたいと思う。

薫風忌肉眼に檸檬しかとあり 道夫

川柳塔

河内天笑選

春一番と一緒にやってきた転機
やさしい人のやさしい力には勝てず
亡き人想う散水へ春の虹
原色に明けモノクロに暮れる春
青い空だって哀しい時がある
春夏秋冬ふんばっている根っこ

吹田市　山本　希久子

ＩＴ社会おとぎ話が風化する
誰だって触ってみたい非常ベル
居て欲しい時に居るから夫婦でしょう
添加物骨の髄まで染みている
天国地獄床屋の椅子と歯科の椅子
ふるさとの風は冷たいけど温い

弘前市　高瀬　霜石

冬の夜空をピーポーが引き裂いた
一鉢のおからに盛った温かさ
お礼にと大根スポッと抜きました

羽曳野市　徳山　みつこ

お財布にボディーブローの続く税
嘘まこと吊り広告が揺れている
春だから花も団子も寄っといで

和歌山市　堀畑　靖子

椿落つばっさり思い断つように
木もれ日を分け合い生きている夫婦
ハローワークで出合う子連れのママさんに
これからも喜劇ねんきん族になる
華寿の恋シネマと食事して終る
定年後釣り場の主になり申し

豊中市　吉田　あずき

それからはお詫び広告絶え間なし
抜け道を探して貧乏神に会う
誕生日もはや余命を思うのみ
暖冬へ地球も首をかしげ出す
知るまでは幸せだった泥の船
知らなくて損ばかりする錆びた脳

知らぬまに変わってましたみどりの日
聞きまちがえられるワカヤマとオカヤマ
飲む前は何にも口にしない通
君の瞳は画素数などで測れない
一年は早いが一日は長い
てのひらで切った豆腐の温かさ

海南市　三宅保州

あわてず騒がずネクタイ結んでる
むつかしいことのひとつに蝶結び
おばあさんは無印良品だったんだ
感情線はずっと乱れて元気です
だんだんと和食の似合う顔になり
盛付けになるとまったく芸がない

東大阪市　谷口義

贅沢はすてき老舗の卵焼き
思い出を拾えば嘘に華が咲く
追憶の彼方愚かな走馬灯
煎餅ぽりぽり核心突いてくる
雑談のリズムにのれぬど低音
快調の時には運もついてくる

柏市　河野桃葉

一病が健康管理してくれる
子どもらの集う公園通り抜け
完全に酒止められるものでない
順調な老化うれしいどっこいしょ
公園のテントにあたたかい日差し
墓参り土葬の父母に逢いに行く

大阪市　前たもつ

おみくじは大吉焦ることはない
朝はどこからたぶんわたしの畑から
折り紙の苦手なままで祖母になる
嬉しいなわたしのギャグが通じたよ
原動力なんてったって家族だろう
失敗ですと書いて手作りチョコレート

藤井寺市　太田扶美代

誘われたわけをあとから聞かされる
冗談は笑ってくれる人に言う
利子代りティッシュと暦もろてくる
点滴が命と格闘して落ちる
うらおもてないので少し頼りない
介護中お百度参りにも行けず

豊中市　江見見清

戦後六十年愛国心もすり切れた
夢持たぬ子に将来を問うたとて
崖っぷちの犬人間を信じない
バスツアー子供に還る喜寿傘寿
鶏も牛も食べずに生きられる
老いの足に益々高くなる段差

大阪市　板東倫子

相槌を打ってるだけで聞いてない
五十点取れる人生めざしてる
義理チョコもまんざらでないお父さん
引き下がる隙間をちょっと開けておく
冗談のつもりのわさび効き過ぎた
あたたかい風が花粉を連れてくる

堺市　齋藤　さくら

ありがとう今日吹く風の暖かさ
もう居ない情けいっぱいくれたまま
この情けかけてよいやら悪いやら
さがし物一人芝居で日が暮れる
人の手で花粉をもらう梨の花
種を残す使命があって舞う花粉

米子市　木村　富美子

目をしばたたいてる間に一ヶ月
雲一つひき寄せハート浮かべたい
蝶もでたかぶってみよう春帽子
鼻先でブランド店にあしらわれ
バーゲンに夫のものも一つ買い
指紋までうすれてコップまたすべる

大阪市　渡部　さと美

牛を食い鯨獲るなと言いがかり
いやな役ひたすら逃げる呆けたふり
浮世床愚痴が行ったり来たりする

国分寺市　野崎　勝

温暖化杉も目覚めが早くなり
日本語も出来ずに英語習わせる
お土産も衝動買いの癖が出る

西宮市　井上　松煙

音読に春を迎えて恙なし
趣味の輪に友情固く結ばれる
老いたとてスーツ誂え春の風
品格を正してこその生き甲斐ぞ
しまつして高齢の世を楽しもう
車窓から故郷の杜を懐かしむ

大阪市　津村　志華子

幸運の神といつも行き違い
母さんの昼餉はいつも残りもの
苦労した過去は言うまい愚痴になる
大原女のみがく柱はぴっかぴか
婆ちゃんのイナバウアーは前のめり
ワンカップ好きで元気な父の艶

豊中市　安藤　寿美子

文明が進み人間退化する
地球もうあきまへんなと鬼が言う
寒風に負けるもんかと生きて居る
嘆くより賢い老人になろう
千の風も一つの風も吹いて来ぬ
寒日和　椿一輪咲きました

八尾市　村上ミツ子

節分の豆は三度に分けて食べ
ペコちゃんの笑顔こどもは待っている
豊かさのすき間に忍びこむ病魔
引き返す勇気なかなかでてこない
かなしみを隠し姿見笑わせる
いやなこと忘れいいことだけ数え

松江市　銭山昌枝

まだ翔べるつもりで買ったお洋服
新品のままのスーツがぶかぶかに
眠るため灯を消したのに冴えてくる
すぐ伸びる爪また爪切りを買い替える
貸したままの本が読みたくなってきた
言葉の端にじんと感じる思いやり

八尾市　髙杉千歩

軍神の兄の命を遥か生き
思春期の娘と会話弾まない
割引のカードを試す改札機
リードして下さいワルツなら少し
キタミナミ昔のようにときめかぬ
年金を忘れて暫しウインドウ

大阪市　升成好

怒鳴るより声を落とした方が効く
箸さばき見事に秋刀魚背骨だけ
通販に私のサイズ載ってない
ふる里の訛りで帰省迎えられ
神さまのセンスが光る夕茜
どこまでもついてない日は二度転ぶ

出雲市　小豆澤歌子

カラフルな色を夢見ている枯木
吊されて何も言えなくなった柿
朝の靄山も吐息だったのか
千切りの大根愚痴も乾きそう
春の陽にワクワク靴を磨いてる
カーナビの指示にも背く好天気

堺市　志田千代

旗日には旗を掲げた家がある
野の花を一輪いける空き瓶に
日向ぼこ卒業すぎても愛煙家
天職でなかったけれど定年日
鑑定はしない贋物だっていい
爺ちゃんも乗ってる女性専用車

鳥取市　春木圭一郎

ひたすらに学んだことをやるだけだ
完璧でないからみんなついてくる
本当はこわい自分をさらすこと
やっと知る本音で語る楽しさよ
持ち味はカッコ悪くて愚か者
比較せず存在感がほとばしる

始まったばかりで終り考える
底のない深みにはまる悪あがき
シグナルは赤この先をどう生きる
句読点打って人間ドック入り
陰干しにしてる私の影法師

砂川市　大橋政良

仏壇の青いバナナが熟れてくる
悠々と鴨が群れてる禁猟区
補助席も同料金で座らせる
持ち駒を使い果たして得た勝利
片手では持てなくなった広辞苑

弘前市　福士慕情

愛着を土地に感じて拓く薮
開拓は余暇には出来ぬ出来ませぬ
健気にも鋸と鋏の無鉄砲
腰痛が鋸と鋏を持て余す
開拓の薮に厳しい怪我の私語

弘前市　櫻庭順風

縄のれん男の愚痴の吹き溜り
歳を聞かれて八掛けに言っておく
国歌斉唱歌いたくない人もいる
願望のままで揺れてる絵馬の数
昇進の焦りチクチク胃が痛む

弘前市　高橋岳水

豪雪がまぼろしとなる寒の明
バレンタイン贈りし人をはばからず
恋猫の家紋のごとく足跡が
暖冬のきざし山茱萸咲いている
たわやすく雪割草が顔を出す

弘前市　今愁女

冬鳥の暖冬気味に首傾げ
生き下手の気にせぬ貌でマイウエー
坂道の街が育む健やかさ
ゴボウ叩きストレス消したサシスセソ
踏み出した八十路へ笑顔守ります

弘前市　岡本花匠

多数派に振りまわされている私見
罪のないジョークで冬も生ビール
ハンドルが足湯梯子の農閑期
雪不足ただ体重が増す津軽
暖冬に浮かれ続ける冬帽子

弘前市　相馬銀波

日曜日妻の赤帽引き受ける
一合の酒で朝までグッスリ剤
暖房がしっかり冬も生ビール
投書欄総理にチクリ刺しておく
登山道お地蔵さんに励まされ

弘前市　須郷井蛙

黒石市　相馬一花

少年の夢が教師に破られる
隠れん坊みたいに去って行くあなた
近道でのっぺらぼうに会う不安
どの料理食べても美味い戦中派
バランスのとれぬ夫婦で仲が良い

黒石市　佐藤古拙

無駄のない電子辞典の味気なさ
ゴシップがまつわりついて回覧板
五寸釘うてば途中で折れ曲る
ああ来たな話の腰を折る奴が
そそくさと老いらくの恋趣味の会

十和田市　阿部進

お隣もそのお隣も老い一人
しっかりと抱きしめようよこの命
心をつなぎ暮らしを守る老夫婦
下さいよ僕に素敵ないい夜を
電池かえた時計がすぐに活気づき

平川市　小寺花峯

蓑虫の部屋にもあった四畳半
春近し財布でっかい口を開け
割り勘にならない銚子倒れてる
春の伝言梅から承る
痩せ細る雪にからんだ福寿草

さいたま市　八田敏

よき年を願う年頭妻倒れ
近親者呼ぶ診断に覚悟する
三日目にもう葬儀屋の電話来る
六日目に意識戻った妻の運
生き延びて妻の障害またもふえ

さいたま市　星野育子

祝日に国旗は見えぬ愛国心
自助努力やってはいるがしんどいなァ
後ろ指差すなと人差指を見る
出かければまたシャッターの商店街
予報士も雨宿りする通り雨

日高市　根岸方子

節々の悲鳴和らぐ温暖化
神頼み注射頼みの花粉症
耳ピアス陰口なんて他人のこと
丁寧に子の晴れ姿スクラップ
長男の妻に任せる墓掃除

柏市　永峰宣子

不祥事が起きて制度が改まる
クリーナー意外な場所にたまるごみ
中国に掃除させたい宇宙ごみ
孫四人声張り上げて福は内
たっぷりと愛されている子供の絵

贅沢品来ないと困る北の国
外国ではもてはやされる新首相
失言も多数バックにご安泰
鯨駄目鮪も減るぞ鯣獲れ
美しい国より楽しい国にして

佐倉市　岡井やすお

春炬燵仕舞い忘れて日向ぼこ
鉄棒に錆を残して春休み
和ませる花を咲かせて無人駅
話の続き明日にしよう風の向き
過去形にいつかはなっていく悩み

東京都　清原悦子

駅前のティッシュに頼る花粉症
汁すする音も気になる倦怠期
危ないゾ元気強調してる時
柩だけポツンと残る通夜更ける
たびたびの立ち居思わず杖忘れ

東京都　長谷川康子

千の風母の鈴の音かも知れぬ
鏡には今日も錯覚させている
紙面より先ずはチラシを主婦の朝
暖冬に私の毬も春気分
住み替えの効かぬ地球が病んでいる

東京都　小川賀世子

ドクターを観察してる老患者
痒い背に届く手のない独居です
見て見ないふりも大人の処世術
おとぼけと認知症とは違います
暖冬を野菜ぞわぞわ泣いている

東京都　岸野あやめ

日本語を正しく話す人が好き
欲の無い自分の顔は大好きだ
亡母よありがとこの顔好感持てるとさ
ひと月病んで先ずはめでたい五キロ減
婆ちゃんの笑顔好きよと孫みんな

武蔵野市　亀井円女

お母ちゃんカレーに落とす寒卵
猫が猫追うその後を追うホウキ
ああしんど瞬発力と持続力
カンフルを打つ一昨年のシクラメン
陰ながら応援なんて卑怯です

八王子市　播本充子

赤茶けた頃の写真を自慢する
同情をされてみじめになるわたし
この栓を抜くと騒ぎが収まらぬ
へそくりを探し急場を切り抜ける
裕福に見せて飾ったひな祭り

横浜市　菊地政勝

横浜市　小野句多留

新知事を早速試すとりの風邪
いじめっ子いじめられてた過去もある
定年の罪ほろぼしが疎ましい
友の死を金属音で知らされる
雪国が雪乞いをする雪祭り

富山市　島ひかる

建国の日が穏やかに暮れなずむ
夢の夢見ていたポーズ出来たヨガ
人の字を飲んで披講の席に立つ
新聞を見たよとメールくれる友
こだわりの器を客は見てくれず

静岡県　薗田獏沓

老いてまだ人目引きたい服を買う
いい人がうっかり見せた裏の顔
川原に火柱が立つどんど焼き
湾奥に富士の霊峰梅が咲く
戦中の回想ポツリ新年会

愛知県　早川盛夫

檸檬という字ひらがなでなら書ける
捨てたゴミ何処で見ていたのかカラス
不景気を政治の所為にして別れ
子が二人では恩返しにはならぬ
妻に客夫散歩に行ったきり

犬山市　関本かつ子

条件を並べる内は適齢期
飛ぶ鳥を落したあとの落し穴
長々と主文分からぬご挨拶
医師からの表情のない経過聞く
団塊のそれなりにある句読点

犬山市　金子美千代

ちょい悪のオヤジの魅力捨てがたい
右向け右メディアに踊るダイエット
あかんたれ自認していて指摘され
出来すぎの成果むずむずしてる鼻
余所行きの笑顔オーケーする鏡

犬山市　吉田幸子

認知症追い出す趣味のなせる業
懐の大きな母の尻拭い
春ですよ畑で草のハーモニー
食い込んだトゲに不信の根が生える
逆らわぬように絡んだ糸を解く

可児市　鶴留百合

受注増し事務所はいつも会議中
咳をすることに疲れた長い風邪
晩学の固い頭へ道遥か
コート脱ぐ季節へまずは軽い髪
華やかな空気高まる着物ショー

うまいもの何かと問えば卵飯
名前では呼んでもらえぬ古女房
アメリカに未来あるのか増やす兵
笑ったら痛みが消えることを知り
お隣の多少のことは我慢する

可児市　板山まみ子

禁煙を守らず妻と一波乱
握手でも義理ですることきそっぽ向き
一年の無沙汰こつこつ賀状書く
親密な仲を誇示して握手する
我が子だけ良い子と言ってけしからん

滋賀県　中宗明

枚数の減った百均茶封筒
いつものことが毎日少しずつ変わる
老舗継ぐ重い袋を渡される
流し台今日一日を皆洗う
母の居た仏間わたしの部屋になる

京都市　高島啓子

男だと思った男泣いたはる
たっぷりの人情ほしい都市砂漠
息子には料理上手にしつけてる
レトルトで豪華に揃う晩ごはん
凸凹な三兄弟でよく揉める

京都市　桝本宏子

求愛の鶴のダンスを真似てみる
暖冬に梅見椿見忙しい
ご利益はやっぱり只じゃもらえない
春の陽が外へ行こうと誘い出す
良い生き方して来た人は顔に出る

京都市　三宅満子

命とは秘めたる夢の小宇宙
棚ボタも誓いも込めて神頼み
欲張らずそっと祈るが年の功
おみくじはこころ次第の吉と出た
意を極む息をするにも歩くにも（脱喘息叶う）

亀岡市　井上森生

手本にはされず見本になっている
幸せの証いつしか笑いじわ
横顔が本音の話してくれる
簡単な答ひとつでないらしい
本物は変らぬ光放つだけ

長岡京市　山田葉子

明日ひらく花が夢見る青い空
友の愛もう聞えない糸電話
人柄が関西弁の語尾にでる
保険屋に我が家を値踏みされている
酒の量妻の小言は聞かぬ振り

大阪市　小泉ひさ乃

育ち行く子等の節目に我を置く
香りのせ亡母へ届けるこの一句
淡々と職退くまでの平泳ぎ
着飾って内なる空しさ顕にす
病む妻の毒舌呀えて気は休む

大阪市　福岡末吉

ばあさまがぞっこんキムタク大ファン
嬉しいね今年も乗車証いただける
節分の護摩に家族の無事願う
何も彼も書きとめて置く念のため
雛人形親娘で揉める大と小

大阪市　中村叡子

香煙にせき込みながら願い事
原点に戻れば余生よく笑う
ストレスは去年の海へ泡と消え
信じ合う背のびしてないお付き合い
ジーンズの膝から覗く可愛い肌

大阪市　星野きらり

雲海を茜に染めて今日終る
コーヒーの湯気も馳走の老人会
清涼寺今も貴方の影がある
なるもんかガンも痴呆も寄りつくな
悪いとこないか無いかとドック入り

大阪市　熊代菜月

容姿など気にはしないと言いながら
寒二月水仙だけがおらが春
秋刀魚食むわき目も振らず骨はずす
温い手だにっこり褒めて放さない
旬すぎた女にほしい茜雲

大阪市　星野久子

お粗末な大臣議事をおくらせる
星条旗におんぶにだっことは哀し
語るべき友皆逝きてわび住まい
その筋に怯え吐き出す隠し金
島民の意地権力で押さえ込む

大阪市　岡本久峰

すっきりと見たいこの目で美しい国
ただ咲いてかけ引きもなく散ってゆく
もう少しおきばりやすと電子辞書
同窓会ときめいた人もういない
老い知らず胸に炎の同窓会

大阪市　中村れんげ

産む機械支持率下げる装置付き
核抑止こそ安全という偽装
納豆を舐めて関テレ糸を引き
事故始末頭下げ方教えます
事務所費は困った金の預け場所

大阪市　近藤正

戒名のあくび聞える小引出し
手のひらで切った豆腐のおみおつけ
そのうちにものにしてやる炊飯器
葬式も三日続くと疲れます
時計見てせかす焼香一つかみ

大阪市　伊藤博仁

逆境に母の力がほとばしる
力まずに余生たのしむ万歩計
大海原私の悩み小さすぎ
失言が次から次と波紋よび
渋滞に行きも戻りもままならず

大阪市　西川更紗

プレゼント一つ覚えのように薔薇
役所から生きているかと問うハガキ
たちまちにカメラが囲む舞妓さん
初めての入歯にぐずる口の中
柱だけ見れば怖くて住めぬ家

大阪市　大川桃花

貧乏は子供の時に鍛えてる
大寒も妻の手料理あったかい
尻尾ふる事も覚えて生かされる
本題を離れた話面白い
何回も聞いたと言われ歳を知る

大阪市　奥村五月

只酒に酔って片棒担がされ
嘘泣きと知りつつ僕が謝った
おっとっと溢れる前にすする泡
チャルメラの響きに腹の虫が鳴る
非常口まず確かめるカラオケ屋

大阪市　井丸昌紀

公開の車内化粧は揺れながら
夕張に緑の春はまだ遠い
何でもするロボットやけど出来ぬ恋
あの頃は貧しかったが一つ膳
米と変えたあの母の帯今何処に

大阪市　川原章久

親切に会うと涙がすぐこぼれ
逝くときは万歳ぐらいしてやろう
人に言うお礼が妻に出てこない
意識せず一つひとつを忘れゆく
貧困な文化予算にでかい無駄

大阪市　川端一歩

森の木を食べる散らしを減らしたい
森林浴体に良いと歩かされ
おみくじは凶福引きはテレビ当て
食欲の孫を迎える節料理
葬儀見て友の偉大さ思い知り

大阪市　池上清治

大阪市　古今堂　蕉子

腹へらぬ言うて食べだしたらはいる
忘れてはる確か礼する言わはった
夫婦だから言うべきことと言わぬ事
本音言う人とつきあい疲れてる
コロコロと笑いまんまと煙にまく

大阪市　岩崎　公誠

うちの猫ミス大阪と自慢する
歳ですと言われてからの万歩計
暖冬の野菜安値に萎れてる
負け組の我慢比べは見ておれぬ
仁術と算術つかい医師のビル

大阪市　鶴田　遠野

盃をコップに変えた自棄の酒
妻の愚痴娘経由で聞いている
接待に心の鍵はして出かけ
老々介護やがて知るだろ子供らも
笑顔美人ハートはいつもノーメイク

大阪市　榎本　舞夢

福袋開けて見るのがおたのしみ
落しても居場所の解る財布欲し
気の弱い所もあって憎めない
声聞くと元気になると友電話
一流のライセンス取りホームレス

大阪市　津守　なぎさ

花だよりインターネット旅プラン
スケスケのドレスで冬の謝恩会
あたたかいニュースはでかい生田さん
ジョギングへちらほら咲いてゆるむ頬
色違うカバンが弾む通学路

大阪市　松尾　柳右子

ふくらんだ餅食べしわが伸びますよう
夫達者ついて行くのに苦労する
工事中端っこ通ってお辞儀して
ゴメンネと雑草引き抜く路地の鉢
ウォークの川すじ犬が蝶を追う

大阪市　清水　絹子

奈良駅舎見上げる友のおさな顔
失言すら大臣ならば許されぬ
修二会誘う二つ返事の京の友
降る雪に今が試練と撓る竹
飲酒運転逆らい通し子を守る

大阪市　小谷　集一

危機感のない毎日が物足らず
鉛筆の喋るとおりに書く日記
一つずつ個性を持っている絆
斜めから光を当てて妻を見る
人の輪の柱は温い思い遣り

ふられたと思わしとこうラブゲーム
草笛の親子に風も和んでる
風邪熱で息子夫婦に拉致される
美しい国でいじめの花が咲く
鉛筆は削ってあるが句が出来ず

大阪市　川久保　睦子

ペコちゃんも首を振り振り悩んでる
寝こんでみてやっと人間らしくなる
病床で時に棲みつく小さき鬼
大切にされてもやっぱり家が良い
一度でた憎まれ口は飲みこめぬ

大阪市　小糸昭子

夫が弱ると私が元気づく
愛だけがあればいいとはナンセンス
最初にはドキドキとした救急車
命には別条ないとカテーテル
たっぷりの母乳を持っている自信

大阪市　神夏磯典子

顔パスが効かなくなった改札機
方言を忘れないのも郷土愛
沖縄のジュゴンは海を汚さない
海の幸てんこ盛りする旅の膳
ダイエット財布の方が先に痩せ

大阪市　榎本日の出

相応に歳を取るのも悪くない
姿見も性格まではうつさない
流されぬようにあなたの袖を持つ
そよ風に花はためらいなく開く
筍にほんのり赤土の匂い

池田市　栗田久子

小春日のそこまで温い窓を開け
運命の糸を手繰って冬木立
ちょっぴりの幸せで良し夫婦箸
人並みの暮らしが欲しい昨日今日
七十路の坂ちょっぴりの欲を持ち

和泉市　西岡洛酔

病人に元気出せよと励まされ
年金で元気長生きしています
息災を肩たたき合う初句会
初孫が帰省元気をもらう朝
指切りをしたがやっぱり不安だな

和泉市　横山捷也

ごめんねといじめた方の子も逝った
戴いた句集の誤植告げられず
歳ゆえの涙脆さも忸怩たり
無為の日の欠伸は顎が外れそう
誰にでも手相の乱れ言う易者

泉佐野市　山本蛙城

茨木市　藤井正雄

願い事阿弥陀と長い立ち話
人遣い上手な社長菜っ葉服
窓際に同情次は俺の番
辛抱だ大人になれと酌がくる
スペアキー掃除洗濯子の下宿

大阪狭山市　矢野梓

手をあげて挨拶してる冬帽子
マスクして目礼だけのすれ違い
ゆっくりとお茶入れかえて無駄ばなし
同い年なのに笑えば十若い
二人して大騒ぎする置き忘れ

交野市　田岡九好

クラウンで大根二本引いて行く
ぎりぎりと自縄自縛の物思い
暖冬や中也の詩集など読んで
物忘れ思い出さずに待つばかり
身の内の餓鬼がもの食うわが姿

交野市　山川日出子

杖無しでお花見できたありがたさ
指ぎつね赤子笑ったバスの中
目ざめたらとてもいい句が消えちゃった
いつからか私よたよたおばあちゃん
そのまんま新しい風吹かせるか

交野市　森本弘風

急停車俺も痴漢になりさがる
OB会平均年齢喜寿と言う
平成に産まれた孫も受験生
血糖値減らせと鞭の万歩計
今日もまたパソコンさんに遊ばれる

河内長野市　山岡冨美子

思わないことは言えない四月馬鹿
わき道へふと迷い込む花の闇
凡人のあと一息にある苦労
立志伝苦労話をふくらます
言い訳に苦労しているエライ人

河内長野市　坂上淳司

雛壇に並んで御座る鉄面皮
生き恥を曝してもなお金バッジ
失言も無罪放免永田町
雑煮餅義歯に噛みつき放さない
わらび摘み秘密の基地が丸裸

河内長野市　井上喜酔

義理チョコの心配も無し七十路
気配りで疲れた上に切る自腹
おだやかな喜寿へ嬉しい祝い酒
がむしゃらの人生でよし向こう見ず
極楽があると信じて生きた過去

河内長野市　村上直樹

ほとぼりが冷めれば他愛ないケンカ
うっとりとワイン片手にスロージャズ
春を呼ぶ水琴窟に母の声
ちょい太が丈夫と医者に宥められ
帰巣本能バタンキューでも妻の許

河内長野市　水谷正子

気に掛かる産む機械より温暖化
自立とは格好いいけど身勝手も
引出物遠い昔は傘だった
カルチャーで昔話と孫は駄目
もう選挙朝から雑音聞かされる

河内長野市　植村喜代

だんだんにしっかりするのが孫の方
親のまねマフラー編んで頼まれる
親も子もどうなってんの給食費
ハワイ癖ついたか毎年お正月（二女と婿両親）
血圧が上下するけど気にしない

岸和田市　小島笑司

春一番放浪猫も家の中
春場所も成吉思汗にさいなまれ
春目覚め啓蟄待てぬ虫の顔
春雨に濡れて散策京の夕
春休み孫がチョコチョコ義理運ぶ

岸和田市　岩佐ダン吉

道はるかでも核ゼロをめざしたい
割り勘でしんどい話まだ続く
湯につかる言い負けたこと泣いたこと
空っぽの話長なが聞かされる
忘れなさいなどと軽くは言わないで

岸和田市　森元ふみよ

喜寿祝い友が集って昼の宴
捨てる物無いほど始末戦中派
おべんちゃらたまに人の輪滑らかに
緊張の糸をほど良く保ってる
産む機械後でお詫びの不埒者

岸和田市　雪本珠子

安らいだ気持になれる人と居る
ベランダで風の囁き聴いている
作句にも時代の風を取り入れる
若者の群れに交じって若返り
愛されるように振舞う野良の猫

岸和田市　土橋房枝

優しさに弱くなってる老い一人
独り居の持ち味生かす母の趣味
まだ若いつもりで行かぬ老人会
老いること虚しいなどと思うまい
飽食を改めないと病んでくる

岸和田市　堤　楢代

寒肥をやって春待つ顔になる
この豆も遠い国から来たのかな
産地見て買物をする主婦の顔
ケイタイはあるが携帯忘れてる
迂闊にもかつら忘れて外に出る

岸和田市　原　さよ子

話したら逃げていきそう夢を抱く
相談の足はやっぱり母に向く
おだやかに話したいから明日にする
日記には腹の立つ日の字が乱れ
そっけない言葉に夫婦の愛がある

岸和田市　井伊東吉

厳冬の無いまま春へ一直線
強面の顔台無しの花粉症
産科医の不足放置し産めと言う
球春の話題やっぱりタイガース
勿体ない出来過ぎ野菜埋められる

堺市　矢倉五月

朝の蜘蛛逃がして宝くじ買うぞ
出掛けには小言を言わぬ母でした
運だとは言われたくない話ぶり
城崎で雪が降らぬを悔しがり
今日もよくやったと梅酒風呂上り

堺市　石堂潤子

昼めしは何でもええと言う炬燵
白菜漬シャキシャキちょっとおすそ分け
無人売場ポッポッと開く菜花の黄
歯科医師のマスクの顔の他知らず
似合うかと猫に聞いてる赤い服

堺市　柿花和夫

涙声きかれたくないのでメール
暖冬でも夕陽しっかり冬の顔
初恋談肴に妻と飲んでます
浅知恵はすぐに口からとんで出る
お早うと新地のネオン灯をともす

堺市　西村りつえ

節分に端数食べてる五色豆
ニュース毎人の怖さに身が震え
悲しみに涙も出ないドライアイ
待ち惚け同士で行ったシネマ館
湯豆腐にしっとり絡む箸二膳

堺市　宮本かりん

嬉しさも噛みしめている二人膳
青空に誘われて行く散歩道
よく回る口に似合わぬ手の動き
仲間だな握手した手がはなれない
ユニークに活けた花から春の声

結び目のように生まれてきたこども
キャンプ地のロープ結びはたのもしい
おむすびがごくろうさまとまってます
冷蔵庫ひらくとひとり暮らしみえ
成人式たもとをひらく街の風

堺市　近藤豊子

捨てるのに半日かけた古名刺
みどり児に微笑みかける癖がつき
囚われて熊は鎖の匂い嗅ぐ
大食いを見世物にする罰当たり
バラエティーが聞いて呆れるワンパターン

堺市　奥時雄

とろろめし雪の予報を聞きながら
御詠歌の終りの鈴は柔らかな
新しい眼鏡に顔がなじまない
黒豆が煮えるみじかい夢の間よ
差し向かい見えぬ世界を響き合う

堺市　山本半銭

極寒の二月と言うにこの温さ
入学祝して古希祝忘れられ
厄除けの饅頭屋にも列が出来
暖冬に一足早い花粉症
私腹肥やし我慢を強いる政治家だ

堺市　源田八千代

強かで涙もろくていい女
バカと書き好きとつぶやく窓ガラス
大過なく決まり文句で職を辞す
老病死思い煩うことはない
重ね着を日に日に脱いでいく四月

堺市　加島由一

冷やかしに入りまんまと買わされる
妻という名の相棒に支えられ
義理堅いお方早朝から電話
単身赴任デパ地下の娘と顔見知り
おトイレはどこと尋ねる客ばかり

堺市　村上玄也

変わり身の技は磨いてあるバッジ
隣にはかなり太目の天女寝る
サクラサクやれやれうち中眠れそう
トリックかも知れん改革いうお触れ
無理をしてブランドものに頼ってる

四條畷市　吉岡修

駅弁の箸で車窓の富士を指し
抱きしめて子供の角を丸くする
5Bで告発状を書き直す
白紙委任あとは野となれ山となれ
脱皮できずまだしがらみの中にいる

吹田市　太田昭

吹田市　須磨活恵

花札の鵞が啼く春炬燵
長い橋渡って忘れたことにする
空缶を蹴るとカランと春の音
明日のこととともあれ今日はメザシ焼く
掛軸の鯉も跳ねてる春の床

吹田市　瀬戸まさよ

下戸でして味と値を聞き贈る酒
時間差に負けたライバル店を閉め
大国のエゴに緑の地球失せ
暖冬に中途半端な庭木立
節分の海苔巻き軽く見られてる

吹田市　野下之男

産む機械何やら怖い妻の顔
風邪引けば少し優しい妻の声
友垣に会えて生徒の日に帰る
猫なりに猫好きな人知っており
ペンギンに覗き見されて目を外らす

吹田市　穴吹尚士

生き下手な男で筋を譲れない
大臣の舌はしばしば生え変る
ソプラノにバスが言い勝つことはない
だんだんと手抜き料理に慣れてくる
おばさまの鳩が出そうな頭陀袋

吹田市　大谷篤子

私にわたしついつい甘くなる
よく喋る人が静かで気にかかる
ありがとう何度聞いてもよい響き
丁寧な挨拶すこし胸騒ぎ
参加してバラ一本をお土産に

吹田市　早川棲世

難解を詩人に問えば他愛なし
セックスイズライフのような文学賞
咽喉はもう楽器ゴンドラ漕ぎ唄う（南欧　3句）
アルルとはゴッホ熱情二〇〇の絵
ゴーガンとゴッホ今夜は値の話

吹田市　木下敏子

残り火を煽ぐ散歩の赤い靴
その先は考えないで弾む靴
病んでみて人の痛みもふと判り
ほめられた手相雑巾しぼってる
引き際を飾る言葉が見つからぬ

高石市　浅野房子

身内とて獅子身中の虫もいる
作戦は朝のコーヒー飲みながら
見逃した長所短所はしかと見る
ゆっくりと家事をこなしてあとゴロ寝
本物かどうか区別もつかぬ愛

高槻市　富田美義

苦労した数だけ作り笑いする
生きるとは自分で顔を洗うこと
限りある細い命をそっと撫で
花は咲く歳を取っても取らずとも
天と地の狭間でもがく僕がいる

高槻市　杉本義昭

もう帰ろう浜辺の月と泣いたから
風雪に耐えて明日みる鬼瓦
がらくたを捨てたいけれど捨てられぬ
シンプルな夫婦になった定年後
百歳は生きてるだけでほめられる

高槻市　乙倉武史

球春へ夢も膨らむキャンプイン
温暖化花咲く時期をまごつかせ
環境を壊しに黄砂やってくる
人間を機械に譬え総スカン
カラオケの蛙うぬぼれ自画自賛

高槻市　指宿千枝子

行きはよいよい帰りはとても怖い森
ビルの森蝉も小鳥も来てくれる
会うたびに握手している幼友
あるがまま自然を友に暮らしてる
午後三時エスプレッソとアダモなど

高槻市　傍島克治

親展の封書で中身疑われ
うぬぼれが心なきこと喋らせる
辻褄を上手に合わす友が好き
辛うじてプライド保つ元部長
葉桜に盛り上り欠く花見酒

高槻市　生田義一

活溌な質疑に総理たじたじと
お坊っちゃまボロが次次支持下り
歯が立たぬせめて八百長の噂でも
朝ドラの明るい会話年齢忘れ
ほんのりと酔いが回って軍歌出る

高槻市　井上照子

花便り顔がほころぶ老夫婦
大学へやりたく親は二度の職
投げ売りに惹かれ不用の品も買う
歳だから綺麗にしたい薄化粧
サングラスはずして万朶の桜褒め

高槻市　大崎侑子

記憶では森林だった大団地
都会化で森林浴もままならず
故郷の森は見るたび削られて
ガラス戸に映る猫背はこの私
場違いのおしゃれだけれどいかしてる

高槻市　執行稲子

居留守など失礼だカーテン揺れている
迷信よっと一喝嫁は現代っ子
おもろいなイナバウアーを一歳児
忘れ物取りに来たことまた忘れ
ためらいは花占いできめて良し

高槻市　左右田泰雄

老眼鏡だけでは足りず虫めがね
体重計ちょっと斜めに乗ってみる
底辺で犇き合っている痛み
あどけない泥んこの子に罪はない
新入りがなくて吹かせぬ兄貴風

高槻市　瀧本きよし

じいちゃんのフランス料理箸が要る
腹立てて投げたい石のない都会
丁寧な案内先は黄泉の国
残りない余生に閻魔呼びに来る
ときめきが待っていそうな遊歩道

高槻市　西谷治三郎

平成になってもまだいる悪代官
敬老を政策に入れ税上げる
またガリ勉ゆとり教育見直しに
いじめまで定義を作る文科省
社長さんお詫び上手な特技要る

高槻市　佐甲昭二

奥の手を聞き出したくて座りかえ
途中まで聞けば察しのつく話
コーヒーのお代わり愚痴が止まらない
ほんのりとしながら的は外さない
逆転がありそでテレビつけておく

高槻市　峯村勲弘

がたがたな割りに使える足と脳
あの人が来ると雰囲気盛り上がる
髪の色黒に戻してお振袖
暴言の大臣給与僕の税
味気ない食事も痩せるためならば

豊中市　岸田知香子

園バスを見送り息つくママ談義
同年代人の振り見て安堵する
リニューアル定休返上模様替え
下り坂寝た切り用心異口同音
孫誕生産着編む手が弾んでる

豊中市　山門タミ

芋たこのお好み焼をまねて焼き
ガス事故へ鼻がやたらと煩そなり
食卓にテレビの料理まねて出す
痒い背に中指だってとどかない
里の梅山鳩目白来てる頃

豊中市　水野黒兎

童心が恩師を囲むクラス会
小波が打ち消すほどの軽い嘘
飲みこんだ言葉に胃腸くすぐられ
傷跡も自分史のうち古机
ねぎ坊主いい子わるい子紙一重

豊中市　藤井則彦

フルートが奏でる森のたたずまい
練り直すほど悪くなる妥協案
追っかけてくる野良犬にあかんべえ
散策の森が書斎という余生
病む妻よ二次会やはり止めておく

富田林市　大橋鐘造

二の足を踏んで倖せ取り逃がす
恋一つ知らずに逝った若い鷲
蟹食わせ熟女三人黙らせる
手の内を読まれてからのコップ酒
魂まで奪うお方にまだ逢えぬ

富田林市　中井アキ

ひとり欠けふたり欠けするクラス会
集まればニックネームが跳びはねる
銀河鉄道で亡夫に逢いにゆく
四世代要にいつも老母がいる
悪友を集めて記憶取り戻す

富田林市　片岡智恵子

失言をしてから喋るのが怖い
長寿法勉強してた友が逝く
耳鳴りはよーく聞こえる老いの耳
春休み終りほんとの春になり
僅かでも必要とされ頬ゆるむ

富田林市　稲川惠勇

立呑みで渇きをいやすちびた靴
妻と子の狭間で我慢しています
職降りて妻にも我慢強いられる
青い星ヒト科のエゴで焦げはじめ
割り勘と知り胃袋が気負ってる

富田林市　池森子

ふところに祈りポケットには未来
極上の春です千の風吹いて
恋人が春の帽子をくれました
春は気まぐれこころして生きようぞ
いたわりの風に甘えてはならぬ

富田林市　藤田泰子

ハート型のチョコレートには騙された
深呼吸体の毒をみんな吐く
うつの日にできないことを燥の日に
花殻をふんわり入れて抱き枕
コーヒーたっぷり朝の利尿剤

暖冬に寒中見舞出しそびれ
過去を問うだんだん淡くなってくる
春一番のひびきに油断してしまう
どこへ行っても駐車禁止があるこの世
買い物のついでにバレンタインチョコ

寝屋川市　籠島恵子

もっと勝たんと願っている子供
すぐ負けてきょとんとしている力士
賞金が沢山かかる大関同士
うぐいすの谷渡り春まっ盛り
賭け時代バチンコ競馬止められず

寝屋川市　江口度

花活けて少し華やぐ仮住い
珍しく葉付き大根感謝の日
いい日和勿体なくてよもぎ摘み
乗り切ってほしい背骨が頼りない
お祝いの品が待ってるお引越し

寝屋川市　平松かすみ

異次元の心通わすナースの目
殺伐な世にナースの愛数多
逆縁を一緒に泣いてくれた友
灰色のうろこをまとう我が心
幸福を配る天使の目が温い

寝屋川市　坂上髙栄

逝く人がつぎつぎ心消えていく
席譲る少し私が若いから
神様のような従姉妹が床に就く
一日も早い回復祈る日々
悲しんで涙を流す叔母や姪

寝屋川市　冨山ルイ子

駅伝に化粧忘れた娘がきれい
格安でこれほんまもんと臭いでみる
予定は未定遊ぶ話はすぐ決まり
バーゲンになるとひょっこり見栄を張り
よう言わん話弾めば言うてはる

寝屋川市　太田とし子

僅かでも前向くことで日々新た
群れるのが苦手わたしはエゴイスト
それぞれの都合で仇となる善意
モノクロの浜辺水仙香りたつ
想い出の向う逢いたい人がくる

寝屋川市　森茜

とどのつまりを考えている預金帳
化野の風よいつかひとりになる定め
灯明ゆれてひょいと亡母が顔を出す
餅花を咲かせて亡母を思い出す
福袋女は夢を詰めたがる

羽曳野市　吉川寿美

羽曳野市　酒井一壺

命掛け掴んだ人に背かれる
なぜポスト赤いか先生困らせる
真っ直ぐな人で方便使えない
いそいそと出て行く父にわけがあり
自己流の方程式で生きている

羽曳野市　三好専平

サングラス外すと犬が寄ってくる
サングラスで脅し核でまた脅し
深海魚まで獲って食う人の知恵
美しい国に歩ける道がない
日用品百均だけで間に合わせ

羽曳野市　安芸田泰子

暖冬の梅に鶯まだ音痴
美しい人には妥協してしまう
軽いうそいつか心の枷となる
雑草になって気ままな風と住む
号令をかけて抜け出す朝の床

阪南市　森村美花

千の風聞いて恐れるものがない
逞しく生きよう水仙の香り
テレビ見る夫の背がまるくなり
温泉に夫婦の溝を埋めに行く
暖冬に世界の森が揺れている

東大阪市　安永春

如月に春の嵐が吹き荒れる
人生を気力と思う弥次郎兵衛
ペラペラとおためごかしを聞き流す
ハードルに切り込む気合持っている
北風も耳を澄ませば春匂う

東大阪市　佐々木満作

茶柱の湯気にほのぼの夫婦愛
還暦になって互いを認め合い
電柱にからみ苦闘の奴凧
鏡には真実の心読まれてる
ふんわりと雲に乗っかり見る地球

東大阪市　北村賢子

せつなさとぬくもり胸に始発駅
チャン付けで呼ぶ友からの故郷の味
ささくれた心やんわり故郷の風
老老介護もう響き合う余地が無い
日本のいまに涙をするハート

東大阪市　笠井欣子

これからが旬と思って弾む足
散歩してうつもこっそり捨ててくる
この頃は夫が戦力有難い
大声で笑う貴女に春もらう
鰯より鰻がいいと豆撒かず

福は内鬼もお入りにぎやかに
拾うこと考えてまく豆の数
賞味切れペコちゃん会社泣いてます
細くなりダイヤの指輪回り出す
同窓会男子はみんな好好爺

東大阪市　米田水昇

輪廻転生せめてこの世を楽しもう
百歳が折り返し点ならいいのにね
足踏みをしても時間は停まらない
女難の相と言えば男はちょろいもの
手帳には僕の裸が書いてある

枚方市　寺川弘一

草餅に故郷の春の走馬灯
雑草へも天は恵みを忘れない
切札を握り作戦甘くなる
責任を取ってはくれぬ占い師
舞うだけを舞うてホタルの尊厳死

枚方市　海老池洋

孫電話卒園メールに花が咲き
愛少し忘れかけたか無口です
幸せは妻と私のラブメール
六十路坂妻を祝う子の笑顔
妻も子も孫までいてる六十路坂

枚方市　二宮山久

付合いも喪中はがきで済む程度
友達の挫折噂をバネに生き
子供らがいずれ私を焼き捨てる
歩くより特効薬は無い持病
代表が様子見に来た義理見舞い

枚方市　宮川珠笑

年のかず節分の豆食べおおす
沸きましたと告げるメロディーに返事する
かぶらむしひき立てている柚の香
水仙が咲いているから庭に下り
仮名遣い辞書を手許に苦戦する

枚方市　森本節子

土思いやさしく落ちていく枯葉
逃れたい時に当たりのあみだくじ
エンピツと消しゴムあれば日は暮れる
子に貰い孫に渡したお年玉
病院へ戻る年始の重い靴

枚方市　伊達郁夫

乳腺の異常に気付く露天風呂
菜の花が連峰の雪染めている
モニターのカメラが腸内駆けている
暖冬に関節痛の好都合
美しい国へ溜息吐いている

枚方市　丹後屋肇

藤井寺市　髙田美代子

いずもやの鰻日本産まれかい
氏も育ちも大事と思うことがある
釘差しておいても頼りない人よ
倦怠期お互いさまで目を逸らす
大変な時ほど落ち着いていよう

藤井寺市　鴨谷瑠美子

鈍行の窓夕焼けに包まれる
桃の花ひとりぼっちも悪くない
撮される薔薇一段と美しい
読み終えるまで気付かずにいた夕餉
人助けテレビの美談久し振り

藤井寺市　中島志洋

肩書きも野心も捨てて趣味の日日
本人の影に慌てる立ち話
ライバルの思いもよらぬ人間味
偶然に会った芝居をする二人
モンゴルのパワーに負けている国技

藤井寺市　若松雅枝

骨密度良好ですと褒められる
ウォーキング回り道してつくしんぼ
日向ぼこ猫も老いたか膝に乗る
明るくて悩んでるとは思えない
無洗米やはり研がねば気がすまぬ

藤井寺市　楠昭子

手を握った割に得票あっち向き
とげ抜いてまだこだわりが抜け切れず
つまらない事が根っ子にまだ残り
逆らわずついて来ました夫婦ばし
少し金出来たが愛がうすくなり

藤井寺市　鈴木いさお

オレ流を通しバランス崩さない
瞬きをする間も惜しい名勝負
そんなことしていませんと朝青龍
日に五キロ歩いてメタボ追い払う
ビリケンはん商売あんじょうたのんます

箕面市　出口セツ子

松葉杖ついて優しさ見えてくる
神様に試されている松葉杖
年寄りに席譲られる松葉杖
松葉杖弱者の視点など学ぶ
松葉杖になってもじっとできぬ性質

守口市　井上桂作

春よ来い暖かすぎる冬ぶきみ
温暖化冬眠できぬ熊もいる
人数が加害者になるこの地球
温い子供に触れて元気でる
好きでない酒を飲みたい時もあり

窓全開冬の埃を追払う
ご機嫌を直せと蕗の薹丸い
趣味も介護も捨ててお四国回りたい
四国路は遍路の笠もぬくそうに
大きい希望満タンにしてランドセル

八尾市　宮崎シマ子

言う事はまだあるのだと炭火つぐ
立ちかけてまた乾杯の年忘れ
京の春炭火つぐ手の白さかな
もて余す豆の倖せ年男
片方の手袋をぬぐ別れかな

八尾市　長谷川春蘭

世渡りは下手でもちゃんと八十路ふむ
乗せられて乗せて平和な日の続き
母さすがラップの切れ目すぐみつけ
ストレスは笑いと酒でふっとばす
幸せな日は何となくようしゃべる

八尾市　吉村一風

四季の風知らぬ花屋のカスミ草
冬終り街に溢れる淡い色
メロンパン分ける相手のないひとり
踏み出した足に調子を聞いてみる
こたつから最短距離に全て置く

八尾市　生嶋ますみ

若ごぼう春がきました仏様
無理しなや母の言葉が背中追う
人ぎらい花と打ち解け話する
先輩と立てて親しむ友がいる
勉強は好きだが頭よくならぬ

八尾市　山本宏至

多数決見切り発車をする驕り
窯の里ぐい飲み二つ旅記念
三三九度の固めは知らず共白髪
幸福行きの切符を抱いて共白髪
コンコース人間模様渦を巻く

大阪府　籾山隆盛

礼節を失い劣化する日本
生きて死ぬ何のヒントもないままに
読むこと出来て書けぬ漢字にけつまずく
残酷なことは突然やってくる
ふんわりと恋が生まれるカプチーノ

大阪府　米澤俶子

味ほめた客半分も食べてない
本命チョコ妻に貰ったことがない
枯木にも花を咲かせる恋をする
社の空気花見の話には触れず
不安です我慢を知らぬ子が増える

大阪府　澤田和重

心電図悪いと医者に脅される
カテーテル検査へ無事を祈るのみ
まな板の鯉だと思う検査前
すべてパス命拾って日本晴
揚げ足を取る野党にも嫌気さす

大阪府　前田ゆい

下手な字が引き立て役をする色紙
コーヒーを飲んで高める集中力
老けた友口には出せず同い年
遠い日の辛さ忘れて今の幸
若き日の姿そのまま息子の法事

大阪府　野田栄呼

ヒロインになったつもりの頭の高さ
胸底にロマン大事に包みおく
猫柳せせらぎ聞いて輝やかす
非常口たしかめてから持つマイク
真知子巻き昭和ロマンを匂わせる

大阪府　桑田ゆきの

裏芸に秀でて出世する御仁
塞ぎ込んだ僕に吉祥天の笑み
福相と貧相今日も手を繋ぐ
真っ白なYシャツ今日は大事な日
午前様へ妻はちっとも騒がない

神戸市　山口光久

勘定は黙って済ます人が好き
均等法　家事分担を押しつける
お好みの入浴剤で湯を巡る
ふる里の海でこころの目を洗う
男見る目を養ってまだ独り

神戸市　両川無限

言わなくていい事言ってからの悔い
好奇心きょうもあるある生きている
テレビオフそんなことにも勇気いる
長風呂を心配し合う夫と居る
駅弁に旬と訛りの盛り合わせ

神戸市　田中章子

もう一度着たいとM寸捨てられず
弱い者苛めて美しい国かなあ
バレンタイン私へ気張ってチョコを買う
ごめんなさい花粉症です鼻をかむ
おばちゃんですバッグに飴ちゃん入ってる

神戸市　山口美穂

有明の月が背筋を凍らせる
目覚めれば喜び探しの朝がくる
生きていて生かされているのに気づく
未来図を両手で掴むまで生きる
悩んでも出ない答えをまた探す

神戸市　山田婦美子

神戸市　伊勢田　毅

チョコ一個バレンタインが過ぎてゆく
百薬の長が音たて喉通る
待っていた春だ多趣味な妻走る
謝罪して七十五日じっと待つ
天下るルートそっくり民営化

相生市　中塚礎石

赤トンボ噂話をまきちらす
年金でメダカぐらいは飼えそうだ
古本を売っては買って読んでいる
雪積んだ貨車が今年は目につかず
歳時記を騙す野原に花が咲き

芦屋市　黒田能子

ひと言がくすりのように効いてくる
一病がきっかけでするウォーキング
居眠りの隣の席がよくしゃべる
乱暴な言葉の裏の温かみ
遠い目をして考える人になる

尼崎市　春城武庫坊

挨拶は気軽に冬の温い朝
血圧は正常であり寒に耐え
老いの身に冬の温い日ありがたい
喜びは渇いた喉に流すお茶
歩けたらお出で青谷梅が呼ぶ

尼崎市　春城年代

気胸病む留学の孫朝に夕に
時の流れが読めなくなってたそがれる
顔から転びくちびるの傷隠せない
ふだんの化粧適わぬ顔にマスクする
電子音にうっかり返答してしまう

尼崎市　田辺鹿太

茶柱が立ったぐらいで嬉しがり
乾燥が怖くて水をたんと飲む
暖冬を嬉しがりつつ気にしてる
この国も一度換気をしてみたら
茶道具を揃え番茶を飲んでます

尼崎市　軸丸勝巳

温暖化たまの寒波が身に沁みる
耐震偽装まだあったのか同じ事
失言の本音政治が見えてくる
介護保険僕の残高貯めといて
医者ぎらい　そうはいかない八十路坂

尼崎市　長浜美籠

人柄をあらためて知る冬の底
また一人朱線を引いた住所録
味方だと思う神さま仏さま
手垢つく本が心のよりどころ
満足気な笑顔を返すラーメン屋

伊丹市　山崎君子

島見えて水仙招く温い風
ぽかぽか陽気梅も五分咲き庭飾る
宅急便春先かけるふきのとう
義理チョコ廃止淋しい笑顔老院長
二浪の子髭剃ってくる好い笑顔

川西市　西内朋月

早食いの癖は直らぬ戦中派
喫煙をやめるきっかけ探してる
名も知らぬ花がひっそり庭の隅
気が付けば税金だけが増えている
年金が一年毎に減っていき

川西市　米原雪子

暖冬もいろいろ悪さするらしい
人生の彩り想う八十路坂
携帯の型の古さを自慢する
下校の児等会えば挨拶よく出来る
通知票兄弟格差ありすぎる

三田市　石原歳子

いろいろな人間模様レジで見る
近道にこっそり通る駐車場
新しい服を着るのは気恥ずかし
横に見て素通りをした靴売り場
うっぷんを布団叩いて晴らしてる

三田市　久保田千代

寒空に物言いたげな母の影
反応を見たくてちょっと拗ねただけ
跡つぎに椅子を譲れぬ長寿国
余生ではないまた今日が新しい
懐の深さを神に試される

三田市　堀正和

古稀からの作戦を練る湯治宿
砂むしの湯で中国語薩摩弁
砂風呂の熱で僕は脱皮する
湯治場でゆっくり弾く銭の音
菜の花に囲まれ足湯長くなる

西宮市　門谷たず子

毎日を大事に生きる朝の水
コンパクトいらいらと思い違いの貌
自己流の物差しがあるひとり部屋
くるみ餅なつかし母校は遠のいて
扉を叩く春風を待つ病だれ

西宮市　西口いわゑ

鰯も鯛も魚偏には変りなし
水族館竜宮城を思わせる
辛抱を語らぬ母を真ん中に
バレンタインチャンスをくれてありがとう
暖冬を喜んでいる花たちよ

人間ドック記念日のよう受けている
ビル林立　昔ばなしが沈みゆく
若葉薫るシンフォニックに乗ってくる
方向音痴　地図に叱られ山を下り
おかげさまで失うものに固執せず

西宮市　山本義子

ひな祭り場所を取らない掛軸で
親の愛振袖に詰めいま二十歳
新刊書二冊求めて冬籠り
新しい朝が来るから生きられる
落葉焚き四季ある国に住める幸

西宮市　菊池トミヱ

自由という字が大股に歩いてる
好い味方卵とバナナ褒めてやる
肺活量多いライバル居て困る
スナックへはホールインワン連れてゆく
アリバイを頼んだ相手敵だった

西宮市　坪井孝一

何だろう鬼がこちらをみて笑う
クラス会薬も並べ膳につく
風吹くな大好きな傘さしている
メールより電話の好きな母子草
豆撒きの貴重な声の男の子

西宮市　緒方美津子

あれこれと指図が好きなひっつき虫
暖冬が野菜農家を困らせる
賞味期限昔は母の舌が決め
従いて来い胸を張るだけ背が寒い
ラブシーン見てはケラケラ笑う妻

西宮市　片山忠

バースデーラジオ法話が身にしみる
暖冬がほぼ定着の感しきり
家族に乾杯テレビの日本美しい
空気入れ替えすこし気分も軽くなる
背を伸ばす歩こう今はそう思う

西宮市　牧渕富喜子

裏階段登ってUFOを探す
得点差増えてキーパー孤独なり
産声に予想もつかぬ子の未来
今日一日を期待してます深呼吸
間違った道を教えたかも知れぬ

西宮市　亀岡哲子

過去形にならない夢を抱いて生き
生きている限り明日に期待持つ
輪の中に知人をみつけ息を吐く
生き過ぎの警告だろか老いの税
寝たきりはごめんと散歩三十年

西宮市　秋元てる

姫路市　古川奮水

水仙の香りが部屋のアクセント
即席の麺で留守居を引受ける
陽を浴びたふとん取り込み午後のお茶
座蒲団を陽に当て明日の客を待つ
棟続き　いかなごを煮る春の風

兵庫県　大谷幸次郎

春うらら　うきうき春の彩を着る
春うらら　さんざめくギャル鄙を行く
鬼もまた仏の面を買いたがる
鬼もまた仏の慈悲に縋りたい
年金の糸に縋って二人連れ

奈良市　米田恭昌

スピーチが慣れぬ敬語にけつまずく
クラス会元気印の俺お前
妻の手に飼われて夫婦恙なし
老妻が義理チョコでっせときついこと
出張を思い出させた一人旅

奈良市　天正千梢

森羅万象いつも輪廻に流されて
視野せまくせかせか答出し急ぎ
八十は八十の華を抱いて生き
七五調深い呼吸で暮らしてる
まほろばの歴史を深く学ばんか

生駒市　飛永ふりこ

天国の母が愛犬出迎えに
皆違う意見纏めてああしんど
自己顕示淋しい底が見え隠れ
気がつくと私が踊らされている
言わんでも力あるなら認めます

香芝市　大内朝子

春風がひょいと運んできた男
苦労性ひとの心がようわかる
無くすものない人生を飛んでみる
煩悩がちょいとはじける春の宵
困難を一度逃げたら逃げ続く

橿原市　居谷真理子

淋しくない淋しくないとただ歩く
ちんまりと介護ベッドにいる命
嵐去り今日の私は泣き上戸
記憶から消します許しはしませんが
髪洗う誕生日という淋しい日

橿原市　安土理恵

怖いもの見たさに試すまむし酒
邪心だと思う真っ赤な包装紙
太ったかなピンクの豚の貯金箱
締めたい首奥歯ぎりぎりいうている
バラの首ちょん切るほどの仇討ち

大和郡山市　坊農柳弘

桃は移り気身ごもる術を風に問う
群雲が月に絡んで春のウツ
向き合えばほほ笑みそっとお釈迦さま
菜の花の誘いふんわり恋気配
錯覚の愛かも手招きの白衣

奈良県　渡辺富子

わだかまりきれいに消した修二会の火
悠然と構えて嫁かぬ産む機械
団塊の明日へマスコミ姦しい
嬉しいと糸になる目の父と酌む
ゆったりと愛の醗酵待つふたり

和歌山市　木本朱夏

振り出しに掴みそこねた藁がある
肉じゃがに家風があって嫁姑
根菜のエキスも借りる血糖値
骸骨のように佇む冬木立
引きずった影が重荷になった夜

和歌山市　古久保和子

根菜のコトコトと冬の鍋
金切り声上げてバイクが遠ざかる
あちこちの部品に湿布欠かせない
山の水落ち葉の味も少しして
どちらから見ても笑顔であるように

和歌山市　福本英子

もうすでに死語になってる親孝行
手遅れとすでに知ってる医師の顔
診察に辛抱くらべの待ち時間
胸襟を開くと我慢飛び散った
お姑さんの小言頭上を越えてゆく

和歌山市　榎原公子

穏やかにあける加齢という花野
根刮ぎ草引いてほぐれる肩の凝り
平凡で狭くて寒くなる話題
デジタル化の旅へ両手に杖が要る
失言の重さ大臣からならう

和歌山市　武本碧

あったかい若水を汲む蛇口から
ハンカチに包むときめき冷めぬ内
のほほんと生きて花粉がまといつく
役どころ踏まえ陽気に生きている
運命とがっちり組んだ喧嘩四つ

和歌山市　楠見章子

ファイト湧く電話をくれる友がいる
しわくちゃの手を繋いでくれてありがとう
生きている救いの風呂が沸いてくる
お風呂場の鏡若さを確かめる
ホームドラマ夫の軽いいびき聞く

聞き上手な耳へしゃべった内緒事
松竹梅どれにしますか夕の膳
ちゃりんこで古希の峠を越すつもり
まるで喧嘩しているような魚市場
ほどほどのチャレンジをして若返る

和歌山市　上地登美代

ストーブを赤々炎やし友を待つ
いも大根作り日日がたくましい
小半日さがしてやっとみつかった
頼まれて頼んで近所丸く住み
ケアハウス満員らしいバスがつく

和歌山市　細川稚代

物豊か心が痩せていく地球
風評に惑わされずに強く生き
千の風になった娘に励まされ
食欲旺盛メタボリックに悩まされ
身の丈に合うた暮らしへ妥協する

和歌山市　玉置当代

男の子にもてると言うていじめられ
無理したな法事の席の豪華版
食べさせて兄よ挨拶長すぎる
御夫婦でやってくれます孫自慢
化けて出るそれが君への贈り物

和歌山市　田中みね

テレビから疑う癖をつけられる
元気よい患者がひとり浮いている
喋らないからひと言にある重み
無理をした愛想笑いがぎこちない
気配りをされて重荷になってくる

和歌山市　喜田准一

新しい日本再生願います
信任す知事に期待頼みます
私欲捨て明るい県を考えて
私企業も己が立場自覚しな
裏金が今年の話題なりそうね

和歌山市　宮本三喜夫

納豆に右往左往のダイエット
生きがいに歩く毎日続く幸
毎日を歩く道辺に四季の花
苦楽越え生きるこの世は美しい
好きなこと出来る人生くずれない

和歌山市　松尾和香

過労せぬよう大事に守る喫水線
純粋な心互いを浄化する
お日様がコタツを出よと呼びにくる
夫作る野菜はプロに負けてない
紅白梅梅の便りは我が家より

海南市　堂上泰女

鳥取市　倉益一瑤

一生は夢花が咲き花が散る
いつまでも咲いていたいという造花
妬心メラメラ隣の花が美しい
通過駅わたしも女だった罪
合鍵をいっぱい持っていて孤独

鳥取市　岸本宏章

見下ろして孫がときどき無心言う
鬼の面描いても僕の顔になる
誰のためのゆとり教育だったのか
三人も寄ればトップがつくられる
一等が当たれば怖い宝くじ

鳥取市　岸本孝子

夫婦とや歯まで一緒に痛くなり
足湯ではいやだと体駄駄こねる
いつの世も男のロマン妻泣かす
上ばかり見るから肩が凝ってくる
喜んでいいのか雪の降らぬ冬

鳥取市　武田帆雀

キラリホロリ　ニッコリチクリ生きてます
手を叩く役目の会へ出て来よう
口髭が時にいいこと言いなはる
以下名のみ続く弔電あたたかし
気象台冬をとばして春の候

鳥取市　加藤茶人

お気の毒そうは言うても金出せぬ
よくもまあ嘘を重ねる二枚舌
別居する部屋もなく背を向けて寝る
結論の離婚があって妻の愚痴
心配の種が尽きない娘と暮し

鳥取市　植田一京

一つ山越せばも一つ山があり
炬燵から桜咲く日を待っている
それじゃまた別れたままに早三年
マンネリを時計の針に叱られる
足跡を遺す力が足りませぬ

鳥取市　西川和子

人生にてくてく回り道ばかり
てくてくと支えられたり支えたり
苦手だと言ってはおれぬハローワーク
肩の凝る事が苦手な針の耳
おだてられ苦手な事もやって見る

鳥取市　垢　寛子

国のため増産予定三人目
妖しげな捏造という字書いてみる
九条捨て残留孤児をまた見捨て
いたわりも素直にとれぬねじれ腰
かるたとり孫にせがまれ三度読む

鳥取市　宮脇道子

鬼や蛇が老いの背中におんぶされ
節分に私の鬼は捨てました
先が見えない日々を送って笑う鬼
暖冬でうきうき草木慌ててる
金貸せと甘くみられた無念です

鳥取市　山宮愛恵

美しいだけでは暮らし成り立たぬ
金の要る老後に不安つのり出す
何くそと言えるからまだ大丈夫
こだわりの節約徳として生きる
いい笑顔されて続けるボランティア

鳥取市　吉田弘子

三寒四温てくてく春が近くなる
咲いて散る自然の摂理すぐそこに
不揃いの顔にもキリリ紅を引く
美しい国替え歌でうたいたい
山ひとつこんなに違う陰と陽

鳥取市　福西茶子

よく見れば海も砂丘もうちの庭
平和だな座るとすぐに舟をこぐ
タンポポの旅夢はこぶ旅だろう
星ながめ十八番歌って仕舞風呂
子三人頼まれ産んだ子ではない

鳥取市　録沢風花

芋たこの放送時間短かすぎ
小春日の墓参ちらほら人に会う
昔の名呼んで燥いだクラス会
ジャムの蓋開くまで粘る老いの指
欲張って十年先を視野におく

鳥取市　冨山檳榔樹

発芽する春の音聞く好い日和
老いを聞くどしゃぶり雨が身に応え
ウインクをされてその気と春日和
気を抜くと透きある背中荒らされる
縄のれん潜る明るさ夜の顔

鳥取市　夏目一粋

遺伝子が生命線をもてあそぶ
円周を飛びだす勇気もっている
金あるが呑めなくなってくる矛盾
シャブシャブの肉が踊っている平和
日めくりを破り捨てたくなる齢

鳥取市　太田幸枝

てくてくと百まで生きる万歩計
定年でもつれた糸がやっと解け
長生きで老いらくの恋花咲かす
焼酎を飲んで長寿の会の輪に
うっとりとおしゃれの似合う孫を見て

鳥取市　奥谷彩子

弱った心支える子等がいてくれる
ダイエットの朝粥笑う体重計
押売りに居留守きめこむドアチェーン
エンドレスの愚痴片耳あけて聞く
齧る子がいて母の傘たためない

鳥取市　山本益子

秘密会議深夜の月に知恵かりる
村祭りガキ大将は花形に
振り込めと誘惑電話婆揺する
ケイ電の急な笑いは慎しもう
悪友の誘う電話に夫の愚痴

鳥取市　中村金祥

一波乱あって絆が太くなる
義理チョコもなくて自分でチョコを買う
見えぬ敵ところを変えて攻めてくる
そのうちにほんに機械が産むかもよ
満員の座席カバンが威張ってる

鳥取市　田村邦昭

まだ元気つぎは白寿と夢がある
食べ終えた皿が教える魚好き
溜息を隠し男は今日を生き
宝くじいつまで買ったら夢結ぶ
大吉を呼ぶ賽銭をはずんでる

鳥取市　土橋はるお

お通夜に長靴ばかり脱いであり
お隣の四十九日はいい天気
厨から熱ちちあちちと餅を切る
新知事が鶏インフルの初仕事
団塊の猪突猛進期待する

鳥取市　近藤佳子

この先はひとりゆったり生きるのみ
年賀状来てない友が気にかかる
菜種梅雨母が話しているような
福寿草のあたりに母が来て在す
川柳で若さのかけら掘り起こす

鳥取市　永原昌鼓

赤ちゃんの寝顔笑顔は見飽きない
焼き餅を焼いて焼かせるうちが華
ふる里へ錦飾れぬまま老いる
さば読んでみても通らぬ深い皺
山家には色鮮やかな四季がある

鳥取市　杉本孝男

売られ行く蟹がなげきの泡を吹く
ネジ巻くと動く時計は夫に似て
かたつむり偶には翼欲しくなり
悟るにはまだまだ早い喜寿の坂
けしからぬこと一つあり茶が渋い

鳥取市　福田登美

節分にやっぱり雪がやって来た
暖冬のシッペ返しが身に沁みる
春の陽に少しやわらぐご挨拶
ブティックから甘い誘いの便りくる
身ぎれいに老いたし背は丸くても

鳥取市　田中憧子

省く事弱者ばかりに向けられる
国会がいじめの手本見せている
掌をあふれるクスリ命綱
介護四年目張りつめた糸締め直す
我が頭なのに言う事聞かぬ時

鳥取市　有沢せつ子

慣れという鈍さ初心へ戻らねば
Eメール耳を孤独にさせている
ど忘れを惚けと言われたくやしさよ
特売に女心が立ち止まる
財産を茶の封筒に保管する

鳥取市　平尾菜美

朝ドラのスイッチせかす洗濯機
リッチへとあせる我慢の歩が切れる
嘘吐けぬしどろもどろが板につき
丸齧りするふるさとが身に染みる
愛一生宝に生きる幾山河

倉吉市　野口節子

貧乏神が破れ障子の隙間から
人並の苦労知ってる座りだこ
メニューにも飽きて夫は出て行った
晩学のメニューいっぱい遊び漬け
雑草の如く生きよと野に放つ

倉吉市　最上和枝

恥かいてかいて人間らしくなる
好きな友またこの世から名が消える
風呂が好き入浴剤は薄ピンク
体重も増えて元気を取り戻す
遅刻して苦手な方の横に席

倉吉市　松本よしえ

シクラメン春陽を浴びて嬉しそう
アナウンサー　ネクタイ替えて今日の顔
定期券何回も乗り得した気
寒いのに水仙白くシャンと咲く
隙間風猫と暮して寒がり屋

倉吉市　米田幸子

お迎えが今日か明日か不安です
てくてくと何時も何かを追っている
目も耳も口も達者で疎まれる
情けにはとっても脆い鬼瓦
人情の海にはまって抜け出せぬ

倉吉市　山本玲子

よれよれのお札はすぐに遣っちゃう
端っこの花も明るい方へ向く
文明の利器で電波は入り乱れ
ぽかぽか陽気つくしの坊や慌てだす
スペインの国技闘牛士の勇気

倉吉市　猪川由美子

心のガード固くて恋の歯が立たぬ
男不要人工的に子供産む
家計簿に化粧をしてもアバタ出る
モーツァルト癒やし効果は牛酒も
ボケ防止大人のぬり絵買うてやる

倉吉市　山中康子

干渉は避けてやさしさ撒きちらす
エネルギー貯え嫁に恩返し
父の咳掃除一番効いたよう
辞めるまでいじめ探しの言葉狩り
エルニーニョ異変つづきの陽がこわい

倉吉市　牧野芳光

ビル街の空真四角な空ばかり
幸せな音を探して耳澄ます
天秤棒がんばり過ぎた痕がある
思い出が落ちてくるよう木を揺する
歩いても帰れる店で酒を飲む

米子市　政岡日枝子

新しい暦に記す覚悟表
末席で弟の葬見届ける
姉よ泣くなと遺影かすかに笑んでいる
何故だ何故だと癌に倒れたおとうとが
満中陰似た風貌が寄ってくる

米子市　青戸田鶴

妥協の線どこらあたりで落ちつくか
温い友とどこまで歩けるか
税申告外青空でほっとする
菜の花のようなサラダで春をよぶ
神仏を頼った日々は忘れよう

米子市　門脇晶子

雪の夜は昔の夢と添寝する
手をつなぐ友達がいてあたたかい
どの木にも白い花咲くぼたん雪
歳月が憎しみ遠くさせてゆく
ロマンスグレーこれから花が咲きそうだ

米子市　木村春枝

雪像も地球を憂い涙する
物忘れ明日の踏み絵が気にかかる
旅鞄夢をしっかり詰め込んで
鄙の宿昔話に花咲かす
呼び合って元気な朝を確かめる

米子市　白根ふみ

寒ぼたんほんとは春に咲きたかろ
老いる目に節目を越えてからは運
雪ダルマ出たり消えたり暖冬に
満足度甘さ控えたぜんざいに
立春を過ぎてやがてが大雪だ

米子市　光井玲子

花粉のおかげ珍らしい花庭に咲く
にらみの利く老父がいるから安心だ
散る日まで自転車だけは乗るだろう
狂わない時計のような老父である
六年ぶり赤ちゃん増加うれしいね

鳥取県　下田茂登子

満足に妻の役目が果せない
五体満足それでも文句つけてみる
恋文は一度も書かぬ八十路来て
庭石に縋って泣いた過去もあり
黒幕の幕はいつ頃落ちるだろ

鳥取県　石谷美恵子

身構えてしまう苦手な人の前
サラサラとぽってり粥の好き嫌い
節約にならぬ家族のお粥好き
不器用な男が持っていたモラル
気にしてる私の歳を言い当てる

鳥取県　竹信照彦

明るいときょろきょろ景色見て歩く
釣りに行く支度をすれば雨が降る
申し訳程度に旧正月の雪
雪の無い畑びっしりはこべ萌ゆ
三月のどか雪だけは期待せぬ

鳥取県　谷口次男

団塊が生まれ変わって恩返し
還暦を迎えた蔭に名医あり
はらはらとドキドキいつもお隣に
太らせて売り飛ばす気だな豚の勘
差し上げよ農家の人にパラダイス

鳥取県　深田倶久

冬枯れの野辺に宝石いぬふぐり
懸命にスローライフの呼吸する
人に添う心を抱く子に育て
無理をしてつくる笑顔にほぞを噛む
紀元節それなんですか国旗立て

鳥取県　佐伯やえ

飼いネコにかまれてからの恐怖心
待つことに馴れて迷わぬ足の裏
ハードルをひとつ越えては大山拝む
やり直す友へ惜しまず支援の手
仏の好きな花植えてまた季が巡る

鳥取県　山下節子

被害者はうっかりなんか許せない
カタカナ語読めるが意味はわからない
ほっとする畳の部屋と米の飯
火種なら持っております風よ吹け
認知症検査昨夜のメニュー問う

鳥取県　土橋睦子

歳聞いてなっとくをするから不思議
脂肪ぶとり臍もどこだか見当らぬ
祝杯を受けて息子もひとり立ち
手作りの寿司に満足そうな夫
冗談も時どき欲しい夫婦の灯

鳥取県　蔵本悦子

あんころ餅食って百まで生きてやる
やきもちは焼かない妻の高いびき
メールでは駄目だ金なら取りに来い
携帯を持って少女が大人びる
ビタミンを食べ切り春を待つばかり

鳥取県　盛田夢路

介護保険世話になりとうないわたし
親の恩せめて介護で返したい
腹の中で幾度も他人責めつづけ
残雪がわたしの罪を責めて降る
猪に違反切符の電気柵

松江市　松本文子

極楽に居ると信じて墓拝む
明日ばかり思いつづけて七十歳
何処を切ってもしがらみが顔を出す
堪忍袋平成の子は分からない
キラキラの過去はさっぱり流すだけ

松江市　三島淞丘

淡雪の下で春待つ芽の息吹
雪深い里で無口な人と飲む
色即是空赤ちょうちんにまた負ける
バレンタインチョコの数ほど夢を持ち
不景気の波を乗り越す妻の舵

松江市　川本畔

辻つまを無理に合わせてほころびる
風光り町へ町へと誘惑す
バスの中自慢話が終始する
みんないい仲間だったと錯覚す
傷口をじわりと開く質問状

松江市　津川紫晃

それなりの手抜きも明日へ生きる知恵
雪しんしん春まで夢を休ませる
時代のずれを笑い合ってる母子草
善人の仮面が透ける銭の音
歩かねば夢のかけらも掴めない

松江市　小川注湖

ぽとんと音ポスト拝んで出す手紙
演奏会太鼓の音はよく分かる
ときどきはお神酒注いで口達者
人並みに暮らせた言って喜寿祝い
全員が携帯持っている家族

松江市　松本知恵子

そわそわと春を待ってるランドセル
春添える夕餉菜花のからし和え
景気良さそうお隣の高笑い
暖冬にもう雑草が騒ぎ出す
子守りしながら梅さくら待つことに

松江市　佐野木みえ

文庫本も一度ルーペで読み返す
ホームの友ストレスみんな置いて行く
水琴窟耳を澄ませばユートピア
神楽から春の息吹が聞こえます
藪椿ぽとりと落ちた雪の上

松江市　安食友子

百寿さまひょうひょうとして枯淡だね
亡夫嘆く観音竹を潤せと
手の甲も半ミイラだねじっと見る
一筋のラブで腑抜けになったドン
果てしなくチャレンジしてるのは望み

出雲市　園山多賀子

素晴しい夢を購いたい春財布
野仏に蜜柑が一つ花いちもんめ
余生今一人芝居の脆い夢
福寿草春の女は多彩好き
小豆粥温みに初春を生かされる

出雲市　吉岡きみえ

白梅のほのかに香る春の宵
福の豆まいて拾って福を待つ
雑草の芽生えいとしい早春譜
水の音ゆたりゆったり春の音
頑張ろうわたしのために旗を振る

出雲市　城多喜

わたくしの心読んでる靴音だ
木枯しも仲間欲しいか窓叩く
人ひとり恋したままで黄昏れる
まっすぐに歩いた道でまた迷う
お袋の味と言われてビビってる

出雲市　小玉満江

合格へ抱き合う二人の目に涙
あらやだわ噂の種を蒔く雀
家中で一番小さい母の靴
薬湯にトドと見まがう大女
もの好きと言われようとも趣味の道

出雲市　石倉芙佐子

一言も言わずに桜地に還る
花ぐもり女の意地が消えそうな
すっぽりと私を包む花吹雪
霰なぜはなの盛りに容赦なく
神様になった桜はすぐに散る

出雲市　伊藤玲子

頼られて喜んでいるお人好し
向かい風本音で話すことにする
待ち合せしびれ切らした方の負け
転んでも回らにゃならぬ独楽である
堂々と裏側も見せ歩きだす

出雲市　富田蘭水

水仙のスタイル思い深くする
当たる賀状こんな男に転ぶ運
追い出した心の鬼がまたもどる
ニュースバリューも少し明かるくなってくれ
山ほどの薬信じて今日も生き

出雲市　小白金房子

あれそれと笑いの中に立たされる
お互いの心掴んだ夫婦独楽
爪髪も伸びて病窓夕陽満つ
世渡りが巧い男の頬かぶり
日に幾度言ってすむやらドッコイショ

出雲市　持田多輝子

身の程を知れば羨む事でなし
欠点を許し合ってる共白髪
流儀などかまわぬ野立ての客となる
負けて勝つ事少しずつ会得する
どうせなら笑って暮す事にする

出雲市　佐藤治代

小突き合いしながら笑う五十年
暖冬へドサッと雪のおくり物
幾度も恥を晒して生かされる
おしゃべりの真ん中天ぷら山盛りに
袴足をなでる春冷えくしゃみする

出雲市　岸桂子

軽い気持の約束がもつれだす
ヒントだけ与えて若い樹を伸ばす
手拍子へ誘われていく雑魚である
あの時の失敗いまも悔やまれる
曖昧にしてそれぞれの顔立てる

出雲市　多久和敬子

人間が恋しくなって森を出る
ストレスを捨てに来ました森の中
ふんわりと私を包む茜雲
お味噌汁甘い辛いと側に居て
じいちゃんを二人の孫が奪い合い

雲南市　毛利　幸

大吉でいやが上にも気が躍る
鈍感でサインの意味が掴めない
至福時優しい風が身を包む
風向きを変えて相手を確かめる
百薬の酒が人生狂わせる

島根県　伊藤寿美

哭きに来た海が真珠になりました
一言の優しさで和ぐ雪割草
補聴器で倖せの音確かめる
大笑いしたい独りの冬籠り
絵馬が咲き胸の根雪が溶けてきた

岡山市　井上柳五郎

遮二無二もライバルとの差つくばかり
長いものに巻かれ淋しい復党派
元気なは口だけと老い笑い合い
余生にてちょっぴり悟りやっと知り
あの桜家から花見をなぜ伐った

倉敷市　撰喜子

メール打つ喜寿が傘寿に教えられ
読めないが墨の流れる書道展
三世代波乱を起す嫁姑
出来心という公金のつまみ食い
浅学を恥じ喜寿の手に重い辞書

真庭市　福嶋智恵子

正月に日の丸も無く侘び住まい
みかん盛り人待ち顔の春炬燵
この歳で猪突猛進ならぬひざ
子供だけゆとりで親は四苦八苦
賞味期の過ぎた妻でも自負はある

真庭市　国米きくゑ

駄斗袋派手すぎ中身照れている
亡夫の形見の時計私の腕に生き
子のいじめエスカレートする恐さ
仏壇で賞味期限が過ぎている
おばあちゃんの夢が詰まっている戸棚

美作市　小林妻子

炭塗ったおでこで戻るとんど焼き
脳味噌の残りが少し凍てている
惜しまれて逝く葬列と花の闇
言葉足らずをなじる春の渦潮
パセリさくさく春のコントはすぐ終る

美作市　山本玉恵

歌うては笑うて一期一会とや
肩の力抜けば前途は悠悠と
真ん中に座り返事に戸迷いぬ
座っても立っても離れぬ影法師
立ち読みで知識を拾う若い背な

美作市　大石　あすなろ

介護にもランクづけして切り売りに
シュレッダー秘密ばかりを食べている
手漕ぎの舟も情報過多で沈みがち
人情という一品を皿に盛る
合併で市政の隅の過疎となる

宇部市　平田実男

旗日だと言うのに旗が見当らず
まだ医者の梯子が出来るほど元気
川柳が私のサプリメントかも
ご位牌はゆずり合ってる遺産分け
日の丸を透かすと見える星条旗

竹原市　時広一路

美しい国には似合わないニュース
財布の中で並んでいます診察券
春よ春　音譜がダンス踊り出す
一円も要らぬ笑顔と有難う
ハンドルよお前が僕のボケ防止

竹原市　石原淑子

めぐり逢う母の匂いのする人に
露天風呂汗も泪もとけて笑み
野に山に歓喜の女神御座します
運勢欄恋におちると書いてある
神様にもらった運だ輝かす

東広島市　福島万年

卒業写真畳鰯の一匹よ
お止しなさい監視カメラが見ています
腹巻きと弱気封じの酎一杯
妻の趣味俺は着せ替え人形か
物干しに家族が踊る春の風

美祢市　安平次弘道

机上論現場の声は無視される
仮面つけていても偽善者にはあらず
本箱に答があると限らない
切れ味の鈍さ訴状がたまりだす
一途さがあって告白など出来ぬ

東かがわ市　川崎ひかり

空っぽの郵便受けをのぞきこむ
原点に戻ると見える風の色
にわか雨母は案じているだろう
納得がゆくまでひざをくずさない
そのままでいいよ野に咲くれんげ草

東かがわ市　成重放任

宴会に怒った顔は見当らず
マイカーに押され無人の駅が増え
海山の命たっぷり膳に盛り
食べすぎた芋に胸焼け胃の薬
おーいお茶女房いそいそ持って来る

東かがわ市　池内かおり

順調に老いる主治医も私も
私だってしてほしいからしてあげる
消火器の消費期限がわからない
坊さんの倅でお経知らぬ夫
食育で夫を長生きさせる夢

東かがわ市　神保坊太郎

九十の夢の残りを覗いてる
後戻り出来ぬ羽根です青い鳥
一まわり帰った噂着ぶくれる
故郷の山が見えます青テント
優柔不断未だ急行によう乗らん

東かがわ市　清川玲子

忙しい朝にボタンの付け忘れ
二度と来ぬ今日という日も暮れ急ぐ
暮れ急ぐ秋日に映える吊し柿
何よりのしあわせ自転車にまだ乗れる
早朝のパートへペダル若かった

東かがわ市　原賢

未練などないが薬は飲んでおく
風読んで歩きつづける蝸牛
焦るから言葉たらずで誤解され
痩せ我慢ばかりしている老いの意地
お若いと言われ鏡へ胸をはる

東かがわ市　伊勢八重子

対向車大欠伸してすれ違い
顔見せるだけを待ってる母独り
荷を下ろしくらしのチャンネル切り替える
やわらかな笑顔の皺が過去を言う
ありがとう言えばこだまが返って来

松山市　髙橋宏臣

順番を待ってる雨の停留所
ジャンケンで過去は帳消ししています
台風がゆっくり北の海を越え
円周を走って冬の陽を掬う
ボタン押す笑顔残したままの顔

松山市　宮尾みのり

女とは子を生む機械だとか鶏舎
下り坂夫婦温度がかみ合わぬ
日々多忙親の命日つい忘れ
順番にこだわりすぎる小物だナ
モンゴルの風がさらっていく賜杯

松山市　古手川光

ボケ封じの御守り持って息子来る
もう酒は卒業したと飲んではる
窓口はたらい回しのためにある
ここまでおいでおいでと野良猫のポーズ
季は巡りまた花が咲く蝶が舞う

大洲市　中居善信

ストレスが溜まると竿を持って出る
安いとは思うチラシよヨーロッパ
春四月歩き遍路と鈴の音と
美しい国何を想像出来ますか
休耕田これが日本の姿です

西予市　黒田茂代

とっときの皿に想いを盛りつける
客たった一人大事な過疎のバス
うちの鍋穴が空くまで暇が出ぬ
期待せず待った返事がやはり来ぬ
孫の無いわたしはずっと妻で母

高知市　小川てるみ

割り切ればプイと出て行く腹の虫
心配はすまい息子ももう不惑
コップ酒甘えてみたい夜もある
寒風が磨きをかける麺の里
ポカポカへ土筆ん坊が目を醒ます

高知県　赤川菊野

落ちこぼれやる気にさせた龍馬像
兄弟が私ひとりを置き去りに
カルチャーのこんな所にもいじめっ子
ハチキンの涙をさそう硫黄島
一枚の葉書でうつがふっとんだ

高知県　小澤幸泉

酒か句か飲んで作って時が過ぎ
夢だから不倫の恋は燃え上がる
明日からは酒やめますと飲んでいる
もつれあい支えあい行く朝の白杖
ビール栓ぬいて孤独の味を飲み

唐津市　樋口輝夫

お年玉の御利益孫にいたわられ
ウエストに無理を押し込む試着室
弟の貯金箱から借りる兄
年越しの蕎麦と地酒でいい気分
シブチンの爺じを溶かすもみじの手

唐津市　井上勝視

強がりも三日が限度老妻の留守
逆らわず舵を取ってる老妻である
エプロンをつけて活きいき若い老妻
馴らされて他所の馳走が美味くない
衰えに勝てず老妻にも八ツ当り

唐津市　宗水笑

杉花粉威力を溜めている冬場
すぐそこと言われて遠い村の店
寿司うなぎたしかに僕は日本人
暖冬に出番が来ない雪おんな
一合でむかし五合の酔い心地

挨拶の順近付いて来る地鳴り
居酒屋の隅で見せあう腹の中
大器晩成と言われて後がない
てっぺんで昨日の友の無表情
よく吠える犬だ主の顔を見る

唐津市　坂本蜂朗

見合い写真カードのように繰って決め
省エネの湯タンポ納屋から罷り出る
転んだら立つまで待った子の躾
枯山水　駐車場にし三世代
産む機械ロボットなのと孫が聞く

唐津市　市丸晴翠

健康な乳房が揺れるビーチバレー
八十五まだ充電の柳誌繰る
お宝を我楽多にする鑑定団
好きですと聞いた気がするジャズダンス
貸付けで疲れた顔は見せられぬ

唐津市　久保正剣

戸籍では別れたひとと棲んで居る
栄転を柱の陰で送る女
列島の民は羊と侮られ
神代からおとこ破廉恥罪が好き
亭主には頼りないよな優おとこ

唐津市　山口高明

退くことを知ってた母の処方箋
杖つけば見知らぬ杖が話しかけ
言えば傷つく人あり貝になる
本当のことが言いたい壁の耳
義理欠いたわけをつくらうサロンパス

熊本市　永田俊子

竹踏んで生きるぞ五年日記購う
男子厨房に菠薐草を茹ですぎる
お銚子に乗せて待ってる滑る口
ボロボロになってから歯を大事がり
なにもかも読まれ老妻から操られ

熊本県　髙野宵草

次つぎと用事生れるお母さん
参加者は男せめての紅を引く
今後の生命　先祖の寿命たぐりよせ
出来上り自分を癒すこの一杯
お返し無しのチョコで日頃に感謝する

熊本県　岩切康子

デジタルの世でも女の目分量
精一杯生きたので夜しぼんでる
雑草に笑われながら抜いている
切り傷へとっさの手当て酢をかける
美しい国言う真意何なのだ

シドニー　坂上のり子

川柳塔の川柳讃歌㉘

木津川　計

幸せがいつしか枷になる指輪

海老池　洋

「愛そうと思ったのよずっとずっとずっと」と時実新子さんは結婚当初の幸せな思いを詠んだ。さりながら情熱は失せ、倦怠から嫌悪に変質するのも人間の業と言うべきなのか。

甘美に夢見る恋愛を経て結婚する。かくて通俗小説は終り、純文学が始まる。あまた数え切れぬ純文学作品のためには「枷になる指輪」の持ち主が大量に生まれねばならなかった。洋さん、男女の愛憎こそ皮肉な豊饒の母胎なのですね。

飲み放題なのにジュースかウーロン茶

穴吹尚士

飲み放題食べ放題のバイキングは人間の本性をむき出しにする。するから君子は行くべきではない。ダイエーの中内功さんはパーティーで飲みこそすれ、食べ物に一切箸をつけなかった。「あさましい」と言い、外へ出て秘書と屋台でラーメンを食べた。女形の最高峰だった中村歌右衛門はパーティーで飲まず食わずを貫いた。尚士さん、飲み放題の席の下戸の無念をよくとらえました。が、下戸は玉杯に花を受けたり、緑酒に月の影を宿す人種を案外低く見ているのかもしれません。

耳元に小さく小さく一大事

石倉　芙佐子

「囁やく」という漢字は「犇めく」いう漢字同様に、その状態をよく形づくっている。「小さく小さく」小事を囁くのならわかる。「一大事」はもはや冷静ではいられず、大声で伝えたい。叫びたい。「一」という小事ではない。「お家の一大事」と言うほどだから「十（重）大事」と書くべきだった。

芙佐子さん、「小さく小さく一大事」を囁かれた人は驚愕して「ええーっ?!」と大声で答えたかもしれませんね。

芋たこなんきん同じ時代を生きてきた

吉田　あずき

田辺さんは皇国の必勝を信じる軍国少女だった。特攻の〝散華〟にお父さんは「若いもん、こないして次々死なしていって、どないするつもりや」。田辺さんは息もできないくらい怒って「玉砕か、勝利ですよ!」と。

日本が負けて田辺さんは思った。「自分の後半生は、他人にあやつられない人生でありたい」（「欲しがりません勝つまでは」）

「芋たこなんきん」には『上方文化』という『上方芸能』そつくりが出てきて廃刊になる。僕は他人事ならず頭をかかえて見た。

流れ矢にやっぱり僕が当たってる

岩佐　ダン吉

ダン吉さんの不運である。流れ矢に「やっぱり」当たるほどだから一度や二度ではない。貧乏くじばかり引き当てるのである。陽の当たる場所に住んだことがなく、生涯を日陰者で送るのだ。こんな人に僕は惹かれる。

ダン吉さんは、しかし善人である。天下の楽しみに遅れて楽しみ、天下の憂いを先んじて憂う人と思えるから。痩せ蛙負けるな一茶ここにあり、の僕の思いをダン吉さんに。

生き下手でよかった月はまたのぼる

山本　玉恵

玉恵さんにも陽はまた昇らず、月ばかりがのぼるのである。生き上手は世渡りがうまく、金儲けもうまい。それに引き替え、玉恵さんは生き下手で、なぜか薄幸の生を終える『越前竹人形』の玉枝に姿が重なる。

生き下手はばか正直で愚直の謂だが、藤山寛美もまた愚直に徹した。玉恵さん、眺めるのは配所の月でなく、名月でありますように。

（『上方芸能』誌代表）

自選集

八十田　洞庵

人形の魅力黒子の手が助け
しきたりに母のしぐさを思い出す
夫婦別姓ベビーブームと裏腹に
孫の演出とうとう財布空になる
名作の書架にかくれて古日記

両川　洋々

拝んでる神が自爆をそそのかす
ギリギリの線で女帝も認めよう
この僕に神が軍配上げてくれ
天罰か辞令は北の果てを指す
窓際が似合う上司も哀しいな

阿萬　萬的

意地張って動けば掘っていた墓穴
順調過ぎる話の隅にある火種
掘り下げて聞き過ぎ不仲の種つくる
劣等感あって本音を出し渋り
どたん場で妻の知恵借るお人好し

石川　侃流洞

点滴のしずくへ命乗せられる（入院）
点滴へ余命の程は聞きもらし（点滴で七日間絶食）
鶏インフルエンザ犯人鴨と本当ですか
卒寿まだ叱ってくれる妻がいる
孫娘見舞に来て身の回り世話をする

板尾　岳人

かすかなり進軍喇叭遠ざかり（ひめゆりの塔）
咲けば散る母が教えてくれました
雑草を踏まねばならぬ早春賦
美人より料理上手な割烹着
産む機械錆を落している余生

奥田　みつ子

森たのし春だ春だと誘う声
のんびりと他人は他人うちはうち
省になり勝って来るぞと響きそう
何を柱に生きてきたかを問い直す
弱音吐く明日は強くなる為に

発想を変えて新たな手を模索
耳元で囁く善と悪の声
スピーチへ幸せ願う句を添える
一日の計確かめて朝の靴
土壇場へまさかと思う救いの手

河井庸佑

サクラ満開人の話は聞いてない
背伸びしたぐらいで大人にはなれぬ
東から風が吹くまで歌わない
女偏あたりでとぐろ巻いておく
鍋つつき個人情報垂れ流す

川上大輪

一徹の父で石にも矢を通す
転んでも自分で起きる子に育て
雑草の意地踏まれても蹴られても
ボロボロの地球を救う植樹祭
定年で不要になったゴマスリ器

木村あきら

暖冬をよろこんでいるのは誰だ
バレンタインチョコ先生にいただいた
退職後楽しく玉子焼いている
乾杯のあとは一歩も動かぬぞ
フライパンだんだん重くなるのです

小島蘭幸

稲光りする大山へ背を伸ばす
雪見舞今年は来ない飛行雲
例年の雪の吐息も聞こえない
かぞえ唄うたう卯月へ弾む毬
居酒屋で肩の力を抜いて飲む

小西雄々

ありがとう妻には言ったことがない
決論が出ないあくびをかみころす
じゃんけんに負けてかわいい鬼になる
雪のない二月うきうきしたくなる
鬼だとも思った姑の介護する

小林由多香

紙飛行機小さな夢を子と飛ばす
あの時は直球ばかり若かった
難しい話はよそうロゼワイン
出迎えのお国訛りが温かい
分け合うた株が近所で花を付け

斉藤姦

三が日路郎師の本読みかえす
大阪に鶴彬句碑建てたいな
杖無しで歩く稽古をしてみたい
孫娘見目麗しく成人し
里の友喜寿の祝いに会いたいと

塩満敏

万本の木に守られている散歩
松ぼっくりにも若いのと年寄りと
僕だけに歌ってくれている雀
勘のいい犬だ私に吠えかかる
春一番迎える準備できている

新家完司

つくづくと子規が偉いと思う日々
生きがいはあるものじゃない作るもの
人生観ちぐはぐなのはあたりまえ
丸い地球に国境なんてなくてよい
受けて立つとてもと言いながら

田中正坊

ありがたい法話が眠い春うらら
生きている限りストレスつきまとう
野仏の笑顔と遊ぶもつれ蝶
戦友が浮かんで消えた生き残り
絵心の無さを悔いてる花の城

玉置重人

巡る縁あって地酒を酌み交わす
傍に居る人から元気貰ってる
好きな事になると根気が顔を出す
縁側は昔の苦労語る艶
そわそわと初孫見せに来る電話

恒松町紅

てにをはに詰る音読カレンダー
人並みへ切磋琢磨を繰り返す
女にもプライドがあるもと他人
やり直しきかぬ人生助け合う
過去全部忘れ女は逞しい

津守柳伸

ふるさとの風の便りに血が和む
笛吹けば老人会が起きて来る
市花県花心はみんな美しい
全自動妻はスイッチ押すだけに
大寒の炬燵で和む花便り

遠山可住

忙しいけれどたっぷりある余生
雑用もこなして世間の道均す
立ち話の中で臭いを嗅ぎ分ける
脳軽くなって体重が増えた
線香が卑しい部屋を包み込む

都倉求芽

孝行も愛国心もないのかい
約束を守って母に褒められる
目が覚めた命にありがとうと言う
泥鰌も逃げる替え歌の安来節
美しい国ニッポンを疑わぬ

土橋螢

現実を逃げる眼鏡をとり替えて
乾いた街でブラックジョークよく響く
バッカスと仲違いすることもある
残り火を煽ぐとふっと消えちまい
寒い日は大言壮語しておこう

西出楓楽

深呼吸してうたったのは海ゆかば
言い勝った方が大きな深呼吸
苦笑いその裏技の深呼吸
万病に効くとか聞いた深呼吸
春の朝妻に合わせて深呼吸

仁部四郎

草むした墓碑が戦を語りつぐ
虚と実の狭間で生きてきたピエロ
エラーしたあとの苦言が胃に溜まる
薄墨に無念が籠る訃の知らせ
霜とけてかごめかごめの輪を繋ぐ

波多野五楽庵

花道の夢ちりばめる万華鏡
歳なんか忘れて豆の木をのぼる
ポケットでうごめく野辺の小さい春
鏡台の底に眠っていた鎖
ははを包んでも一度拝む二重橋

林瑞枝

足腰の痛さ無理して歩の日課
ドッコイショもう八十は隠されず
終章の頁が残る生かされる
杖の要る歩行八十路の悲しけり
一月に今日三月の陽気とか

宮口笛生

叩いたら芥出るばかりトップの座
ニン月の底途切れして春稼動
米櫃が満ちて女はよう笑う
探さんでくださいいのち洗う旅
ふくらんだ蕾に過ぎた願いごと

宮西弥生

迷いから抜けた哀楽九十過ぎ
喧嘩する張りもおまへん九十過ぎ
ポックリ死夢見て暮らす九十過ぎ
お若いと言われ喜ぶ九十過ぎ
山盛りのバラを抱いて九十過ぎ

森下愛論

母の時計はいつも進んでいる不思議
トイレではいい案ばかりすぐに浮く
天からの掟はだれも崩せない
人間に戻る定年退職後
振り向けば椿がそうっとお辞儀する

森井菁居



奥田みつ子選

観覧車真昼の月に逢いに行く
あばら家の重しどっかと座る父
しかしそのあのそれほれとじれったい
愚痴言った結果遮断機上がらない
四角から丸へと愛が転げ出す
末期癌心へ刻む二人旅

紀の川市　宇野幹子

はらりはらり無常などとは言わぬ花
迷ったら考え込まぬことにする
妻という椅子のもろさよ擲てば
半眼で罪深きことかんがえる
穏やかな周波をもらう弥勒像
冷めかけのふろで浮かべている思案

和歌山市　たむらあきこ

さわさわと父母の声かと風の夜
病友の体の重さ目で量り
老夫婦新婚さんも旅の友

三田市　阪本藤朗

春の陽に爆心何の影もなく
殉教の話に思う自爆テロ
天主堂仏徒のわれも跪き

大阪府　中井萠

何事も初めはやる気あるのです
一杯のお茶が至福の時をくれ
要領の悪い生き方しか出来ず
良い知らせ運ぶ電話はよく響く
年の功こちらが先に折れてやり
地団太もカウントしてる万歩計

大阪市　原田すみ子

元気なら笑い飛ばせる事なのに
夕茜まだ輝やける時はある
二人して拓いた道で生きている
今開く花も娘も美しい
開いたり閉じたり辞書と小半日

田辺市　大峠可動

妻癒えて神に百ぺん礼を言う
ほどほどにほどほどでよし生あれば
彩りを桃色にして雛の餅
人恋わずふるさと恋わず水の色
街枯れて夕張と言う鉛色（テレビより一句）

和歌山市　柏原夕胡

幸せなのにこの寂しさは何だろう
おいしいと言ってもらった嬉しい日
幸せはこんなものかな鍋つつく
翔ぶはずの羽根が傷ついてるのです
少し距離置こうか愛しすぎたから

府中市　藤岡ヒデコ

風邪引くな受験の孫に声かける
温暖が進み開いた花の哀
交友の広さを語る葬の列
節くれた手に働いた自負がある
親の歳過ぎても親は越えられぬ

横浜市　川島良子

美人にも美人の悩みあるらしい
春うらら待っていましたコウノトリ
これ以上言えば積木が崩れだす
メリハリをつけて生きようわたし流
いい距離にやさしい嫁がいてくれる

大阪府　神野千恵子

旧友の憎まれ口が心地よい
潮風をのせて絵葉書ハワイから
ファッションショーつんつん歩くモデルたち
奥行の空気はんなり京町家
そのうちにいい日が来ると信じてる

香南市　桑名孝雄

一期一会やっと分かってきた八十路
愛されるお年寄りへと脱皮する
還付を受ける税吏が仏様に見え
学友社友解散式はもう間近
東京へエンヤコラサと同期会

鳥取市　横田春名

地下までも塗り固められ大地哭く
想い出を啄みながら老い陽気
猫までも蔑む親や子殺しよ
許す気になって明るい今朝の空
泣き笑い互いに飽きず五十年

大阪市　森田明子

まっさらな一日今日も歩き出す
窓磨き春の序章を聴いている
ピカソの絵きっとがっかりしたモデル
飽食の良心ばかり痩せ細る
ポンペイ展我が五分後の位置知らず

雛飾り老いの一部屋若返り
無理と無駄はぶいた肩の荷が軽い
前向きの美学カルチャー多忙です
モノクロの写真人情厚き頃
この命大事と思うより深く（心手術後十年目）

大阪市　三浦千津子

長寿国喜ぶべきか首かしげ
尋ね来し教え子は皆六十台
孤独でない教え子という宝持つ
わびしいね恋が一つの生涯も
南海を眺めるそこに夫の顔

尾張旭市　三浦きぬ

陰ったり照ったり寒の空と我
七十路に何かが足らぬ花の冷え
読経の抑揚今朝は息続く
草萌えの地べたが老いを和ませる
春愁は柄ではないと大欠伸

泉佐野市　稲葉洋

真っ直ぐという字が好きで独りいる
日溜りでクロスワードを解いている
未来図に夕陽の色は使わない
胃の中の四角が溶けぬまま残る
持て余し気味の命と思う時

紀の川市　辻内次根

悲しい日逆光の中うかぶ薔薇
出歩いてしゃべって老いもまだ元気
死に神とここしばらくはつきあわぬ
まっすぐに帰りたくない雨の午後
病室へ気休めの嘘置いてくる

堺市　大久保伸子

花粉症春一番が来て煽り
晩学の森に行進曲が鳴る
盃へ桜ふぶきを見ていたり
それぞれの夢が翔び発つ春の駅
大空へ大器晩成まだ信じ

日立市　加藤権悟

体の悲鳴医者は一言老化です
エプロンを着るとやる気が増してくる
それぞれの明日輝かせ初日の出
書き初めは写経と決めて幾十年
笑い袋せめて大きくふくらます

八尾市　赤木妙子

拉致の子を返せと叫ぶ冬の海
過去言わず未来志向の再生紙
団塊の世代痺れたビートルズ
よく回る舌が男を軽くする
身から出た錆胃カメラに見つけられ

札幌市　三浦強一

太平洋地球は矢張り丸かった
飽食と飢餓が同居をする地球
世渡りの下手な口だが嘘はない
ウィルスに負けてはならじ玉子酒
回覧板隣近所は恙なし

岐阜市　平野　あずま

時折は無心になって風に酔う
悩み事睡眠時間かじり出す
誕生日健やかでいる陽の匂い
雑音が入らぬように距離をおく
思い出せぬ名前がひとつ迷い道

八尾市　脇　俊子

日めくりの厚さ睦月に油断する
写経終え夫婦で向かう焼肉屋
一病に一献ささげ六十路越え
老父の手を握ると鍬の音がする
人間は失敗作と神の鬱

羽曳野市　吉村　久仁雄

六法の死角で光る魔性の眼
一字三礼写経へ命込める筆
もみ手しているが一歩も引かぬ腹
諦めも悟りの一つ無と対峙
年金の枠で小さな虚栄心

相生市　村木　信子

人の渦響いていますビル谷間
ギャグだからいじめ笑って聞いている
新鮮な野菜を食べて米寿まで
絵馬祈願やっぱり元気ほしいです
春一番ららうららと窓までも

西脇市　七反田　順子

立春の戸口に遊ぶ福の豆
ふるさとの枯山水を愛でて来る
楽しみは一日遊ぶ布と針
菜の花を一品添えて春の味
早朝の電話ドキッとしてしまう

松江市　山根　邦代

健康を宝と思う杖の音
明治には汗で築いた宝あり
友達に田舎の味を配る老い
花手桶帰りは回転寿司と決め
年功を積んだ雑学物を言い

草加市　飯土井　健夫

酒飲んで今日一日の棘が落ち
熱燗がほどよく二人解きほぐす
しらふでは出てこぬ言葉てんこ盛り
酒は知る今夜の私宇宙人
辛い日は酒に泣かされ眠らされ

大阪市　岩崎　玲子

シドニー　内山佳代子

気休めにダンベルなどを持ってみる
義理チョコもホワイトデーもない気楽
一輪の花がお部屋を明るくし
カーテンの隙間をのぞく月明かり
二人なら越えられるはず山谷も

シドニー　三谷たん吉

運びにくいだからきざんだ身が凍る
誇りなき猟奇の国に明日はない
欲と見栄嘘と無知しかない議員
消毒は養鶏場より国会場
大臣よ言い訳うまい機械生め

シドニー　森本クックバラ

大臣よあんたも機械が産んだのね
美しい日本女性は機械らし
団塊は地獄極楽満員だ
暖冬も旱魃もみな人の所為
犯罪も流行り廃れがあるような

宮崎市　串間安子

さわやかに紫まとい喜寿祝う
満開の梅に弱気を叱られる
趣味一つあって介護に疲れない
いそいそと着替えを運ぶのも愛か
鏡餅賑やかに割る子沢山

山鹿市　米加田恭代

無党派の望んでるのは正義感
発言は取り消せません本音です
忘れた頃へし折られます天狗鼻
視点変え見えてくること真実か
無頓着じゃなく望みはおおらかさ

唐津市　岩崎實

ふしくれの両の手合わす初詣で
生まれる子広い世界が待ってるよ
どっと来てどっと帰りて老い二人
不甲斐ない人生だけど捨て難く
わからんとただ一言ですますくせ

北九州市　岡田幸生

失敗を励みに変えて積む努力
小柄だが母の心はLサイズ
門限を父が気に病む娘の育ち
陰口を耳が拾ってから疎遠
ときめきはもう無いバレンタインチョコ

香南市　百田幸

寄り添って共に杖とも柱とも
毒舌もお世辞も同じ口が言う
転ぶ度丸い女になりました
夢だったああよかったと胸さする
鉛筆が欠伸するほど辞書をひく

香南市　近森　功

老兵の喇叭に眠気誘われる
春うらら杉の妖精乱舞する
失恋の僕に花粉が纏い付く
年金を宝の孫にしゃぶらせる
真っ直ぐな道にもあった落し穴

今治市　塩路よしみ

ゆっくりと歩調合わせてくれる人
そのままを言えば馬鹿だと叱られる
詩に遊ぶことをおぼえて日々至福
バラひとひら散って女の夢挽歌
辻が花無限の彩に染めあがる

今治市　渡邊伊津志

人いつも囁く人を待っている
備長の炎が味をつけてくれ
遊ぶ子の笑顔に福がやって来る
太陽にエキスを貰う鰹節
原因は苛立ちだった苛める子

大洲市　花岡順子

平凡な暮らしが宝だと思う
喋りすぎるテレビと家族ごっこする
心の中に鬼を一匹飼っている
横車押したと思う寂しい日
花時計待たされたって苦にならぬ

東かがわ市　赤澤貞月

生きている証に今朝も雨戸開け
手さぐりで山河越えた夫があり
形くずれせんまま古稀の橋渡る
老いて子にまだ従えんそれもよし
風まかせ明日のドラマ夢にみて

宇部市　高山清子

あの一言言えず心がゆれている
趣味なのに何故かノルマがのしかかり
強がった後に孤独が押しよせる
折返し出来ぬ浮世を共白髪
決断を迫られそうではずす席

府中市　馬場利子

ささやかな幸カステラを厚く切る
忘却のページの中にある童話
小宇宙での乱舞ぼたん雪
決断をつけたい今日の薄化粧
ローカル線の音はるか春を呼ぶ

府中市　岩本雅代

介護するこの身も未だ落着かぬ
謎一つ解けないままの飛行雲
暖冬に大根ダルマの並ぶ春
七転び起きた猪の年突っ走る
臘梅の匂いにつかれ癒される

出雲市　川島和歌子

それぞれの好みの趣味に寄っている
お日様の笑顔に触れて布団干す
あの助言素直に聞いて運が向く
畠を打つ金は無縁の遊園地
耐えるのよ風がゆっくり背なを押す

雲南市　菅田かつ子

しゃぼん玉好きなお人の肩で消え
口げんか出来るあなたが居てくれる
暖かい部屋で眺める窓の雪
歳月の七十歳を丸くして
振り向けばどじと恥との青春譜

雲南市　武島ちよえ

年の功などと煽てに乗っている
多読して多作はいいが多捨ばかり
棘のある言葉飲んでる消化剤
娘に肩を揉んでもらっている至福
横道に逸れると話盛りあがり

雲南市　福間博利

鳥たちの声まばらなり霜の朝
奥出雲駅弁のこえなつかしく
戦友の賀状今年も一人減り
そのときに満州零下三十度
瓜坊よそこは崖っぷち気をつけろ

鳥取市　山岡紀子

風呂上り一番好きな顔になる
午前五時母の日課が動き出す
お化粧も大事な日課紅をひく
子沢山ご飯しっかり炊いてます
むずかしい話にそっと出るビール

倉吉市　酒井芙美子

千羽鶴折って平和を祈願する
川柳の仲間はみんな風流人
頑固一徹仲間はずれになっちゃった
お互いに抱きつ抱かれつ浮き沈み
星の降る明日も天気で生かされる

倉吉市　前田喜美子

スクラムを組んで我が家の朝が来る
個個がいて宝と思う家族愛
本当の勇気は嫁の優しさに
ばあちゃんの勇気は他所の子も叱る
ダイレクトメール私に来る不思議

境港市　遠藤那珂子

温厚な主人の横にちょいといる
魚影光って春を知らせる群れとなる
こじんまり一輪ざしが似合う家
ゆとりある暮しで抹茶顔を出す
同じ趣味家族の愛が深くなる

境港市　中井虎尾

公務員武士のつもりでいてこまる
幸不幸その基準なし個人の差
久しぶり話す友だが名をわすれ
カーナビも事故の予測はいたしません
へそ曲りナチュラルカーブうまく投げ

米子市　小塩智加恵

歯みがきと洗顔フォーム同じ顔
ペアパジャマそれぞれ好む赤と青
苦難坂幾つ越えたか子に内緒
試供品一週間の薄化粧
ケイタイを持つもメールが未だ出来ぬ

鳥取県　橋谷静江

温暖に戸惑う春の花芽たち
カレンダー印つけても忘れてる
旅の案練ったあげくに諦める
知らぬ人多く古里遠くなる
また今日も愚痴をこぼした歳のせい

鳥取県　岡本幸枝

一人ひとりの癖を知ってるおつき合い
特産を活かしスープで人を呼ぶ
縄のれんに負けぬ手料理待つ我が家
孫の絵が知らせてくれる家族の輪
間違った親のルールを子が諭す

鳥取県　岩崎和子

車窓から捨てたそのときモラル消え
失ったモラルの末に子が消えた
河川敷ごみでモラルの低さ知る
週刊誌美白痩身溢れてる
ふるさとの三平汁に癒される

和歌山市　堀冨美子

褒め言葉今日一日が浮いている
ミスひとつ老いのせいにはしたくない
大袈裟に笑ってみせる夜の孤独
喜怒哀楽シーソーゲームする余生
躓く度祈りの深い日々になる

和歌山市　土屋起世子

世の動き知らぬ瞳の紀州雛
春まじか制服の胸膨らんで
何かありそうでなかったチョコレート
喧嘩する君がいるから出るファイト
見ない振りして祈る娘の世帯

和歌山市　田中すず

お互いの縁を大事に着地点
マニュアルの通り人生七転び
一本の道に辛抱横たわる
苦手なこと一つ持ってる友が好き
分相応がいちばん楽だちぎれ雲

さし木した椿が咲いて頬ゆるむ
落語の落ち聞かず眠った平和な日
世渡りに下手も上手もありません
スマートになったが何も変わらない
老母と住むいつか顔までそっくりに

和歌山市　根田よしこ

人生は赤信号の時もある
段どりが出来上っての長い風呂
皮いくつむけば平和な地球かな
書くことも口にも出さぬ事がある
誰とてもはずさぬ錠の鍵を持つ

岩出市　村中悦男

ぬくぬくの日だまり探し毛糸編む
目立たぬが母の姿はすぐわかる
非常口最短距離の子ども席
ぬるま湯にしくしく痛む胸の傷
とにかくも実直者で生きのびる

海南市　小谷小雪

蟹マグロ松茸なしで生きられる
ペコちゃんがどうしているか案じられ
ケータイは持たされるまで持たぬ主義
一言が笑ってすまぬこととなる
プレゼント上げる子がいるありがたさ

和歌山県　森下よりこ

電話よりなぜかドキドキするメール
バカ陽気続き気になる地球危機
出無精をじっとさせない春陽気
友たちと酌み合う酒に嘘はない
友と飲む酒の温もり堪らない

奈良市　矢野良一

二人居で一番風呂を譲り合い
人生に還暦というひと区切り
陽を受けて私虫干しするつもり
桜から満面の笑み貰います
まどろんでここは確かに屋根の下

橿原市　藤永実千代

行進曲聞けば自然に動き出す
バーゲンへ走る元気は秘めている
よそゆきの優しい声も持ってます
ああそうと聞き入れてくれる人が好き
穫れ過ぎて潰される菜にある無念

尼崎市　桑原東園

雨宿り雫頻りに喋り出す
急ぐ顔も見下げて止める赤信号
正論を吐いたら四面楚歌の声
枯れ葉みな落した空の青冴える
薄ら氷が解けて奏でる早春譜

携帯は安否気遣う子のネット
花咲かすプランない日も陽は西に
自分さがし紙４Ｂと春一歩
温暖化筆もご機嫌寒水仙
八十の坂しぼり調合岩絵の具

加東市　岩本美緒子

珊瑚婚初プレゼント指光る
睦月過ぎ如月去れば好きな春
合格の言葉が響き部屋も笑み
髪に舞うリボンひとつが女の子
すぐ溜まるお金じゃなくて体脂肪

三田市　辻開子

地下よりも空気きれいか歩道橋
長電話どちらも話し好き同士
ワキ甘くあと一歩での蹴躓き
世の中が便利になって人ナマる
二割がた処分しようか書架をみる

三田市　臼井二英

気分一新余生を無駄にしたくない
それぞれの祈りよ届け初詣で
川柳に遊んでもらい年が明け
枯花の余力にかける愛の水
富士山を観てから開けるうなぎ弁

三田市　上垣キヨミ

こだわりがないと容易い人の世話
腕組んだ時は男の貌をする
権限が増えると萎える志
常緑樹のそばで春待つ冬木立
店仕舞しても街の灯消さぬ義理

宝塚市　河津寅次郎

福は内一人ずまいは鬼も内
このごろはファッションよりも楽な服
ストレスを豆と一緒にまいてます
乾燥気味肌と心に美容液
三歳児人の気をひくこつを知り

西宮市　石野照代

もう無理はしません明日は見えてます
古丹波の壺傘入れにする至福
機械には滅法弱い妻と居る
気づかずに毎日地球こわしてる
家系樹に孫という名の新芽生え

西宮市　藤木直

豆撒きも何時しか遠い思い出に
子も育ち鬼の役目もすみました
鉄鍋で焼く発見を楽しんで
たのまれて今出来る事喜んで
ゲームには弱い私は仕事人

兵庫県　永井かほる

大阪市　伏見雅明

仕舞風呂ふと口ずさむ流行り唄
独特な匂い今夜はカレーだな
削られた父の小遣い塾に化け
ドラえもんポケモンもいる孫の夢
たこ焼がなにわ文化の仲間入り

大阪市　尾崎黄紅

お前食べあんた食べてと皿回る
贋物を本物にして床の間に
所持品は優待パスに小銭入れ
休肝日老妻がやさしくしてくれる
軍歌唄って哭いている老いの影

東大阪市　佐藤美はる

わだかまり濃い目のお茶にとけてゆく
女工哀史母のおもかげ糸に繰る
入社式少し背伸びのアルマーニ
北限の海おんな逞し海胆を採る
慟哭が聞えて来ます海ゆかば

池田市　北出北朗

ナイショやで耳にこそばい孫の息
外孫がくると内孫甘えだす
芋たこの直美の中に居る寛美
売り言葉買わず聞えぬ振りをする
ぎりぎりの暮しながらも庭に花

池田市　上嶋幸雀

一年の計もうぐらついている二月
夕張を思えばこれしきの寒さ
手作りのチョコを貰って早合点
立春へ鉢巻締め直す受験
朝ドラで規則正しくなる暮し

池田市　多田契子

九条が危ない年の幕明けを
瓜坊に後ろも走るしつけする
毎日がダイエットする始めの日
安全性二の次になる儲け追い
今日の月しっかりと見る七分粥

泉佐野市　備後三代子

尼寺の清し御声の夕読経
この歳で夫の存念計りかね
ばあちゃんも言いたい事のたんとあり
バレンタインチョコ見せ合うて皺の笑み
あと少し眺めていたい至福の日

岸和田市　坂口英雄

退職後輝く人と老ける人
ウォーキング影の背中が曲ってる
要りますねェ議員に躾する人が
平和ボケテロの怖さはまだ知らぬ
気の弱い人は住めない永田町

談合発見器そなえたい役所
爪切って生きた証を確かめる
亡父さんのどてらで耐えた流行風邪
削られて年金痩せるばかりなり
鉛筆が削れない子にした便利

堺市　荻野像山

灯を消して耳さとくなり独り住む
失敗を包んだ風呂敷あけられる
いい話仏も耳をかたむける
里帰り瀬戸はきれいな月明り
天狗にはならずじまいの鬼の面

吹田市　二宮栄子

耳よりな話の裏に魔法秘め
散歩道いつもの辺で夫思う
血圧に一喜一憂する日課
気楽さに手抜き料理ですませる夜
胸襟を開き話せる人がいる

吹田市　藏田光子

頭では分っていても出ぬ言葉
陽に干した布団の山へ飛び込む子
老い二人頓珍漢で大笑い
浮雲に乗って行きたい宙の果て
石段を登りきったら別世界

高槻市　安田忠子

憎きガンくりっと丸く主張して
ガン三センチ神よ仏よ御存知か
片乳が私の値打下げはせぬ
その昔貧しさの中和楽あり
日だまりのギターへお客犬一人

高槻市　笠原乃りこ

母の豆いつもふっくら煮えていた
虹の橋追った少年喜寿迎う
人生の道場でした父の背
大根を干しているだろ父と母
口下手を治す飴玉下さいな

豊中市　谷川勇治

厳冬はいや暖冬も疼く脳
早咲きの梅に吹き来る千の風
ありがとうそれが喜び分ち合う
鬼の世に鬼が追い出す鬼払い
病状に変りないからありがとう

豊中市　源田啓生

物言わぬが手帳は僕のマネージャー
軽い口たたいてしまいふっとウツ
軽い口たたくな女性機械説
幸せを入れるふところ空けておく
口べたで話すきっかけつかめない

寝屋川市　岡本勲

顔つなぎお口汚しを提げて行き
飽食が作る子供の握り箸
売れ残る犬が日に日に肥り出す
折伏が疲れた顔に寄ってくる
職退いて消化不良の持ちタイム

羽曳野市　森下一知

山上の目線と違う民竈
幻の美しい国絵に画けず
指切りは公文書より信がおけ
税金と思えば腹の立つニュース
ビリケンに触れて今年の幸願う

羽曳野市　永田章司

鬼は外福よ来い来い春近し
万歩計元気で刻む寺めぐり
合格のメールに梅の香りのせ
ティータイム孫の自慢に花が咲き
したたかにしなやかに生き母達者

枚方市　二宮紫鳳

雨に拾われアメという猫家族入り
ブランド眼鏡ノーブランドの顔に掛け
奥の奥覗いて少し寂しい日
宮詣り祝詞も児には子守歌
ぶつかって初めて見えた腹の中

枚方市　小林わこ

損得に俄然数字が強くなる
姉亡き後時に説教叔母として
集中力が力不足をカバーする
大柄で身形構わぬ夫と居る
眉片方描いたところでピンポーン

藤井寺市　津田シルク

混浴は足湯だけですオホホホホ
余命表神に足し算お願いし
落ちついて聞いてと訃報たんたんと
鞭打ってやり直そうか古稀まぢか
弘法もそっぽ向くほど筆択び

藤井寺市　俣野登志子

開演のベルひさびさに映画館
想定外慣れないハグに面喰う
子が切れる先生切れる親切れる
ラガーマン水一杯で生き返る
千両が万両よりも値が高い

箕面市　寺井柳童

子に見せる背だきれいにしておこう
苛めっ子に向かっていった孫を褒め
老いの趣味勇気とみるか冷や水か
定年日褒めてやりたい胃と肝臓
ゆったりと生きてみようと猫を飼う

八尾市　田邊浩三

階段に喜寿の体力試される
喜寿米寿スピード社会追いつけず
もったいない日本の文化子や孫に
しがらみを捨てると勇気湧いてくる
好き嫌いよりもやりがいある仕事

八尾市　松葉君江

立ち止まりどの選択で脳は行く
体内時計不規則という名のリズム
勇気ある発言具体案が無い
ご互いに健康ほめる病気歴
理解から誤解に変る腹の虫

八尾市　平川幸枝

豆撒きにパパの鬼の目笑ってる
風邪熱を共にのみ込む韮雑炊
口開けて次の嘘を待つ顔よ
コタツを囲み見せ合っている義理のチョコ
若夫婦コタツの猫もそっと出る

八尾市　中島春江

温暖化やんわり陸地消えて行く
改憲が今後の日本左右する
残業も成果主義では自己責任
大臣の嘘と誤魔化しもう飽きた
庶民にはいざなぎ景気ありません

八尾市　前田紀雄

戦いのないよう切に拝みます
背を伸ばし負けてたまるか傘寿坂
孫を褒め親を叱って年が暮れ
カニツアー飲むより手先忙がしい
未だ欲を捨てる気はない八十路

大阪府　若月祐作

殺伐の世を見限らず春が来る
モーツァルトで心の澱が徐々に澄み
冬枯れの雑木すかして春の花
広目天に心読まれてはたと悔ゆ
淡彩のカシニョールの絵春匂う

京都市　清水英旺

あとひとつ捨てると軽くなる小舟
狂いだす男五十の座標軸
喉の奥詫びの言葉が正座する
竹光で斬られた傷が痒くなる
王座から滑り落ちてる自尊心

京都市　中野六助

まだ舌に残る昭和の味がある
鎌の月心当たりをえぐりだす
温暖化人のこころは冷凍化
つかのまの夢に酔わせる試着室
図書館の窓辺に座り春を読む

浜松市　杉浦恵夢

雪のない冬に取越苦労する
合併に村で残った頑固者
大臣もしゃべり過ぎるとボロが出る
朝食に見る朝ドラも飯を食う
煙草は毒酒は薬と信じてる

佐渡市　高野不二

引出しにラベルを貼って里帰り
板前の顔に頑固と書いてある
全快を早めてくれた妻の愛
パーティー券顔の広さを頼り切る
シンプルな釜あげうどん食べる旅

横浜市　中尾哲代

無理するな楽もするなと迷わせる
兄貴面有って弟面が無い
歳月や孫が教師になる早さ
決断を一日延ばしして悩む
喜寿祝うお酒を友と贈り合う

横浜市　金森徳三

暖冬で梅と桜の揃い踏み
暖冬は嬉しいけれど困りもの
失言を取り消す時は要注意
宝クジ必ず当たり信じてる
サーフィンの上手い息子の処世術

横浜市　巌田かず枝

ホテル泊り先ず消火器と非常口
バーゲンのＢＧＭの勇ましさ
同病に心を開く友が出来
幻の彩り求め執る絵筆
息子には言えぬ小言を孫に言い

東京都　井上つよし

百回も噛めば明日が見えますか
四季咲きの桜に逢いに夢の旅
夢でよい英語ペラペラ喋りたい
口喧嘩しているうちはまだ蕾
有り余る金などないが妻がいる

昭島市　野口忠

風花に頬を刺されて決まる腹
それとなく少女の蕾ゆれ始め
冬の駅香るおでんに追いつかれ
上品な押し売り相手やりにくい
キッチンに機嫌警報つけておく

取手市　葛西清

賀状の絵瓜坊春の御挨拶
大地から命をもらう今日の膳
薄命の美の殿堂は雪まつり
嘘ほんと真実は闇雪が降る
格差には遠い政治家よく吠える

札幌市　小沢淳

寝屋川市　北田　ただよし

咲かそうと平和へ白い薔薇を植え
ブロック塀と共存してる蔦芽吹く
独り寝の昴の歌詞に起きる耳
塩揉みをしてまで痩せるプチ文化

大阪府　高木　道子

消化剤あればと思うわだかまり
狂う世を小川さらさらよく笑う
真夜中に吠える電話のサスペンス
向かい合うコーヒ近頃はずまない

八尾市　西川　義明

お誘いをかけて下さる内が花
休肝日日記のペンがすすまない
いじめっ子解けて互いに無二の友
お隣の百点パパとつい比較

河内長野市　木太久　正一

暖冬のこのまま春になればよい
この冬はシチューで腹を整える
春雨に濡れてペットの御供する
癒されるペットを飼って老いの日々

大阪府　西川　冷子

真冬日にはびこる草の根の強さ
まな板の鯉になり切り四面楚歌
余命は今片手と言われ術探る
お漬物期限切れごろ味アップ

神戸市　武田　恵美子

花冷えにマフラー手ぶくろセットして
雨の日は明るい傘で若がえり
助手席でいつもブレーキふむ私
受験生ゲームのあいだで勉強す

門真市　矢阪　英雄

談笑の声輪になって風ぬくめ
合格のしらせポストで弾む音
ボタン鍋カニ派におされ雪溶ける
アナログの手紙心が動いてる

松江市　松浦　登志子

この冬は君に夢中さキムチ鍋
折角の服出番なく春が来た
起きがけの神経痛で知る命
重かろう辛かろうとて足の裏

尼崎市　古川　正子

テレビ見て返事している静かな夜
バス待つ間久し振りねとよく喋り
暖冬の椿さいてる猫とおる
殻付のピーナツ撒いて鬼の面

大阪市　寺井　弘子

戻り道ない人生の悔い多く
喋り過ぎ心の傷を秘めている
足を靴に合わせて生きる重い背な
歯の奥に埋めた秘密が疼き出す

ロレックス時は同じく二十四時
振り出しに戻れと仏背中押す
世渡りに冷えた内臓湯に戻す
あれこれと幸せ詰める福袋

和歌山市　坂部かずみ

お誘いのある内だよと背のリュック
頭より心優しい子に育て
涙腺も頭と共に弱くなり
喧嘩しても少し遊びのある夫婦

京都市　西村益子

模様替え心の色も変えてみる
肩触れて微笑み返すご挨拶
くたびれたこころと遊ぶ千鳥足
ストレスを海に吐き出す深呼吸

吹田市　早泉早人

ひと呼吸余白が欲しい愚痴を聞く
モカ一杯香る向こうの瞳が涼し
錦の秋雲を燃やして陽が沈む
ひと言を返してほしい球を投げ

尼崎市　河津正治

いく度も挫折重ねて角がとれ
新たなる気負い漲るヨーイドン
自己主張ばかり多くてうとまれる
母親の過保護子供を駄目にする

寝屋川市　小嶋みさと

ハイウエーるんるん金も減ってゆく
人情のなまりに揺れる一夜干し
浮かれてはならぬ礼状今日も書く
ツイストを踊りたい日に君おもう

松江市　柏井日出子

団塊の汗とんだ裏目にうろたえる
二分咲きでもう騒ぎ出す花の下
桜麗し蕾も花も散り際も
日本列島笑顔集める花の下

紀の川市　木村徑子

体重計増減ゼロでまずはよし
今にみろ飲んだ涙は倍返し
もう一度じっくり見よう覚めた目で
酒止めてどこか間抜けた祝い膳

堺市　羽田野洋介

妻イタリアン亭主レトルト定年後
生む機械性能良くて子沢山
期限切れあるある我が家冷蔵庫
選挙ですやたら握手したがる手

泉大津市　助川和美

無意識に父真似ていた作業服
拍手より静かな時間欲しいバラ
誰も怨むな守る息子と墓参り
人の目を気にせぬ時は仏顔

高知県　いの静草

松江市　相見柳歩

あいのみちおうえんしてるとりやはな
恋の熱さましてくれる本の陰
ぼろぼろになっても夢の中にいる
逢ってから虹の架け橋渡れそう

出雲市　荒木英子

駅前に足湯の憩い春を待つ
手抜きせず余生楽しむ昼さがり
炬燵からドラマは進む自分史よ
梅便りうきうきしてる旅プラン

安来市　原煩悩児

一人っ子対話の世界独り言
喜寿金婚共に白髪となりにけり
七人の敵へ秘策の鬚をそる
日が暮れた明日の保障のないままに

鳥取市　山口千代子

貧乏もいいな振込み詐欺もなし
姑に仕え涙こぼしたのは昔
歳毎に五臓六腑が軋みだし
塗った爪あれで炊事が出来るのか

鳥取市　岡田信恵

人並に振袖披露親の愛
節分の鬼より怖い認知症
老いてくる夢が次第にＰＰＫ
マネキンが私好みで目をとめた

鳥取市　谷岡清子

ちぢんだ脳大事にしよう吾が命
一生は一生欲はほどほどに
生かされる喜び犬も知っている
はてしない海に心をさとされる

鳥取市　近藤秋星

産む機械などと俺でもよう言わん
高齢者だけが元気な国になる
所詮君は月の世界へ住む人よ
燕来てホームめっきり賑やかに

鳥取県　毎田信雄

親思う息子の言葉肩叩く
それぞれの思いはあれど多数決
カタログの餌にされてるお人好し
薬にも信用できぬ思いです

鳥取県　大田勝誉

手の温もりこねる餅には母の愛
もう少し睨みを利かす親で居る
雀ほどの年金暮しどうなるだろう
病む友に勇気をあげる言葉置き

鳥取県　岡村孝明

木の声に痒い所へ手当する
嘘少し混ぜて話に花咲かせ
降る火の粉素早く逃げて思案する
人類はいろいろなごみ産んでいる

鳥取県　飯野菖子

シングルで生きる楽しみ長寿です
大人でも子供の頃の歌がすき
のこのこと貴方の後を五十年
腕時計私の秘密語らない

境港市　遠藤トミ子

なにごともこじんまりして楽しんで
ほしいけどいいきっかけは素通りだ
ふる里に住める喜び家ありて
この指でお手玉作った昔の子

和歌山市　山田侃太

心配をすれば子どもの生返事
知り合いが犬探してるミニコミ誌
お茶漬の鮭焼いている朝が好き
ジャンプして君の花びら確保する

和歌山市　寒川武

禁煙の誓い紫煙で汚れてる
好景気わたしの家を忘れてる
ぼんやりとしているようで地獄耳
不孝者の僕にもあった遺産分け

生駒市　小西稔

近隣の鎖はずして話し合い
古稀過ぎて会社の鎖やっと取れ
渇く田の雨を呼びこむ蛙たち
政治家の発言渇き不信増す

尼崎市　小池幸子

飾らない大阪が好きケチもよい
里帰り白菜漬けて母が待つ
縁あって古家に越し穏やかに
根気よく孤独背負って八十路坂

加東市　安達厚

これでこそ冬だと寒さほめている
里捨ててやがては里に拾われる
お互いに耐えて忍んだ五十年
振り返りゃあっと言う間の五十年

加東市　黒崎美紗子

寒肥をバケツ一杯バラへやる
花をめで安らぐ心貰い受け
計算が合いゆっくりと昼にする
餌をねだる白鳥の群れ眼に浮かぶ

篠山市　谷田多美子

葱さげた友無防備で迎え入れ
黒豆の味噌を仕上げて長電話
小石三ッ小鯛を膳に誕生日
うるめ干しゆっくり焼いて昼御飯

大阪市　平嶋美智子

花屋には季節無くした花たんと
菊の花の季節さがしに行きましょう
四季の国今年の冬はかくれんぼ
いややなあ貧乏神に好かれてる

バイキング元はとれたと御満悦
この一年善女でいたい初詣で
ニュースまた頭下げてるえらいさん
財布のひも堅い嫁さんたのもしい

大阪市　澤田定子

嫁いでも後は実家を行き来する
図書館で空調心地昼寝する
乾杯のビールの泡に浮く桜
秘め事は少しずつ出し妻迫る

大阪市　吉川弘泰

安部さんも井川と一緒読み英語
金閣寺雪やでカメラはよ行かな
息吸うて吐いて疲れるレントゲン
CDの何処にもB面見当らず

大阪市　平井露芳

凛とした日本の顔は冬の富士
富士山を登った甲斐は御来光
コンビニをオアシスにして一万歩
薬より集う機会で出る元気

大阪市　田浦實

わだかまり桁をはずして四捨五入
水仙をバッサリ切って部屋に活け
宝くじ当った時をバネにする
幸せを抱いて戻らぬ日を過ごす

大阪市　吉内福世

風の迷路傷つきまどう花吹雪
花のごと燃える輪切のさくら炭
背信の人と語りて春の夢
悟り説く僧の衣は緋の衣

大阪市　吉田富美

ペコちゃんも隠し通せず負の連鎖
性悪の鎖も解いた自由主義
外人が綱も疑惑もとる国技
流行歌ナツメロだけが頼りです

茨木市　島田誠一

思い出は遠くになりておぼろ月
薔薇牡丹両手に花と粋な人
答弁をさらりと変える二枚舌
妻の愚痴馬耳東風と聞き流す

河内長野市　黒岩靖博

苦労人大上段にかまえない
いやいやで四角の部屋を丸く掃く
からっぽの頭かどうか振ってみる
何食べたい帰れば母はいつも聞く

河内長野市　宮守正博

寒い冬ひとりぼっちの母想う
雪かきのスコップ買ったが出番なし
披露宴別れる切れる言わないで
エステ通い誰に見せるのひとり者

河内長野市　内海綾乃

鯛よりも肉好きの子が世をおよぎ
生地のまま無菌で育つ一人っ子
頭から出来ないとすぐあきらめる
言うよりも涙をみせて訴える

岸和田市　中岡香代

妻が押す老々介護小さな背
悔しいね心のままに動かぬ身
少しだけ呆け可愛い母になる
ふるさとが同じで会話弾み出す

豊中市　荒巻夢

すり切れた辞書に余命の響きあり
よろけそうつかまった手に静電気
墨文字の礼状に見るお人柄
運勢はいいらしいのによく転ぶ

寝屋川市　森田麗

春が来る相撲チケット待ち遠し
わたくしを喜ばす日がきっと来る
老人力をもって喜びに変える
そのまんま知事に当選変るかな

羽曳野市　仲谷真一

古里に亡兄植えし花が咲く
天満宮梅見に出かけ香りよし
小学校ダルマストーブ思い出す
陳謝してすまない事がありますよ

羽曳野市　松本静子

嫌な夢朝の味噌汁忘れさす
自己顕示そんな服着てくたびれる
大臣は人も機械も一緒くた
下校の児ストレス溜めて缶を蹴る

枚方市　小川良吉

白菊をいっぱい抱いて墓参り
思い出を沢山くれて有難う
呑み残し薬を見てはまた涙
お兄ちゃん写真の中で生きている

藤井寺市　伊藤アヤ子

豆撒きに雪の布団が見当らぬ
温暖化地球のうめき声がする
暖冬に庭の花芽も思案顔
病む母に遠くに嫁した親不孝

藤井寺市　吉田喜代子

寂しさを察したように友が来る
暖冬に猫の恋歌早聞こえ
イベントに暇人仲間並んでる
寝た切りの母へ梅の香風に乗せ

箕面市　広島巴子

決断へ一球外す変化球
本心を読んだ後から車間距離
一言が心の袖に引っ掛かり
風呂敷の包容力にかなわない

八尾市　田中トシエ

挨拶の如く迎える自動ドア　大阪府　畑中節子
月までが揺れて恋する露天風呂
潮騒が耳につく夜のカニ御膳
旅行好き温い我が家はもっと好き　大阪府　小栢こずえ
何もせず生きてるだけで疲れてる
読み書きが好きで老いてもなお盛ん
お互いに悩みを溶かす長電話
院号をもらい浄土の旅支度　北名古屋市　片岡文男
柏手を打ってお礼がしてみたい
どの木にも平等につく花芽どき
領収書整理で分かる医療高
事故が起き街灯一つやっと付き　浜松市　中田尚
ご入学父兄のスネがやせてゆく
四月バカかるーいウソならいいのだが
届かない地球のさけび人の耳
時としてバッジがじゃまになる事も　藤沢市　加藤スズコ
病む床に触れた言葉に気を貰う
初雪だ孫の縁組み祝うよに
初対面笑顔に触れて息を抜く
週末は話題盛込む鍋料理

温故知新

晩酌の淋しさ月に見て貰い　大阪市　正本水客
生き字引金にならない用ばかり
渋むな男振りより使いぶり　ホノルル市　内藤草一郎
酔ふて居るうちが俺とは哀れなり
大雨警報橋が流れてしもてから　大阪市　須崎豆秋
暑いのにわざわざ火事を見に走り
父として四角に坐る癖がつき　大阪市　菊沢小松園
責任の軽い地位なりよく喋り
セーヌよりわがせせらぎの美を語れ　貝塚市　早川野甫（棲世）
頂上で五分ほど耐え征服記

『川柳雑誌』№三一八号（昭和二八年十一月）麻生路郎選より

特集

私の宝もの

（順不同）

毎朝フランス料理を食べながら

板尾岳人

出身小学校の大先輩である直木三十五と同じ大阪市内に、帽子屋の十人兄弟（男五人・女五人）の末っ子として僕は生まれた。満州事変が始まった年の十二月のことである。

戦前、戦中は焼夷弾の下で生き抜き、海軍少年兵の厳しい訓練に耐え、終戦を迎えた。長寿で人生を全うした両親から、厳しさと優しさを受け継ぎ、虫歯の無い、歯痛知らずの健康な歯に恵まれた。

何でもよく噛んで好き嫌いの無いのが健康の元であり、自慢の一つである。そして美人であろうとなかろうと、料理好きな妻がいてくれる。朝食は、キャベツ・玉葱・納豆・ミニトマト・豆腐を白い皿に盛り付ける。我が家のフランス料理（時価一五〇円）である。

とりわけ、最近は豆腐に凝っている。一丁五〇〇円の豆腐にドイツの岩塩をふりかけて食べると絶妙な味がする。一杯のコーヒーを節約することで、一丁五〇〇円は決して贅沢ではない。煙草は止めて二十年、酒は少々、しかし、僕のもう一つの贅沢は甘いものである。

知人からのお土産はいつも和菓子で有り難い。デパ地下では必ず和菓子売場に足が向く。いつも東京とらやの羊羹を横目に通り過ぎ、赤福を買って帰る。

七十五歳にして、虫歯の無い上下全部揃った歯が僕の一番の宝である。そして美人より料理上手の妻を選んだことは間違いなかった。

毎朝、一五〇円のフランス料理を食べながら幸せを実感している。

押入れにあった本

瀬戸まさよ

私が幼かった頃、押入れのなかから見つけた本、それが修養全集だった。

私の家は本に縁のない家だったから、私は好奇心いっぱいで広辞苑ほどの分厚い、重たい本を、よっこらしょと押入れから持ち出したものである。畳の上で広げてみると、ペン描きの戯画もところどころに挿入され、おもしろくてパラパラと読み出した。本の内容はお伽噺、寓話、道徳的な道話などの集大成されたものであり、父が買っていたことも、後年になってわかった。私は自分が理解できる話、興味のそそられる話だけを選んで飽きることなく読んでいたように思う。

さて、私が気に入って繰り返し読んでいた話の一つは、次のようなものであった。

「ある百姓が死ぬまぎわに、息子たちを呼び寄せ、葡萄畑に隠した宝物がある。探すがよいと言い残して息を引き取った。息子たちは宝物を探すべく、隅から隅まで懸命に畑を掘り起こしたが何も出てこなかった。しかし、

葡萄畑の地面はすっかり掘り返され、今までの何層倍もの葡萄が実ったという」

よく知られている話であり、イソップ寓話集のなかに収められている一話なのである。幼かった私には、葡萄の豊作こそ宝であるという真実が理解できなかったものの、この話が好きだった。努力することが宝であることの事実、また、私にとって読書の楽しみを与えてくれたおおもとは、この修養全集ではなかったかと、今思うのである。

あの六年間

仁部四郎

昭和十九年、二十年、二十一年の各年に旧制の中等学校に入った人の多くが、戦後の学制改革によって、結果として「中高一貫」を経験することになった。もちろんその六年間の経験の個人差は大きい。例えば、敗戦による外地からの引き揚げで学年が一年遅れている人と、高等小学校で一応終了していた学校生活が再開された人の経験の差を、現今の中高生が想像することは不可能であろう。

当時の六年間の後半は、新制高校なのだが、そこまで進めなかった事情にある人も多かったのだから、父の失業と帰農にともなうタケノコ生活のなかでの六年間の通学は、そのことだけでも〝宝物〟であった。

旧制佐賀中学校から旧制唐津中学校へ転校して汽車通学をしたのだが、朝は純客車（車両は貨車にロープのドアという時期もあった）だから四十分間ぐらいの乗車時間だが、帰りに時に貨客混合列車に乗ると、途中駅で貨車の入れ換え等があるから七十分間ぐらいになる。この往復の時間が、予習復習等あらゆる情報交換のゴールデンタイムになる。

高校二年生の時から男女共学になった。女生徒のことはともかくとして、女高師出の国語と西洋史の二人の先生の新鮮な授業は、教科書も不揃いなその当時においてまさに〝宝物〟であった。

畏友ということばそのままの友人がくれた書物が形あるものとしての〝宝物〟である。岩波文庫というものを、自分のものとして手にした時の興奮が〝宝物〟であったと言うべきであろう。

あの六年間から、六十年ほどの時間が経過した。昭和二十年の春からの六年間は、カオスの時代に私はあった。それが〝宝物〟に見える年齢に、今はある。

パスポート

松本文子

宝物はたくさんあったけれど欲のなくなった近頃では、失って惜しいと思うものはほとんどなくなってしまった。

お金とてあればよし、無くてもよし。子や孫ももはや私を必要としなくなり、今ではお荷物と思っているのではないか。蔵書等も私が死ねば処分するであろう。宝石にも興味がなくブランド品は皆無。さばさばしたものである。

それでも何かないかと引き出しを開けてみたら、二冊のパスポートがあった。大型のものは期限切れでパンチで穴があけてある。

前科何犯の如き恐ろしい顔の女の写真がある。一九九二年出国とあり十五年前の私だった。平成四年度、島根県女性海外派遣団（女性の翼）第三団十三名中の一人として、スウェーデン・イギリスへ飛び立った。

あの時のあの時間帯が私にとって宝ものかも知れぬ。帰国後も毎年、会としての活動、実績と未だに尾を曳いているが素敵な女性た

ちだ。

スウェーデンのホームステイ先のピーア夫妻が一昨年、我が家に来てくれた。嬉しかったなあ。息子が国際ボランティアをしているので、毎年外国の若者たちを迎え入れている。イタリア美人キャサリンちゃん、ゲーリー君、小錦によく似たカノンさんetc。それらの多くの友達……。

二度と逢うこともないであろうその人たちの笑顔も、私の大切な宝ものである。

次の宝は夢の中

川端一歩

以前、川柳塔誌に神谷凡九郎さんから譲り受けた、川柳雑誌№306～№460と川柳塔創刊号から昭和50年1月号（№572）は〝私の宝もの〟と書きました。それは今日も変りません。その時、東野大八先生の『路郎物語』を紹介し川柳塔誌に再録され本当に嬉しく思いました。

また麻生路郎著『川柳とは何か』の復刻は路郎先生を知る上で大変有意義な出版でした。しかしまだ私の心にひっかかるものがあるのです。路郎先生を語る人がだんだん少なくなり、『川柳雑誌』を持っている人も少なくなり、いずれ散逸してしまうのではないか、薫風先生が編まれた『麻生路郎』（構造社出版）は立派ですけれど。

いまのうちに『川柳雑誌』に掲載された路郎先生の柳論、エッセー、座談会、選評等々を編んで『麻生路郎川柳文集』として残して欲しいのです。経済性は？と問われたら、ウーンと唸るしかありません。秀れた川柳文学を後世に残すことの大切さを思うのです。

『麻生路郎川柳文集』を『橘高薫風川柳文集』の横に揃えたいのです。

同人の中にはその方面のお仕事を得意とする方もおられると思います。

キャンペーンをして資金を集めて…。私の宝ものは春の夢で終るのでしょうか。

ねんねころいち

山田耕治

「ねんねころいち　天満の市よ　だいこ（大根）そろえて　船に積も」

今まで朝のテレビなど見なかった私が、NHKの朝ドラ「芋たこなんきん」の新聞記事を読んで、この歌がきっと聞けると思って見はじめました。やはり、聞くことができました。主人公町子の幼い頃の回想場面で、町子とけんかしてベソをかいた妹を、曾祖母がなぐさめてやるところです。

「船に積んだら　どこまでいきゃる　木津や難波の橋の下」

曾祖母は、膝に伏せた妹の背中を、この歌をうたいながら、拍子をとって軽く叩いてやっていました。ほんの一分か二分ほどのシーンでしたが、遠い昔、私もこんなことがあったような気がして見ていました。

「橋の下には　かもめがいやる　かもめ取りたや　竹ほしや」

この歌は、大阪にお生れの方はご存知の方も多いと思いますが「なにわの子守歌」と言われているもので、昔、天満に魚菜の集荷場があり、木津や難波まで船が往来していた頃からうたわれていたそうです。中之島の難波橋（ライオン橋）の近くに歌碑が建てられています。中之島の近くで生れた私にとっては大へん懐かしい歌です。

私は、大阪市東区（現在は中央区）大川町で生まれました。大川町は、土佐堀川の左岸、淀屋橋から肥後橋の間の細長い町でした。母

は商家の主婦として忙しく、私は祖母に守りをされて大きくなりました。

寒いときにはねんねこで、歩けるようになれば手を引かれて、橋の上から、往来するポンポン船やかもめを見たり、淀屋橋で市電がカーブしていく様子を見ていたそうです。

このとき、祖母が口ずさんでいたのがこの歌でした。祖母がか細い声でうたう哀調おびた旋律と、歌詞が、遠い日の記憶の中にしみ込んでいます。芒々六十年のなつかしさ、いろいろある宝ものの中から、忘れ得ぬ歌を選びました。

川柳と畑とみつばちと

北野哲男

十五、六年前に購入した荒地を開墾して自家菜園にしました。元の地主は山野商法に乗せられ値上がりを期待して購入し、約十年間所有したが見込みもなく、持主自身も高齢になり他に利用も考えられないので売却を決めたようです。

我が家から歩いて約五百歩ほどの近くに、こんな土地があるとは知らなかったので見学に行くと、三十区画のほとんどが手入れもされず放置され、一面に笹が繁り松や雑木が五、六本生えていました。

購入をしてからが大変でまず笹を刈り、耕し易い場所に一畝作るのに、木の根、草の根との戦いが十日あまり続きました。そういう訳で初収穫の大根には大感激でした。

その後の一番の苦労は、直径二、三十センチもある数本の松の木を、余所の地に倒さないように伐採することで慎重に研究を重ね、二年半ほどで全部処分できた時の嬉しさは忘れられません。

しかし引き続き、松や雑木の切り株を引き起こして焼却してしまうまでに、約五年かかりました。今ではこの四十坪の土地の半分で四季の野菜を、有機肥料と無農薬で栽培し楽しんでおります。

残りの半分には、だんだん高齢になり広い場所を耕すことが無理になることを考え、孫誕生の記念樹の柚子、柿、梅、栗、グミ、やまもも、木いちご、いちじくを植えています。

これらの実りは孫の成長と共に量も増え、心が豊かになり楽しいものです。またこのような良い環境の中へ、日本みつばちの巣箱も置き、家族が一年中食べる蜂蜜を採集しています。

最近は美味しい野菜を長期間採る工夫をし、茄子、胡瓜などは二本ずつひと月ほどずらして植えるとか、馬鈴薯も変った品種を、白菜は早生、中生、晩生を配分良く、大根も漬物が旨いものと、煮たりおろしに向くものとかを選ぶなど、狭い畑で考えて作る楽しみを拡げています。

川柳と畑と日本みつばちという宝のなかで、元気で忙しい毎日です。

小さな四季

白根ふみ

私の家は小さな小さな屋敷に、折々花が咲く樹を何本か植え、それぞれの季を楽しんでいる。

元旦は居間の遥か向こうの松の間から、初日を拝み、キッチンのブラインドを揚げると、蝋梅が早くも黄金の大粒、小粒の花を薫らせ新春を祝福してくれている。

東南の縁側へ回ると、山茶花が赤い絨毯を敷きつめ、掃いても掃いても散るばかりで、見事である。

霰が降る頃、凍て付く中で雪椿が凛として

咲きだし、身の引きしまる思いと美しさに感動する。

新緑の候を迎える頃、山法師が四枚の苞を花弁のように美しく開き、びっしりと連なり、道往く人が立ち止り、毎年楽しみにしている等と、嬉しがらせてくれる。

然う斯うするうち、沙羅の木に高々とクリーム色の花が咲き、たったひと日でぽろりと落ちる。その姿はビロードに包まれ、あやしい光沢を放ち、このまま掃き捨てるには、余りにも切ない限りである。

夏が訪れ、北側の窓には、百日紅が目を見張るほどに広がり、熱暑の中をびくともせず、蝶々まで招き入れ、じりじりと咲きつづける。暑さが苦手な私は、その忍耐にほとほと敬服してしまう。

やがて秋を迎える頃、薄が穂を出し、裾の方ではすずらんが、日陰にも愚痴ることなくたたみ一畳ほどにも広がって芳香を放つ。

木枯しの頃になると、坪庭のいろはもみじが錦繍に輝く魔術を披露してくれる。

ダイヤにも、真珠にも縁がないが、折々の木々の移ろいが、私を生き生きさせてくれる。

腐蝕しがちなこころにいのちの息吹をもたらしてくれる庭の木々は、大きな宝ものと感謝している。

やっぱり「充子」

播本充子

私は生来の楽天家で、物欲が乏しく幸せの設定度も低い。もっと言えば、もう何もこの世で欲しいものはない……心境。

四年前に古い家屋を解体、家財全部に目を通したが、これというお宝は一点もなかった。夫と「結局、家族と友人が私たちの宝ものだね」を確信した。

しかし、今回改めて考えたら一つあったのですよ。「充子」です。これはすごい宝もの。

命名のエピソードは昭和十四年、女児誕生。家長である祖父が紋付袴で人力車を雇い、姓名学の権威の門戸を叩く。恭しく戴いてきたのが「旨子」。

ところが母は「妹が芳子、姪が欣子。だから私が命懸けで産んだ娘にこのヨシコは絶対嫌だ」と、当時としては嫁の分際でとんでもない発言。すったもんだの揚句に付け直して頂いたのが「充子」。

以来、この名前のお陰もあってか、そこそこ順調な人生を歩んでいたが、二十四歳の時夫となったのは「賀成」氏。そして生まれた長男には「賀彦」と命名。勿論、母はヨシナリさんを連発し、初孫のヨシクンを盲愛した。

五十歳で川柳に親しみ、雅号を付けるよう勧められたが、こんな経緯があって「充子」で通している。

名前は親からの最初の贈物、という言葉を聞いたことがある。あの時、温和な母が一世一代の反発をし、意志を貫いて贈ってくれた名前を誇りに思っている。

掘り出しもの

清川玲子

先日、立ち寄ったホームセンターで、ガーデンコレクションのバーゲンをしていた。一番に目にとまったのは、白セメントで作られたイタリー製の石像。

公園などでよくみかける小便小僧を二つからませたような像で、50㎝の丈のもの。

以前から欲しかったがなかなか手に入れるチャンスがなかった。足元には台が付いて安定し、しかも格安の値段。本来は、噴水セットの一部なのだが、切り離してあるので水は

出ない。それなのに結構、一つのグッズになっている。うれしくなってくる。小人の像も一つ買い込んだ。30㎝ぐらいの丈で、あごまでの長い髭、頭には頭巾をかぶり、大きな目がひょうきんで白雪姫の小人そっくり。

最近のガーデニングブームに、小さなテラスガーデンから、広大なガーデンに似合うコレクションは、どこも所狭しと店頭に並べられている。「いいな」とながめていただけのものを手に入れた満足感でいっぱいの私。

造園業者に少し手を入れてもらっていた南側の庭に、いろいろ揃えたいと願っていた。

宝を掘りあてたようにはずむ気持、まだこんな弾みが残っていたのかと自分自身おどろく。広くはない芝生の中と、夏にはオレンジ色の花をつけるノウゼンカズラをからませたアーチのそばに置いてみる。冬枯れの一面だがレンガを積み上げたポーチとも調和して、半分ほど芽を出したヒアシンスの鉢々もこの同居人をよろこんでいるよう。十キロ以上あるものなのでまた一苦労だった。

キッチンに面した庭なので、朝、カーテンを開ける楽しみが増えた。食卓からもよく見え、気のおけない友人とのおしゃべりの場にもなるので、しばらくは、この掘り出しものがうれしい話題になりそうだ。

父と恩師の教え

瀧本きよし

昭和十三年七月、北摂の山間部は、一ヵ月あまり雨が断続的に降り続いていた。この日も雨が激しく降り、道路に冠水の恐れがあるので小学校では、児童を教職員が手分けして家に送り返すことになる。

父は、全員を家まで無事に送り届ける。その後、老婆と嫁が二階へ家具を運ぶのを教え子の少年と手伝う。その間に、地鳴りがして山が崩れ、雨水が濁流となって流れ込んできた。父は、老婆と嫁を両手に抱え、少年を背中に背負い川下へ流される。父は少年を岸に押した。嫁は皆の邪魔になると判断し、父から離れた。夕方約三キロ下流の樹木に挟まった父の遺体、近くに老婆の遺体が見つかる。

自分の命を顧みず村人を救った父が、殉職として称えられ「銀杯」が下賜され、大阪市大手前の教育塔に祀られている。

当時、私は小学一年生で父の勤めている学校に通学していた。雨が酷く降り続いていたぐらいの記憶しか残っていない。父のことは、後に出版された「輝く銀杯」という本でしか判らない。それによって父の師範学校での教育観を知ることが出来る。

「(略)教育者といふこの上もない立派な天職を與へて下さった。(略)教育者でも、小学校教員であることが、自分にとって光栄なものが他にあらうか。最も神に近い子どもの手をとって、共に大日本の建国の理想と精進せうといふのだ。これほど美しい誇らしいものが他にあらうか」(原文のまま)

高校時代にこの本を読み感銘し、私も父を追い小学校教員になろうと決心していた。

更に、私の恩師の影響もある。6年生の後半、受け持ちの子どもを平等に扱っていないのが解ってきた。これは子どもには致命的な不幸である。この恩師からは「私のように受け持ちの子どもを悲しませるなよ」と教師の神髄を、恩師から教えられた。

母を早く楽にしてやりたい、子供が大好きだったことから、大阪学芸大学2年コースを私は選ぶ。

二十歳で小学校教員になる。教育者という天職、神に近い純真な子どもを平等に導いていくことを目指した。「嘘をつかない」「人の悪口を言わない」の学級経営を徹底した。一人一人の子どもを大切にするために、どんな

家庭でどんな親の下で暮しているかを知る。そのために、ありのまま、包み隠さない作文や詩を書かせた。常に「先生は人間だ。神ではない。だから間違いもするだろう。みんながおかしいと思う行動を先生がしたら遠慮せずに作文や詩に書いてくれ。言葉でいえるなら言って欲しい」をモットーに、父の教育観と恩師の「子どもには平等」を基盤に、教員生活四十年を過ごした。

私の宝物は「父と恩師の教え」である。

心の宝

森　茂美

私は徴兵された海軍機関兵でした。横須賀で小さな部隊が編成されその下っぱの一員となり、昭和十八年五月、北へ征く輸送船に乗りました。行く先は聴かされていません。

途中でアッツ島の玉砕を知りました。アメリカ軍の攻撃を避けながらオホーツク海を北上し、幌筵島（現在ロシアのパラムシル）に上陸しました。八月にはキスカ島の無血撤収があります。その頃からアメリカ軍の空爆がはげしくなり、艦砲射撃も受けました。それまで教わっていた以上にアメリカ兵の勇敢さに驚いたものでした。

そんな私達の部隊も弾薬が尽き、食料も乏しくなり日本に撤退することに決まったのは、二年後の五月でした。隊員の4分の1を残し寂しく乗船致しました。カモフラージュのために残された人達は、終戦とともにシベリアに連れて行かれたと聞きましたが、詳しいことは未だに解りません。

大湊港に辿り着き下北半島の山の中にテント張りの兵舎を造り、私は迫撃砲をもらっての生活でした。

数日後の休日に大畑という町に出ました。子供達と遊んでいるうちに、正子ちゃんという子と仲よしになり「兵隊さん、うちに泊りなさいよ」との言葉で、そのお宅に泊めていただくことになりました。小原さんというお宅でした。戦争で腑抜けになっていた私は、翌年の三月まで居候しました。あの食糧難の時に大変な負担をおかけした事と思っております。

その後、家業の建設業で転々と居をうつしましたが、六十二歳で現役を退きこの出雲市に永住することに致しました。

人と人との付き合いは、石ともなれば宝ともなります。私の場合は小原様始め同業の皆さん、そして川柳の諸先輩、柳友の皆さん、どなたも宝です。

私の部屋には秋になれば毎年、小原様から送られる林檎が、食べるに惜しくまだ残っています。赤く輝いている林檎の心が私の宝ものです。

ふたりの宝物

米澤俶子

昨年十月に路郎賞を受賞しました。思いがけない受賞に胸が震えましたが、私の受賞を路郎先生はきっと苦笑されたことでしょう。この路郎賞が私の一番の宝となりました。

川柳塔とのご縁に恵まれ、皆様方からいただいた身に余る、立派すぎる宝です。息子や娘、孫達にも披露しました。

「スッゴイね、ばあちゃんは」と孫たちは目を丸くして喜んでくれました。お陰でばあちゃんの株は格段にあがりました。

この宝物を、今は亡き橘高薫風先生にも御覧いただきたかった…と残念でなりません。

永年、喜怒哀楽を共にし、協力を惜しまず私を支え続けてくれた夫との、ふたりの宝物

でもあります。
折々にこの宝物にふれながら、作句の糧にしたいと思っています。

「句評」という宝物

山岡冨美子

きっかけは、こんな短いものなら私にも作ることが出来るのではないか、という不遜な考えが芽生えて、それが川柳との出合いになりました。
勿論そんな甘えが通じるはずもなく、試行錯誤の日々が以後延々と続くことになります。
平成十年度から始めたカルチャー教室の川柳がようやく一年余り経過したころ、これも怖い物知らずに投句した朝日新聞の川柳欄「なにわ柳壇」に初入選しました。
以来、百句入選を果たすまで、ほぼ休まず投句し続けた六年弱は、初心者として多くのものを学んだ大切な時期だったと思います。
特に百句の内の十五句（橘高薫風先生八句、田中新一先生七句）に頂いた句評に、大きく導かれたと言っても過言ではないと思います。
川柳のあるべき姿＝立ち姿とでもいうべきもの、十七音字の持つ力と広がり、一文字の大切さ、鑑賞の仕方、作句の面白さ楽しさ等々。それは今も私の指針であり続けています。
また故薫風先生の評は、もう頂く機会はなくなってしまったという意味でも、句本体からはなれ、それ自体が私の心の中に屹立し、お手本として輝き続けています。何物にもかえがたい大切な宝物として。

揉み手する仕事の鬼を見てしまう　冨美子

平成十七年一月十五日「なにわ柳壇」（評）江戸の縦割り社会と違って、上方は商人たち横一線情報集めの庶民の町であり続ける。株式会社になってからも、社長さえ揉み手で商取引をし、機械化の世にもそろばんをおろそかにしないのである。（橘高薫風）

錆びたピッケル

早川盛夫

何度か捨てられる運命に遭いながら、不思議に生き残ってきた物に、ピッケルと登山靴がある。昭和三十年代の物でかなり旧式、特に靴などはとても重量感のあるがっしりした代物で、当時よくこんな重いものを穿いて登山していたものだと感心させられる。
ピッケルは書斎の壁に掛けてあるが、一時期、確かり私の登山をサポートしてくれた思い出深い物である。
一番最初に使ったのは谷川岳であると思うが、深く印象に残っているのは剣岳から黒部へ抜けた時の、長治郎の雪渓でのグリセード、穂高岳ジャンダルムから落石の岳沢を下った時の恐怖など、当時をまざまざと思いだす。
私の登山の約八割は単独行であったため、心許せる岳友はいないが、会社のクラブOBでもあったことから年一度は六、七名のパーティを組んで長期登山を行なっていた。
その中で特筆すべきは夢の台地、雲の平を踏破した時の思い出である。黒部川の源流で北アルプスの最奥地にあり、アルピニスト憧れの楽園である。数々の庭園が点在し、日本庭園、スイス庭園、ギリシャ庭園、アラスカ庭園などそれぞれに名前が付けられ、高山植物が咲き乱れている。
そこから眺めるアルプスの景観はまさに圧巻である。槍、穂高はもとより鷲羽岳、黒部五郎岳、水晶岳が池塘にその影を落としまさ

にこの世のパラダイスである。
壁のピッケルを見るたび、若き日々に思いを馳せる毎日である。

思いでのなかに生きてる槍穂高　盛夫
ピッケルを眺め安らぐ老いの日々　〃
また何時かなどと叶わぬ山の夢　〃

川柳と二人三脚

松尾和香

孫守りも終えてこれからの人生何か楽しく送れたらと考えていました時に、川柳に出合いました。仕事一筋、次に孫守りと、趣味には程遠い私でした。

最初は五・七・五に言葉を入れるだけで精一杯でした。五・七・五に人間を詠むと教えられても、何にしぼって詠むかも解らずに柳誌の句会案内を見ては、作句よりも大会参加を兼ねて旅をすることに思いを募らせて、句会へ参加していました。

句会場で先生方、先輩方の御句を拝聴させて頂き、川柳とはこんなに心に沁みるものと奥の深さに驚きました。時を同じくして牛尾緑良先生のカルチャー教室川柳入門が始まりました。基礎から学びたく思い勉強中です。何も解らないままに旅好きの私が入り込んだ川柳と毎日二人三脚しています。

家から眺める紀の川は私のふるさと古座川と共に大好きな風景です。家族旅少し広げて社会等、心の趣きを書いて少し時間をおいて読むとがっかりするのですが、御飯を頂くようにまた書いています。投句の会、参加の会とあっという間の六年でした。

これからは体力、頭の働きも低下していきますが、無理をせずに自分に合った川柳の勉強を続けたいと願っています。句会場でお逢いする方々の笑顔に負けない笑顔で、残りの人生を川柳と二人三脚でと思っています。

弄び弄ばれて　五七五

園山多賀子

「出雲総合芸術文化第二十八回出雲市川柳大会」という長い標題の川柳大会が昨年、十月十八日、出雲市駅前にあるパルメイトの四階ホールで開催された。川柳の年中行事としては、一年中で最も大がかりな催しである。

地区外から来られた未知の方も多く、いずれも自信満々の顔ばかり。大会という名に恥じない顔ぶれであり、さすがに緊張を覚える。

席題は「味」。「隠し味自信過剰でないですか」を初め、辛うじて三句が入選した。まあまあという成績である。このくらいが限界であろう。

大体どこの句会でも同じかと思えるが、練りに練った推敲の句、自信のあった句でも没になることが多い。いつでもそうだというわけでもないが、瞬間的にパッと閃いた句が入選することが多いようだ。もちろん私の場合だけのことかも知れないが、結局それは新鮮味を買われたということなのだ。感覚の問題ともいえる。

とにかく、読み上げて披露される披講までが醍醐味の時間である。これは投句をした当人でなくては味わえない気持ちであろう。

五七五は日本独自の短い定型詩である。俳句も同じであるが、短い詩でありながら心のなかの情景を表現しなければならない。川柳はユーモアの中に「うがち」がないといけない。川柳に関わっている者として、それだけ奥が深いと思うのは手前味噌であろうか。

川柳に翻弄されているかも知れない。それでも楽しければいいではないかと思う。少々作品が甘くてもいい、人生、楽しければよい

ではないか、と開き直りに近い心境である。
私から五七五を取り除けば、残るものは何もない。惚けが進行するばかりでそれでは余りにふがいなく、家族に迷惑をかけるばかりだ。五七五は私にとって宝ものである。翻弄されてもいいではないか。若干の余命である。悔いは残したくない。

卒寿今おこがましくも未だ女　多賀子

私の宝物のために

井上桂作

近年の天候は、なぜかおかしい。誰もが異様に感じています。この温暖化が創り出す不安は、私共の孫・ひ孫の代には、果たしてどうなるのか。私の宝物である孫娘のことをかんがえると不安になってきます。

私事で誠に恐縮ですが、この孫娘を赤（本名は真凛）と呼んでいます。丁度生まれた時、娘婿が東京に出張中で名前を決めていなかったので、致し方なく「赤ちゃん」と半月間も呼んでいました。

幸いにしてすくすくと育ち、今は小学一年生です。赤・赤と呼んでいるうちに、この愛称がすっかり好きになり、今でも怒られながら呼ぶ始末です。四人の孫がいますが、赤にすっかり親しみを覚え、ジジイ・ジジイと呼び捨てにされながらも、私の大事な宝物となっています。

話は変わりますが、前述の「地球温暖化」の問題は、大気中で二酸化炭素などの温室効果ガスの濃度が増加し、それがために地表の温度が上昇する現象です。最大の発生原因は石油・石炭といったいわゆる化石燃料です。

現在世界の排出量は減るどころか増えています。温暖化の進行程度の予測（スーパーコンピューターによるシュミレーター）によれば、一応安心できるのは、私共の子供・孫・ひ孫の三代約百二十年と推定されています。

人類がこの地球を支配するようになったのはわずか数万年前ですが、急激な経済活動・工業活動を拡大し大量廃棄型の在り方を普及させた。そのため人類は加害者として、また被害者として地球の運命を左右する大きな課題を背負うことになりました。

ガイア理論で有名なラブロック博士は、地球をひとつの生命体として、ギリシャ神話の大地の女神を意味する「ガイア」と、親しみをこめて呼んでいる。地球の将来、子孫の繁栄を願って、温暖化が創り出す不安の対策として地球人の意識改革にまつより方法は考えられません。

趣味の宝と実益の宝

宮崎シマ子

今から二十二年前はＮＨＫ川柳教室に通っておりました。私は還暦になり薫風先生に何か書いて頂いたら、と友達が言ってくれましたが、不肖の弟子の私は、そんな恐れ多いこと厚かましく、ようお願いしませんでした。しばらくしてそれはそれは立派な色紙に

還暦の人艶やかに旅と句と　薫風

墨痕鮮やかに書いて下さいました。嬉しくて嬉しくて先生にも、また頼んで下さった友達にも感謝、感謝、今も大切にして特に誕生日など、床の間にかけ眺めて楽しかった思い出にひたり、先生を偲んでおります。

もう一つの宝は古い古いミシンです。嫁入りする時、母に無理を言って買ってもらったものです。終戦間もない時で母には大きな出費であったと思います。以来ずうっと私と苦楽を共にしてくれたこのミシンで内職はしなかったが、子供の服、孫の可愛いもの、そし

て自分の着る物、持つ物、下手でも何でも作って楽しみました。

途中で分解掃除をしてもらいましたが、今も健在で私の言うことをよく聞いてよく働いてくれます。ベルトが延びたなあ、油をさしてやらんとなあ、なんて一人言を言いながら今日も小さい袋を縫うことに精を出しています。一つは趣味の宝もの、一つは実益をかねた楽しみ、八十歳を過ぎた今、この二つを生かして余生を楽しみたいと思っています。

水泳とハチドリ

喜田准一

私は高校時代、今でいう体育系の生徒で水泳部に所属していた。疎開先が紀ノ川の畔で育ち、中学時代に我流で覚えた水泳の腕前は悪ガキ仲間で相当な速さで天狗になっていた。

高校入学後、先輩に混って練習に参加。ところが先輩達の速さと泳ぎの美しさに驚くと共に、圧倒された。遅れまいと必死にもがくほど、息苦しいだけでどんどん離される始末。競泳の基礎が出来ていなかったのである。

コーチの先生から、しばらく見学して先輩の泳ぎと自分の違いを、よく考えるよう指導された。一週間水に上がった河童である。

そこで発見したことは、やたら力まず、泳ぎにリズムと遊びがあること、手（ストローク）と足（ビート）、それに呼吸のバランスに無理がないことであった。それらを頭に入れ、再び練習に参加、特訓を重ねるうち、力みが取れ、浮力と推進力も倍加した。

シーズン終了前には、先輩に互して、時には先輩を負かすほどのスイマーに成長していた。そして二年生からは、選手として県大会にも出場することができたのである。

この経験を通し、必要以上に力まぬこと、何事もバランスとポイントが大切なこと、中途で投げ出さず、継続は力なりを学んだ気がする。古希を過ぎた今も、あの部活をなつかしく想い出している。

平成十八年八月、NHKニュースセンターで紹介されたハチドリ物語に感動した。南米原住民の間に伝えられている十七行の物語である。要旨は、森が火事となり一羽のハチドリが火を消すため、一滴一滴の水を嘴で運び、他の動物達から、何故そんな効き目のないことを繰り返すのか、と笑われた。

ハチドリは「今、山が燃えている。自分は自分に出来ることを、精一杯やっているだけだ」と答えたという話である。この本は、現在若者の間に静かに広がっているという。

なにごとも力まず、精一杯というハチドリの姿勢は私の胸にキラリと光っている。

大事なミシン

岸田知香子

昭和一桁代に母がミシンを購入しました。シンガーミシンで今で言うインストラクターが来て指導して居り、私達姉妹二人の服をお揃いで縫っていたのを覚えています。洋裁、編物の好きな母でした。

昭和十三年、母が、十四年に父が相次いで亡くなり、私達二人は生れ故郷の大阪の伯母に引取られて、東京から戻って参りました。ミシンとピアノだけ一緒に。

いろいろありましたが、戦時中はミシンさえあれば何とかなると考え、頭部を板からはずしボストンに入れて、知り合いの農家に預ってもらいました。

戦争が激しくなり街中の家の周りも一面焼野原に変りましたが、神の助けか二人で住んでいた南森町の長屋が残りました。

昭和23年結婚し形見のミシンを運びました。二人の子供が生まれミシンの内職もいろいろ致しました。昔のシンガーといえども返し縫いが出来ないので、新型のミシンに下取りとして出しましたが、吃驚するような値で引き取ってくれました。

それから家庭用から工業用（103型）に替え二、三台になりますが、いまだに使っています。ミシンやさんも代が替りましたが、先代の想い出を話したり、故障があればすぐに来てくれます。私にとってミシンはなくてならない物になりました。主人の定年退職後のクリーニング取次店のリフォームや、残布での小物作り、この歳になってもミシンを踏める喜び、ボケ知らずを有難く感謝して居ります。

退屈を知らぬミシンのお蔭です　知香子

ちんけな置床

山本義子

わが家に置床と称するものが一つある。辞典を繙くと「床の間のように造りどこにでも移し置ける台」とある。

わが家のものは、幅九十センチほどで引き戸は一応金色張りであったと思われる。

これが私の物心ついた頃から付いて回っている。わが家の構成は両親と姉の四人ぐらし且つ転勤族である。指をくると五歳ぐらいと思う。当時は静岡市に居住、平屋に三間、台所の借家に「これ」があった。この前が父の指定席だった。大きく見えていた。

次は敦賀市に引っ越し二階建ての借家だったが、昭和九年の室戸台風が二階の雨戸を打ち破り雨水びたしになった中に、「これ」が泰然と鎮座していた。

その次は大阪市内に、また次は生駒山の麓に、その頃は中河内郡と言っていた。ここは庭は小さかったが土蔵付き二階建ての居宅風だった。一階も二階にも立派な床の間があったので「これ」は茶の間のラジオを置く台となってしまった。とは言え父の指定席には変わりなかった。

昭和十七年、私たち姉妹の女学校へあがるのを機会に転勤族を止め、その頃はそんな言葉がなかったと思うが「単身赴任」を決意して且つ持ち家を決断した。西宮市に合併される前の武庫郡××村なるところに土地を求めわが家が誕生した。父の故郷を出てから幾星霜、文字通り乾坤一擲の集大成だったろう。

さて、銘木の床柱、床の間、欄間など備えた客間、居間ができたが、「これ」は相変わらず茶の間にいてラジオの置き場所であり、父の指定席であった。父の留守中、女三人なんとなくほんわかやっていたと思う。あの頃が楽しかったのではと思いかえす。

隣は畑、裏は水田、井戸もあったので見様見真似で戦中戦後庭で野菜を作り、苦しい時代を切り抜けられたのもありがたかった。

しかし、絶好の環境もニョキニョキと家が建ちはじめ、田園気分は消えつつあった。

昭和三十一年父の死後、二十数年ここを父の護りを信じ、無事過ごせたことをありがたく感謝している。さて「これ」は電話台になりラジオはテレビにとって変わられた。

母、姉も見送ったのでこの一戸建は寂しく無用の長物の趣もあったので「父母姉」にご免を言って現在のマンションに移った。都合よく定年退職も近かったので、人生一新と今までの家財は処分した。でも、しかしである。

「これ」だけは連れてきた。付いて来てもらったが正しいと思う。私の神で仏であり、父である。なによりの証しに阪神大震災では「これ」自若なり。マンションは床の間のない間取りなので今「これ」は、ちんけながら床の間である。今は花瓶を置く。

ほんに今夜は節分か　こいつは春から
　　縁起がいいわえ

といきますように、一心同体である。

愛染帖

新家 完司 選

百均へいらないものを買いに行く

八尾市　村上ミツ子

（評）「ヒェー、これが百円！」という驚きが購買欲をそそり、「百円ぐらいなら…」という気軽さが、無駄なものを買わせてしまう。

医者代が高かったから湯豆腐だ

鳥取市　山宮　愛恵

（評）病気になっても支出過剰にならぬよう、賢く生き抜かなければならない。安くておいしくて栄養価も高い豆腐は、ありがたい食品。

置き場所がどうのこうのと妻の愚痴

和歌山市　喜田　准一

（評）「そんな細かいことでゴチャゴチャ言うな」と大きな声を出したいが…、我慢する。確かに、使いぱなしの自分が悪いのである。

大声を出しても妻に敵わない

吹田市　穴吹　尚士

（評）奥様の方が一枚も二枚も上。駄々っ子を扱うのと同じ要領で、「はい、はい、はい、はい」と適当にあしらわれてしまう。

金も無いのに体重が増えてくる

箕面市　出口セツ子

（評）通帳の残高は増えないのに体重ばかり増えてくる。でも、ふっくらしているほうが、余裕があるように見えていいではないか。

褒めことば洩らさず記憶できている

寝屋川市　北田ただよし

（評）褒め言葉のみならず、褒めて下さった人の顔と名前も、しっかり記憶できている。それを思い出すたびに元気が出るのだ。

寝返りをうって埃を少し吸う

弘前市　福士　慕情

（評）蒲団は目に見えない埃を吸っていて、寝返りのたびに舞い上がる。勿論、人を裏切る「寝返り」では沢山の埃を吸うことになる。

献血を一度もせずに期限切れ

堺　市　西村りつえ

（評）献血できるのは六十九歳まで。今まではその気もなかったのに、出来ないとなると、「一度ぐらいは…」と、後悔してしまう。

千の風になるから死ぬの怖くない

香芝市　大内　朝子

（評）作者不詳の詩「千の風になって」。新井満氏の日本語訳と歌で広まった。「死んでも風になる」と思えば勇気が湧いてくる。

父さんの千の風だな虎落笛
父と母恩師も千の風となり

河内長野市　坂上　淳司

電気屋で最先端を見て歩く
親の汗知らずに晴れ着脱ぎ散らす
つついたらあきれるほどの医療ミス

豊中市　吉田あずき

恵方巻北朝鮮を向いて食う
悪くなる天気予報がよく当たる
目耳歯 器具の援助でまだ生きる
反省の文字乱雑な日記帳

鳥取市　岸本　宏章

階段の手摺り味方に生きている
飲むことを思えば安い書籍代

熊本県　髙野　宵草

日向ぼこ老いの話を聞く雀
暖冬で庭の隅から何の芽か

弘前市　高橋　岳水

春夏秋春どえらいことになりそうだ
ギネスにも載せたいほども頭下げ

八尾市　田中トシエ

赤いバラなど貰ったことがないのです
タンポポの根っこの深さたのもしい

和歌山市　田中　すず

高齢者マークの後は避けてます
産む命食われる命食う命

大阪市　前　たもつ

どっこいしょ介護保険は払うだけ
よろしくと頭を下げておく老後

堺　市　荻野　像山

羽曳野市　徳山みつこ

肩パッド捨てて十坪の土いじり　鳥取市　福西　茶子
スクラムの中の裏金炙りだす　藤井寺市　鈴木いさお
畑がつくまでの五分の長いこと
冷や酒はいかんついつい飲み過ぎる　橿原市　安土　理恵
怒ること止めたとたんに太りだす
確かな舌あってB級グルメです　弘前市　高瀬　霜石
修理する方が高いが修理する
前向きな人と話すと疲れます　和歌山市　木本　朱夏
咲くときは覚悟散るのはなお覚悟
もう若くないから夜は嫌いだわ　泉佐野市　稲葉　洋
囚われた如くに足は縄のれん
物忘れ現世離れのリハーサル　豊中市　安藤寿美子
氏神さん八十二年生きました
元気です良妻賢母止めました　海南市　三宅　保州
一人芝居の舞台に無駄なものはない
合鍵を渡す相手が見つからぬ　藤井寺市　高田美代子
若い時と同じ歩幅であるけない　松江市　津川　紫晃
ふるさとを丸ごと変えたショベルカー　西宮市　門谷たず子
カラオケ葬のプラン只今練ってます　高槻市　佐甲　昭二
立ち読みは大きな文字の本を選る　八王子市　播本　充子
一生懸命は私の短所
暖冬のミカンをやっと食べ終わる　芦屋市　黒田　能子
サプリメント飲んで食べてるバイキング
ご近所が老人ばかり静かなり　鳥取県　竹信　照彦
禁煙で治ると医者のいう病気
寒くても金魚の水は水で換え　京都市　高島　啓子
たくさんのスカーレットを生むいくさ
百均の封筒糊は付いてない　八尾市　田邊　浩二
釣ったチヌ姿造りでまた苦戦
明日禁酒あしたの分も飲んどこう　八尾市　生島ますみ
熟年離婚接着剤が切れました
よそ行きも家も変わらぬ顔になり　和歌山市　榎原　公子
春一番天朝から出っ放し
負担かけられ癒され孫も農業も　高槻市　瀧本きよし
弱ってる足に太陽当て昼寝
孫東大出たと会うたび聞かされる　倉吉市　野口　節子
替え歌が元歌よりも受けている
中八を選んで吊るし上げの刑　富田林市　片岡智恵子
医者嫌い通せる今日の健康度
へんな夢から目覚ましに助けられ　熊本県　岩切　康子
宅配便犬は尾を振り共に出る
おつまみに栄養の無い物選ぶ　鳥取市　田村　邦昭
老人会らしくないのがいて楽し
転勤の行く先々が故郷になり　堺　市　志田　千代
シルバーシートの前で老婆が立っている　紀の川市　辻内　次根
一日に一度は読んでいるお経　大阪市　吉内　福世
喜寿の蝶気力で飛べるまだ飛べる　和歌山市　田中　みね
猪の話題で弾むぼたん鍋　藤井寺市　中島　志洋
反省はしてます酒はやめまへん　和歌山市　古久保和子
モウナミダカワキマシタヨお月さま　唐津市　仁部　四郎
百年の母校移して駐車場　米子市　政岡日枝子
私を静めるように水を打つ

大阪市　柴本ばっは
改札機へ一礼わたし無料パス
京都市　中野　六助
ネクタイを外した首が落ち着かぬ
鳥取県　羽津川公乃
ありがとうだけは惜しまず声に出す
堺　市　加島　由一
納豆が消えた理由を聞き笑う
大阪府　澤田　和重
ベッドでは迎えたくない我が余生
大阪市　岩崎　玲子
この世では月はいつでも味方です
富田林市　大橋　鐘造
アドリブの式辞が空気和ませる
海南市　小谷　小雪
満腹になって喧嘩のタネ消える
高槻市　左右田泰雄
閑静な町に黄色い家が建ち
八尾市　髙杉　千歩
レシートの裏にメモする物忘れ
鳥取県　山下　節子
転んだら必ずうしろふり返る
日立市　加藤　権悟
春耕の汗を太陽から貰う
西予市　黒田　茂代
文明の利器と無縁は難しい
高知市　小川てるみ
なつかしいものに戦後のハッタイ粉

唐津市　樋口　輝夫
一枚の賀状がつなぐ細い糸
大阪市　小泉ひさ乃
作句帳私のこころ泳がせる
寝屋川市　平松かすみ
地下を出て日本晴れのありがたさ
和歌山市　たむらあきこ
止めようがないね季節も私も
池田市　上嶋　幸雀
年金の目減りで脳が鍛えられ
富田林市　中井　アキ
錆びつかぬよう受賞作品読んでいる
大和郡山市　坊農　柳弘
手の込んだ言い訳ぼろり朝帰り
鳥取市　福田　登美
ブティックから心の揺れる便りくる
三田市　上垣キヨミ
誘われてダンス踏んだり踏まれたり
堺　市　奥　時雄
朝礼の訓示夜通し考える
横浜市　金森　徳三
娘から時代遅れと言われてる
米子市　青戸　田鶴
ひと冬を癒してくれた胡蝶蘭
大洲市　中居　善信
献金をしない僕らに重い税
高知県　いの　静草
ご近所の洗濯物が濡れてゆく

生駒市　飛水ふりこ
一言が多い私に無視の刑
羽曳野市　森下　一知
肩書きを習慣病が狙い撃ち
和歌山市　楠見　章子
雨の音じんわりしみて人恋し
和泉市　横山　捷也
絵葉書に誘われ春の旅プラン
出雲市　園山多賀子
着脹れて肩痛むとは贅沢な
札幌市　三浦　強一
生前の人脈を知るお葬式
西脇市　七反田順子
凛として出番待ってる桜の木
西宮市　藤本　直
真夜中の電話心臓まで響き
東かがわ市　池内かおり
豆腐さえあればよろこぶ酒パック
大阪市　岩崎　公誠
骨密度脳密度とも減るばかり
鳥取県　石谷美恵子
ぎくしゃくを孫の潤滑油が回す
紀の川市　木村　徑子
俄雨ご一緒しましょ傘がくる
三田市　堀　正和
予報士が鍋にしたらとお節介
奈良県　渡辺　富子
アクセサリーあるだけつけてクラス会

米子市　木村富美子
福を呼ぶ声は誰にも負けてない

シドニー　森本クックバラ
フレッシュと呼ぶは未熟の代名詞

東京都　岸野あやめ
当たっても砕けぬ鈍い脳を持つ

姫路市　古川　奮水
ダム出来て春の小川は涸れたまま

西宮市　牧渕富喜子
おいしいとこころの憂さをふと忘れ

唐津市　北村　松風
弟の新築に無い御仏壇

大阪市　津村志華子
青い空生きる元気が湧いてくる

大阪市　西川　冷子
老いの今培って来た身が資本

堺　市　村上　玄也
そっとしてやったらどうだ週刊誌

寝屋川市　籠島　恵子
その時は看ますと呪文かけておく

八尾市　吉村　一風
裏切らぬ土だと妻は花を植え

鳥取市　土橋　螢
一粒の種が咲かせる千の花

橿原市　居谷真理子
マネキンの春夏秋冬同じ靴

鳥取市　倉益　一瑶
非常口見てから鈴を付けにゆく

松江市　三島　淞丘
サングラスかけて強気な僕になる

藤井寺市　太田扶美代
集合写真隅っこに決めてます

和泉市　西岡　洛酔
アルバムの色褪せ若き妻と僕

大阪府　小栢こずえ
一年中が休日なのに疲れてる

尼崎市　春城武庫坊
如月の雪街を選んで浮かれ舞う

岸和田市　雪本　珠子
仲直り出来ないままに発車ベル

大阪府　米澤　俶子
食べること抜けば私に芸は無い

鳥取市　土橋はるお
自販機が大声あげてオーイお茶

尼崎市　春城　年代
今の今を大事にしたい八十路来て

枚方市　伊達　郁夫
陽の恵み少し欲しいと足の裏

大阪市　榎本　舞夢
OB会義理チョコ入れて旅カバン

尼崎市　山田　耕治
電子化の世に紙づまりなる不覚

交野市　山川日出子
初恋の写真が父の金庫から

松江市　相見　柳歩
君を待つ幸せ今日も君を待つ

大阪市　神夏磯典子
少々飽きてきた保険のコマーシャル

和歌山県　森下よりこ
木登りを知らないままで子が育つ

四條畷市　吉岡　修
なんとなく信用をする同県人

黒石市　相馬　一花
親の背を知らぬ子供も親になる

羽曳野市　酒井　一壺
盗み撮り彼の素顔の美しさ

米子市　白根　ふみ
芸事に終りはなくて今朝も掃く

取手市　葛西　清
食べごろを箸で集めて鍋の中

奈良市　尾畑なを江
メールでは丁寧な語で返事する

三田市　阪本　藤朗
極楽はお酒とお風呂あとは寝る

三田市　石原　歳子
娘のために元気よそおう紅を引く

寝屋川市　坂上　高栄
温暖化戦争なんかしておれん

西宮市　緒方美津子
反抗期通りすぎたかよく食べる

和歌山市　福本　英子
七人も育てた母の小さい手

鳥取県　佐伯　やえ
亡父の足跡しっかり踏んで畑を打つ

誹風柳多留一一篇研究 20

山田昭夫・増田忠彦
山口由昭・小栗清吾
伊吹和男
清　博美

129　**雨舎り内義のはらへゆひをさし**

山田　子を宿してお腹が膨らんでいる内儀。それを「指さし」て「何ヶ月になるんだろう」などと話している景。

雨舎りつめた下女におひ出され　明八梅3

清　賛。

130　**上下で供の手を引とんだ事**

山田　普通なら、

上下とかいなをしよつて礼のとも　安元仁2

なのに、この供、お相伴にあずかって、すっかりご酩酊。やむなく主人が供の手を引いているという「とんだ事。」

上下を着せて男を杖につき　宝11義1

清　賛。

131　**ほれて居るだけが女房のよわみ也**

山田　惚れた弱味。でも女房の弱味になる程惚れられるなんて、この亭主何たる幸せ。ならばこちらも、

女房にほれて家内ハしづかなり　明三仁七

と参りましょう。

小栗　賛。惚れているだけが弱味で、他は総て強味とすると、この女房は？……。惚れていれば全て打消ですか―。

伊吹　賛。この場合の「だけ」は「……ほど」や「……限り」？

清　賛。

132　**哥かるた嫁こまや程つんて置**

山田　「こまや」は「物置小屋」（「日国」）という解もあるが、鈴木倉之助氏は「小間物屋の約語」と考証され、本句を「嫁はカルタの名人ときまっているから、取り札を『こま屋』の高荷ほど自分のわきに積んで置くとの意」（『古川柳難句解』）とされているが、妥当であろう。

哥かるたさておそろしく取ル女　安四義1

―「取る女」は、嫁。

山口　「物置小屋」にも色々なものが積んでありますから、そうとっても解せるでしょう。「角川古語」には物置小屋の用例としてこの句がとられています。

小栗　賛。鈴木先生引用の「戸のすきか白ク成たとこまやいゝ」（明五松5）の方は、少なくとも「物置小屋」ではない。西鶴「一代男」に「鮨屋の息子、小間屋の若者……」という部分があるらしいが（未確認）、屋号でなければ、小間物屋のことかもしれない。

清　賛。

133　**あいそうにいつたを下女ハ本にする**

山田　「愛想に云ったのを下女は本（当）にする」。特に相手が憎からず思っている男だったりすると、舞い上がって、本気になるから、気をつけねばならない。

なぐさみにすれハほんまに下女じくね　四一17

清　賛。

134　**御不勝手五色をもれたしうと入り**

増田　御不勝手（おふがって）は、格式ある武家の貧窮、不如意。五色は、青・黄・赤・白・黒の五つの色、中国の五行説や仏語でいう。ここでは「五色を洩れた」で紫を、さらに紫衣の検校を暗示する趣向。

困窮した武家が、金策のために検校の娘を娶ったことをいう句。「入り」は「はいる」ととれば、検校が舅として金の相談のために呼ばれて婿の武家を訪ねたこととなり、「要り」の意とすれば、貧窮のあげくの縁組、すなわち紫衣の舅が必要になったこととなる。後者なのでしょう。すでに検校から借金をしていたが返済できず、縁組をして凌いだというのでしょう。

御不勝手みな紫に奪ハれる　三九16

山口　検校の娘との縁組から舅が家系にはいって来る、という意味で「要り」ではなく「入り」でいいのだと思います。

小栗　「舅入り」は成語で、「婚礼で、婿入りの式のすんだあとで、舅が婿の家に行って行なう饗宴の式」（「日国」）のこと（因みに「婿入」は、「結婚後に夫がはじめて妻の生家を訪れること。また、その儀式」）。

礎稿は、検校の借金を返済できぬ結果とされるが、川柳ではそのような約束になっているのだろうか。でなければ、それを示す措辞はないように思う。

伊吹　礎賛。

切ぬいた判をけんきやうむこひきで　一七21

清　同右。

山田　山口説に賛。それ以外の措辞はない。

135　**蔦を引ぬいてさくらを植るなり**

増田　蔦は伊賀・伊勢の領主藤堂家の家紋。藤堂家は江戸の屋敷を上野に与えられていたが、寛永寺建立に際し染井に移された。蔦を引き抜いた跡に桜が植えられて江戸の花の名所寛永寺となった。

仁王門そのかみ蔦のあつた所　八39

清　賛。

136　**ふり出すとやかたでにくい口をきゝ**

増田　この「やかた」は屋形船で、隅田川納涼の叙景句。雨が降りだすと土手や橋の上の涼み客はあわてまどうが、それを見て屋形船では「いい雨だ、もっと降れ」などと憎まれ口をきくことだろう。

やかたから人と思ハぬ橋の上　二15

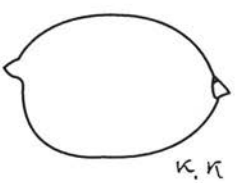
小栗　こういう句の鑑賞はむずかしい。屋形船の人の感情をどう考えるか。礎稿の文章では、「とまどう涼み客を見て、『もっと降れ』と憎たらしい口をきいている」と読める。つまり、雨をしのぐ術を持っていない人達を嘲っている句と考えておられるように思える。（それでいいのですか？）

それでもいいかもしれぬが、別解として、屋形船の人は、別に悪意ではなく、単に「一降りすると涼しくなっていい」と言っているだけなのに、雨にぬれるこちらからみると、にくらしいという意味にもとれる。私の趣味としては後者なのだが……。

清　なるほど、小栗説の方が面白い。あわてているのは、土手や橋の上の人達ではなく、屋根のない舟に乗っている涼み客としたい。

共選欄　檸檬抄

（薫風書、カットとも）



「税」　川上大輪選

五億円ほど脱税をしてみたい
税金の無駄が土台にある道路
買い物袋口をひらくと消費税
脱税をするほど仕事して見たい
申告書の用紙を前に胃が痛む
美しい国だ税金食う国だ
税ぐらい芋を食っても払てやる
税金が何だ巻ずし丸かぶり
春一番税務署からのラブレター
血税で建てた立派な焼却場
血税で建て血税で取り壊し
税務署が優しくなって春二月
春動く杉の花粉も税務署も
税金がビールの底で笑ってる
デキちゃった婚は年貢の納め婚
大中小棺にさえも消費税

堺　市　奥　時雄
交野市　森本　弘風
砂川市　大橋　政良
松江市　銭山　昌枝
三田市　上垣キヨミ
和歌山市　田中　すず
大阪市　前　たもつ
和歌山市　玉置　当代
東広島市　福島　万年
東大阪市　北村　賢子
吹田市　太田　昭
大洲市　中居　善信
島根県　伊藤　寿美
堺　市　齋藤さくら
池田市　北出　北朗
東かがわ市　池内かおり

「税」　松本文子選

大声を上げるわたしは納税者
日本の予算支える僕の税
寝ていても税金だけは付いている
税金で出すから値段気にしない
女ひとり生きてゆくにも税が要る
しっかりと税金払い意見言う
税金の行方気になる昼の月
税金で悩まないのは宇宙人
フルムーン五パーセントが付いてきた
消費税真綿で首を絞めに来る
酒でなく税金呑んでいる気分
税金を戦車なんかにしたくない
弱いものいじめと映る医療税
あの橋も道路も僕の税金だ
税金が津波のようにやってくる
税よりも命は重いはずだった

弘前市　高瀬　霜石
京都市　三宅　満子
大阪市　榎本日の出
大阪市　森田　明子
西予市　黒田　茂代
鳥取市　春木圭一郎
大阪市　星野きらり
松江市　安食　友子
相生市　村木　信子
大和郡山市　坊農　柳弘
八尾市　山本　宏至
寝屋川市　籠島　恵子
高槻市　乙倉　武史
京都市　中野　六助
西脇市　七反田順子
倉吉市　糀谷　和郎

税務署の裏においしい店がある　西宮市　牧渕富喜子
あの橋も道路も僕の税金だ　京都市　中野　六助
税務署は地味な女の行くところ　出雲市　園山多賀子
税金の歩く姿を見失い　雲南市　菅田かつ子
税金のおかげ巡査が来てくれる　松原市　玉置　重人
納税へ頑張ってます飲んでます　堺　市　荻野　像山
動いても動かなくても掛かる税　シドニー　坂上のり子
馬の脚有名税にあこがれる　大阪府　澤田　和重
税金もお医者通いも増えて来た　倉吉市　野口　節子
税金の泡が詰まったコクとキレ　和歌山市　武本　碧
ラーメンといっしょに啜る消費税　大阪市　津村志華子
税金もポイントカード付けてほし　東大阪市　笠井　欣子
飯がうまいまだ税金を払ってる　堺　市　志田　千代
増税が老いの背骨をきしませる　西宮市　藤本　直
税務署に呼ばれて舌がもつれ出す　黒石市　佐藤　古拙
滞納をしてるお迎え来ないかも　横浜市　金森　徳三
妻の小言食わせてもらう税金サ　交野市　田岡　九好
美男美女にはたんまり税をかけましょう　大阪府　米澤　俶子
税金を背負って泳ぐ回遊魚　米子市　政岡日枝子

秀　句

税金を払えば絞り滓になる　弘前市　高瀬　霜石
税務署を出ると呼吸が楽になる　黒石市　相馬　一花
税払て道の真ん中歩けない　寝屋川市　太田とし子

軸　吟

税務署の向こうに濃霧注意報

ラーメンといっしょに啜る消費税　大阪市　津村志華子
最終の駅で介護の税と会う　八尾市　宮西　弥生
税のことわからぬままにされるまま　出雲市　吉岡きみえ
木簡に今と変わらぬ税の文字　吹田市　穴吹　尚士
たっぷりと税も払うたウェディング　西宮市　亀岡　哲子
増税の貨物列車が発車する　高知市　小川てるみ
あの世まで追っかけてくる消費税　豊中市　藤井　則彦
マジックのように天引きされる税　京都市　都倉　求芽
税金がやさしい風になればいい　熊本市　永田　俊子
血税の温み届かぬ過疎の町　松江市　三島　淞丘
重い税押し潰されてしまいそう　羽曳野市　松本　静子
税金が上がり血圧まで上がる　鳥取市　加藤　茶人
確定申告無事終え梅の香が匂う　富田林市　片岡智恵子
買い物袋口をひらくと消費税　砂川市　大橋　政良
高い税ついた入歯を噛みしめる　豊中市　吉田あずき
税務署の帰りに風邪を引いてくる　東大阪市　谷口　義
納税をすませたことも書く日記　八尾市　髙杉　千歩
消費税も一緒の皿でまわる寿司　寝屋川市　森田　麗
血税が七変化して腑におちぬ　米子市　白根　ふみ

秀　句

税金を背負って泳ぐ回遊魚　米子市　政岡日枝子
税務署へわたしの冬を置いてくる　羽曳野市　吉川　寿美
血税を吸った布団が干してある　大阪府　桑田ゆきの

軸　吟

税金払う日本沈没せぬように

ロマン

長谷川呂万選



朱に染まる余白残して待つロマン　柳　弘
王手飛車男のロマンかりたてる　圭一郎
遥かなるシルクロードにあるロマン　いさお
ひもじいが夢を抱いてた焦土の子　淳　司
甘くないコーヒーにあるプチロマン　公　誠
幾世紀ロマンを秘めた土偶の目　愁　女
豪華船眺めロマンを追いつづけ　政　勝
初恋のロマン伏せ字の日記帳　俊　子
すぐ数字並べてロマン欠く男　准　一
船の旅嗤うロマンのない男　玄　也
菲才でもロマンを求め句を追うて　勝　視
盃へロマンを注ぐ友がいる　蜂　朗
紅く咲きロマン伝えるバラになる　雄々
ささやかなロマンに女満たされる　茶　子
寡黙でも男はロマン抱いている　房　枝
同窓会ロマンの君の変り果て　章　子
ナスカ絵にロマンに満ちた謎がある　茂　代
丸太組む親子ロマンのログハウス　三代子
科学者のロマン億光年の星　水　笑
地球と言うロマンに満ちた星に住む　活　恵
広告はしないがロマンの友求む　信　雄
悠久のロマンらくだとゴビ紀行　正　雄
散骨がいいな南の海がいい　霜　石
ペアルックまだまだロマン握ってる　智加恵
戦中っ子腹一杯というロマン　(稲)洋
デゴイチの汽笛ロマンを呼び起こす　あずま
天下取る夢を見ている塾カバン　哲　代
古寺静か歴史のロマン独り占め　洋　介
春を待つどの色で咲くチューリップ　美紗子
千の窓から千のロマンがこぼれ出す　(花)順　子
ただ歩く別れがたくて駅二つ　直
義理チョコに時にはロマン嗅いでみる　藤　朗
老いてなおロマン忘れぬ色を選る　一　知
今欲しい竜馬が抱いた大ロマン　東　吉
失恋もいずれロマンに風化する　時　雄
栗林後は宅地に孫の家　栄　呼
パンのみに生きてはゆけず抱くロマン　あやめ
佳
通夜に聞くまさかのロマン亡父の恋　かおり
ロマンには遠く女の台所　桃　葉
爺ちゃんのロマン朝シャン欠かさない　(志)千　代
暫壕で思いを馳せたお下げ髪　徳　三
ロマンの章ひらけば若き父と母　六　助
人
色褪せたロマンが残る小引出し　たず子
地
子のロマン拳銃持ったポリスマン　像　山
天
戦国のロマンを秘めて天守閣　小池幸子
軸
傘寿過ぎ男のロマン胸に抱く

新入生

岩切　康子選



新入生両手で鞄抱いて置き　伊津志
新入生どの子も国の宝もの　岳　水
ランドセル一里歩いた昔の子　宣　子
新入生ママの視線は四〇度　可　住
服自由ファッション競う新入生　宗　明
初出勤うしろ姿を母拝み　耕　治
嫁が来て野良に一つの花が咲き　(畑)節　子
人生の新入生は丸はだか　きよし
団塊が老人会を活気づけ　勝
たった一人の新入生を待つ校舎　幹　子
未知数をいっぱい背負うランドセル　すず
新入生入らず今も下っ端だ　圭一郎
村じゅうのエールを受ける新入生　富　子
転校で新入生が人気者　三喜夫
八十の手習いパソコン新入生　倫　子
七十の新入生も血が躍る　朝　子
カルチャーへ新顔話題少し変え　百　合
髭面の新入もいる定時制　玄　也
落ち着きのない新入児ばかり増え　茂　代
どの顔もしあわせいっぱい新入児　トミ子
新入生スタートラッシュに面喰らい　とし子
新入生友と手つなぎ親離れ　稔

図太くて油断のならぬ新入生　一壺
新入りに愛のこぶしも準備する　慕情
志望校叶えて立った一里塚　隆盛
親指を吸ってしまった一年生　淳司
憧れの制服裾上げして着てた　弘風
新入生五月を無事に越えて欲し　(志)千代
先生の似顔絵競う新入生　末吉
先生の渾名命名新入生　愁女
校章をつけてはりきる新入生　照子
甲子園持って大学一年生　孝一
大学の新入生はコドモです　四郎
新入生一家総出で見送られ　秋星
新入生親の期待で潰れそう　ルイ子
両親の甘さが分かる新入生　典子
煙吐いて団塊の世の新入生　螢

佳

落胆の友を気遣う新入生　克治
欠勤をしたパパ連れて入学式　(矢)五月
横一列がいつまで続く入社式　たず子
パソコンを難無くこなす新社員　かおり
信号機新入生の眼が怖い　蜂朗

人

新入生どんなお色にそめられる　泰女

地

新入生も監視カメラの中に居る　碧

天

新入生解放されて鳥になり　永田俊子

軸

此の社会新入生に格差あり

つもり

小野句多留選



同居して親孝行をするつもり　螢
まだ若いつもりの足がついて来ず　盛夫
まだ若いつもり背筋に気をくばり　まみ子
いつまでも若いつもりのエレキバン　弥生
借金は残さぬつもり粥を食う　茶子
死んだつもりでもどこかに甘えある　一粋
わかってるつもりの妻に叱られる　照彦
怒ってるつもりが情けかけている　和重
取り戻すつもりが賭けにはまり込む　克治
謝ったつもりだろうが許されぬ　幸子
辞任して罪滅ぼしをしたつもり　北朗
聞いてない言ったつもりと老い二人　あずま
頭ではわかったつもり口が出ず　尚
もう嫁になったつもりの喋り振り　ゆきの
人目引くつもりで赤い服を買う　獏沓
幸せのつもりでいたがふと孤独　扶美代
好きなもの与え愛しているつもり　圭一郎
妻よりは先に逝くはずだったのに　愁女
消して来たつもり不安のよぎる留守　美千代
買うつもりないのを知っている財布　(安)泰子
鶴亀のつもり五十で寡夫となり　(稲)洋
見てただけいじめるつもりないと言う　(花)順子

冗談に冗談でない顔をされ　藤朗
言い勝ったつもりの後に残る棘　(岩)玲子
つもりなら一億円はある預金　弘風
誉めているつもりの世辞が気に入らぬ　准一
天高し今日のつもりはなにもなし　美義
知っているつもりの道で迷ってる　(志)千代
黒字出すつもり会議の机上論　武史
いやだとは言わせぬつもりの袖の下　正剣
買うつもりないのに値段聞いてはる　玄也
映画館出ると主役の歩き方　政勝
女房に苦労はさせぬはずでした　勝視
ネオン街もてるつもりの千鳥足　志洋
こっそりとつもり預金に夢がある　志華子
本物のつもり鑑定には出さぬ　徳三
やり直すつもりにさせた子の寝顔　雅枝

佳

来年も生きるつもりの予定表　(吉)寿美
何様のつもりわが家のすねかじり　倫子
面倒を見てるつもりが癪の種　忠
善人に戻るつもりで星を見る　霜石
駄目もとのつもりで一歩前に出る　公誠

人

千の風聞いてやすらぐつもりです　一風

地

大輪を咲かすつもりの花の種　碧

天

サヨナラのつもり二人の明日を書く　播本充子

軸

子よ許せ同居のつもり今はない

初歩の教室

題 ― もしも

三宅保州

私の川柳観から（二）

☆生き甲斐は川柳ですと言えますか。暇つぶしや呆け防止を超える気概を持ちたい。

☆川柳が詠む対象は基本的には人間である。

☆作句とは自分の子を産むに等しい。責任を持って愛して育てる（推こう）べきである。

☆川柳も日記も自分のことや思ったことを書くが、日記は他人に見せない。川柳は選者や読者に見てもらい評価や批評してもらうものであるから、ひとりよがりで他人に分からない句は避けるべきだと思う。

☆川柳をたしなむ人だけにわかる句よりも、川柳を作っていない人にも感銘を与える川柳がほんとうの佳句だと思う。

☆読者に考えさす句はよいが、読者を迷わす句は駄目だと思う。

☆川柳は大衆に愛されて、しかもなお芸術でなくてはならないと思う。

【添削・批評句】

○作句の前に「題」を字引で調べる習慣を身に付けましょう。思わぬことがわかったり、自分の思い違いに気付いたりする発見があるものです。そこから発想を広げてほしいところです。特に、類語辞典を備えることをお勧めします。「もしも」も、もし、万一、仮に、もしかして、もしや、ひょっとして等同義語の言い換え例があり、ヒントになるものです。

原 もしもしと孫の電話に盛り上がる　こずえ

「もしも」と「もし」や「万一」はほぼ同義語ですが「もしもし」は意味が違います。

原 敗戦がもしもなければどんな世に　夢

添 敗戦がなければどんな世だろうか

題を使わなくても題の意が通じればよい。

原 宝くじもしも一億当たったら　淳

同想句がたくさん。最初に浮かんだ発想を捨てるか、意外な発想の句にしたい。次の句は「もしもの顔」に工夫があります。

原 くじ売場もしもの顔で並んでる　雅代

原 もしものため避難袋の用意する　忠子

「用意する」は平凡。意外性や具象を

添 非情袋に薬と酒は忘れない

原 暖冬でもしもの不吉する予感　(河)洋子

添 不吉なことばかり予感の温暖化

原 異常にてもしも氷河が消えたなら　冷子

添 もし氷河消える恐怖の温暖化

原 慌て者もしももしもと落ち付かず　(畑)節子

添 心配性もしももしもと落ち着かず

原 途中から鍵が気になり今日もまた　藤朗

添 今日もまた鍵を掛けたか気にかかる

原 世話にならぬもしも云ったら口論す　ミヨノ

添 もしものとき世話にならぬと言いたいが

原 もしもの事を考え行こう母の元　綾乃

添 古里の母のもしもを考える

原 もしも天国に逝くなら母に会う　利子

添 天国に逝けたら先ずは母に会う

原 もしもが現実になった親の世話　像山

添 心配な親の介護が現実に

原 二次大戦もしも無ければ父母と共　清

添 戦争がなければ父母も永らえた

原 夜半に聞くもしももしもの亡母の声　美はる

添 亡母の声もしも聞けたらなと思う

原 若返る薬が有れば飲んでやる　紀雄

添 若返る薬があればなと思う

原 何をしようもしも寿命が伸びたなら　実千代

添 もし寿命延びたらしたいことばかり

原 若い日がもしも一度夢に見る　トミ子

添 若い日に戻りたいなと夢に見る

原 古希近しもしだったらに胸騒ぐ　實

添 年を取りもしものことを考える

原 がんばればもしもと思うことできる　柾子

添 がんばれば望みが叶うかも知れぬ
原 片思いもしも会ったら何話そう　百合子
添 片思いもしも通じたらと思う
原 頭ではいつももしもを考える　尚
添 もしもの時に備えないとと思うだけ
原 ど忘れの続くもしもの認知症　徑子
添 ど忘れにもしもと思う認知症
原 持物をもしも入院そなえする　孝明
添 入院の備えはいつもできている
原 気がかりのやっと合格血の検査　美紗子
添 気がかりの検査がやっと異常無し
原 もしも化になれるものなら桃の花　(臼)信子
添 もしなれるものなら好きな桃の花
原 君の側もしも翼があったなら　柳歩
添 翼あれば飛んで行きたい君の側
原 もしもかな恋の予感がこの歳で　ヒロ
添 この歳になってももしや恋心
原 調子よいおだてにのった気のまよい　(髙)洋子
添 調子よい話信じたばっかりに
原 女なら産んでも見たいダースの子　賢治
添 言われなくても産んでもみたいダースの子

【少し工夫すると佳くなる句】

原 もしもの事思えば同居悪くない　幸
添 もしものこと思えば悪くない同居
原 子育てはもしもといつも気にかける　稔
添 子育てはもしものことが気にかかる
原 チョコレートもしもの夢が叶うかも　キヨミ
添 チョコレートもしもの夢を叶えたい
原 ブランド服もしも十キロやせたなら　みち代
添 もしもダイエットできれば試着室
原 この時とばかりにもしも攻めて来る　わこ
添 弱味につけ込んでもしもが攻めて来る
原 目標はもしも言わずに進むこと　玲子
添 目標はもしもと言わず進むこと
原 もしもまた生まれてきても同じ道　雅明
添 次の世もおんなじ道を歩みたい
原 無党派のもしもの心を掴みかね　道子
添 無党派のもしもの心掴みかね
原 胃カメラへもしもの顔を持ってゆく　千代子
添 胃カメラにもしもの顔も写ってる
原 冬眠をもしも出来ればしたい古稀　松風
添 出来るなら一度冬眠してみたい

【佳　句】

もし雨が降らぬと傘は杖となる　浩三
もしもではないと地球の呻き声　寅次郎
もしもなら眠ったままで終りたい　智加恵
欲張りなもしもはいつもよく転ぶ　幹子
人生にもしもが何度あるだろう　(吉)節子
もしもより現実がある昨日今日　章司
身の程をしらずもしもの欲を張り　クックバラ
生きて来た道にもしもがあったなら　みさと
親だからもしもの時は楯になる　武
もしもの時母は大きな傘になる　起世子
もし亡母に会えたら胸に飛び込もう　崩
盛り上がる話はいつももしもつき　たん吉
あの人にもしも好きだと言われたら　イセ
もしも愛なければ砂を噛む暮らし　那珂子
あの時のもしもの縁で半世紀　俊子
花時計もしももしもで三時間　勇治
もしかして以心伝心ベルが鳴る　光子
もしもなど困ります今燃えてます　麗
もしももしもと渡ってみたいかずら橋　映子
ヨーイドンもしも亀さん負けてたら　信雄
トゲのないバラが届いた落とし穴　(川)洋子

【今月の推せん句】

まっとうに生きてもしもは蚊帳の外　岡本　昇

「蚊帳の外」の比喩が利いています。

神様にもしもを預け生きてます　赤澤貞月

謙虚なお人柄が彷彿させられます。

自分だけ無いと思っているもしも　藤本　直

「もしも」の使い方がとても巧みな句。

句読点もしも月日へ打てたなら　村木信子

着想、表現、リズム、喩え方、作者の思い、共に優れた佳句だと思います。

【私の句】

もしものときは泣いてくれたらそれでよい
妻が卵を産んだら僕が温める

（登載洩れの方には役員が添削して返送します。）

秀句鑑賞

同人吟　榎原公子
―3月号から

編集部から打診があり〝イエス〟と返事をしたもののゲラ刷りが届いて困った困った。今、私の生活の真ん中にあるものは、孫（二歳と四歳）と農業。このどちらも可愛くて楽しい。だから川柳は二の次。そんな態だから何年経っても川柳はうまくならない。初心者の頃の、日毎の心模様を川柳にぶつけてみたいというあの熱い思いは、二十年近い歳月のうちになんと、穏やかな湖面のごとく起伏に欠けてしまっている。こんな状況で秀句鑑賞だなどと、同人の皆様に平謝りをしなくてはいけない。

それでも今年七十路に突入した私は、老いに逆らいたくて仕方がない。現実は縦横どこから見ても老体がそこにあるばかりなのに。

一八三六句の膨大な句の中からも感じ取れるのは、やはり老いとの格闘である。まるで老いがテーマの句集ではないかと思うほどに。これから向かう老いという未知の世界に求められるのは好奇心と、やんちゃ心かなと思ったりしながら…。

近頃は伊達や粋狂で生きている

谷口　義

大学を卒業したというのに、ニートとかフリーターとか横文字の名称をもらって気楽に生きている。かと思うと、公園を住居とする青テント君が権利を主張してみたり、日本人の軸がぶれてきている感じがする。

百均の傘なり諦めも早い

早川盛夫

厨房の真ん中で百均物が大きな顔をしているこの頃である。これで結構勝れ物が多い。百均通として申し上げたいのは、上手に買わないと高くつくものもあります。

スカーフの端ファスナーに噛みつかれ

古久保和子

「句材はどこにでも転がっているんだよ」と教えられました。いい句を作りたいばかりに躍起になって探し回り、遠くばかりを見て駄句を作ってしまいます。句材は足元でユーモアと遊んでいました。肩の力を抜いて、深呼吸をして、さあもう一度出直しです。

一国に弄ばれているんだな

中村金祥

その国とは海の向うの大国なのか、さてまた北の将軍様の国なのか。庶民の端の端から見るお上の動きには「天井から目薬」の歯痒さがあります。日本の円が湯水のように世界にばらまかれているとしたら。

美しい国の崩れは見たくない

福島万年

平和の御旗を掲げて六十二年、理想とする未来の日本は美しい国であってもらいたいのは国民の夢であるけれど、余りの多難さにともすれば暗い方へと心は沈んでいきます。美しいか美しくないかの判断は外野がしてくれることでしょう。

いじめてもいじめられても母は泣く

夏目一粋

子供の不祥事、不幸事について、すべて自分の責任として我が身を責め呵むのが母親であると思う。しかし、この節の先生は余りにも弱腰だと思いませんか。教師、親、子供のそれぞれの立場をもっと確立しなければならないのでは。

あいまいに笑って敵をつくらない

升成好

「あいまいな日本人」と以前、大江健三郎

氏がおっしゃいました。はっきりしないのが日本人の欠点ということでしょうか。功罪は大きいと思います。あいまいにしていたために取り返しのつかない結果に終ることもあり、黒白をはっきりさせんがために割れてしまう関係もあります。

美しい国は雑巾絞りから

小泉　ひさ乃

普段から心掛けのよい方なのでしょう。先ず足元から固めて行く堅実さが伺えます。

しかし、問題山積の国状を顧みるに美しい国をめざしたものの、どこから手をつけてよいものやら、さるお方も思案にくれておられるやも、雑巾を送って差し上げて下さい。

引継ぎに部下の酒量も聞いておく

藤井　正雄

行き届いた上司でいらっしゃいますこと。部署の統率にはそれ位の心掛けは必要なのでしょうけれど、ポケットマネーは大丈夫ですか。裏金はいけませんぞ。

エッフェル塔よりも通天閣あたり

志田　千代

同感です。と言うものの本心はエッフェル塔であり、シャンゼリゼ通りなのです。負け惜しみもありますが控え目に分相応とおっしゃるあたり、奥床しいではありませんか。

こぼれ種ちんげん菜のうまいこと

藤田　泰子

我が家の畑にもこぼれ種の小松菜が、冬の陽に濃い緑を光らせています。菜っ葉類はこぼれ種で結構成長してくれます。無農薬で健康食品そのもの。年金生活者への風からの贈り物です。

亡き親に代り蝋梅出迎える

徳山　みつこ

春に先がけて咲く蝋梅のけなげさは、格別に愛しいものがあります。父母のいませし頃、成長を共にしてきた梅ならばなおのこと、懐しさは倍加します。故郷の香りにたっぷりと癒された一日だったことでしょう。

傾けた耳から縫れほどけだす

松原　寿子

意固地に殻にとじこもっている限り進展はありません。ほしいのは柔軟性。あくまでもポリシーは内に秘め、暮らしの知恵として耳を傾けるのも、大切な手段の一つです。

雨音が止むまで夢をみていよう

楠見　章子

雑音には余り立ち入らないのが、賢明ということでしょうか。お呼びがかからないなら楽しく夢の中で遊んでいましょう。雨音がシヨパンを奏でてくれます。

職下りて凡夫は妻に躾けられ

稲川　惠勇

職退いた男はテレビの番人になる。しかし妻はなかなか許してくれない。あなたの体のためですと、夫の使い方をあれこれ考える。テレビの受け売りですが、大腸ガンになる割合が男性は女性の二倍の多さとか。発病予防には運動がよろしいようで、ちょこまかちょこまかと動く女性に軍配が上がったらしい。

蕗の薹綻く在りし日の微笑

森　茜

暖冬の二月、早くも蕗の薹が花茎を丸く現しています。それはあたかも春の兆しに微笑む風の贈り物のように。十七文字を裏返せば日記であり、エッセイであり、物語りが広がります。美しく仕立てて下さった句を、私ごときの筆で壊すのは止めておきましょう。

火を近づけると危ない年賀状

武田　帆雀

危険物取扱注意のシールが貼ってあったでしょうか。いただいたのか、お出しになったのか、いずれにしてもお若い。自然体で生きると私達を待っているのは余生です。燻るもよし、火花を散らすもよし、しっかり足掻いてみてはいかがでしょうか。

—水煙抄

秀句鑑賞

—3月号から

谷口次男

惜別の雨は斜めに降ってくる

宇野幹子

四十年前、葬儀場で初めて「涙雨」を知った。兄を見送ったあの時の雨も斜めに降っていたか。

老いの母力ゆるめる肩たたき

岡田信恵

小学生の頃、母によく肩叩きをさせられた。友だちと遊びたいのが先に立ち、いい加減だった。今、思うと申し訳なかった。

星空に呼べど遥かな父と母

前田喜美子

あの星は母さん星、あれは父さん星——。こう姉たちに教えられるのか。ドラマのワンシーンを見ているようだ。月とは違い星には物悲しさが漂う

目印が大きくなっている眼科

武島ちよえ

アフリカには視力8・0という部族がいるとか。ユーモアのあったある先輩は、息子が目が大きいと言われると、「雲の上のカラスも見える」。年齢と共に視力は落ちる。

無言なり無欲なり雪ふりつづく

中野六助

黙って降る雪はロマンティックでもあり、雪は時として牙をむく。が、ほどほどの雪は美しい景色を作り、また田植えに大切な水を恵んでもくれる。地球温暖化はその雪をも奪ってしまう。

笹舟がぶつかり合って淡い恋

田邊浩三

愛とか恋に疎い者には真相は分からない。しかし、淡い恋、が何となくほのぼのとしたものを感じさせる。追求はよそう。

お誘いを受けてみようか春の風

早泉早人

リハビリの指にやさしい春の風

増井ヨシ枝

長い冬から解放された時の春の気配。雪国の人間にとってはどんなに待ち遠しいことか。土筆も桜の蕾も。が、雪のない冬では白けてしまう。

もう一人自分がいたらシアワセか

松浦登志子

弱い私は、何か問題にぶつかると逃避ばかりを考える。そして、「もう一人の俺は強いはず」と強がってみるが——。

ミスばかりしている夢に起こされる

岩崎實

自転車を懸命にこぐが前に進まない。判を押そうとするが、なかなか押せない。時間に追われて、アーと思っていると、目が覚めてホッとする。

思いやり贈られました誕生日

西村益子

物静かだが、気配りが出来る人。損する性質だが、お天道様はキッチリ見ている。そうでないと不公平だ。

戦場で人間面は通らない

北出北朗

中東戦争を毎日、テレビで見る。日本は平和だ。その平和が世界中に広がってほしい。戦場からの帰還兵はノイローゼになる——。

目印のお地蔵さんも消えていた

尾崎黄紅

歳月は人、社会を待たず。

■各地句会だより

川柳塔きゃらぼく

政岡日枝子

町内の仲良しグループの奥様方の集いからスタートした「きゃらぼく」は、徐々にその体裁を整え、会員もふえ、体力もつけてきて、「川柳塔きゃらぼく」という川柳会にまで育ちました。

七年ほど前までは、五十名近くの会員がいて、毎年近県はもちろん四国、関西と広範な参加を頂いて、皆様おたのしみの忘年句会を盛大に開催していたのですが、現在は一様に高齢となり、川柳活動も思うように出来なくなった人も多くなり、そのような活動は中止状態です。

しかし、忘年句会にお集まり頂いた多士済々の皆様方から、それはもう言葉にならないほどのものを学ばせて頂き、それらが私達の作句の糧となり、作句の姿勢、内容にあらわれ毎月の勉強会でどんどん佳句が発表されます。

勉強会は、毎月第二水曜日の午後から開催していますが、平日のことでもあり、外部からの参加はまれで、自家製のお団子、漬物、煮物など頂きながら、米子弁の飛び交う中で和やかな句会を開いています。



四月は桜の法勝寺緑水園に吟行

念仏橋の桜は深い哀を知る　日枝子
緑水湖栄華の影を映してる　恵子
静謐に桜の今は無心なり　田鶴
花のトンネル私も桜花になっている　なみ
桜から桜この世の橋越えて　千代

五月は新緑の大山に吟行

僧兵の駆け抜けた道今昔　天雀
日が暮れて塔はますます凛とする　千春
友の顔そろい新緑かけめぐり　亜弥
限りなき愛手作りのわらび餅　やえ
新緑がまぶしく光る句がひかる　ふみ

今年の一月定例会は、新春おたのしみ勉強会と銘打って、お寿司、手作りの料理、等々盛りだくさん、その上あみだくじで全員洩れなく幸運を引き当て、和気藹々の時間を共有したことでした。

真っ直ぐに歩く芝居がむつかしい　富美子
瑞雲にのりやって来た風邪の神　ゆき
おみくじを引いて大吉とび上がり　章江

このように遠出は出来なくても、それなりに楽しんでいるきゃらぼくです。

鳥取県内、島根方面の大会には、ジャンボタクシー等を利用して、柳友との交流を温めあっています。

四月ともなれば、きゃらぼくの会員は大勢で島根の大根島に行き、馥郁と香る牡丹の花の中での川柳大会に出席していることでしょう。

本社三月句会

三月七日(水)午後一時
アウィーナ大阪

春を思わせた一昨日の陽気とはうって変わった寒さの中、113名が参加。

お話は川柳塔社副理事長前たもつ氏。

ルバング島から、30年を戦い続け74年に生還した、元陸軍少尉小野田寛郎(おのだ ひろお)氏の講演を聞きに行った時のお話。

内容はジャングルの衣食住、特に食生活は、大変であったらしく、敵との戦いの外、蚊や蜂、蛇とも闘かわねばならず、牛を主食に山猫やトカゲまで口にしていたという。

降伏命令に従い、やっとジャングルを出て、マルコス大統領に軍刀を差し出し大統領から返される場面を熱く語った。

その後ブラジルに渡り牧場経営に成功したが日本の金属バット殺人事件を機に、日本に戻り「自然塾」を開き、ルバングの体験から青少年の育成にあたっている。(扶美代記)

月間賞は海南市の三宅保州氏に輝く。

(司会—昭・美籠)(脇取り—朱夏・(久)千代)
(受付—富美子・桃花)(清記—富美子)

席題「信 用」

加島 由一選

借りた金催促されたことがない　准一
素手素面一度信用してみよう　美代子
信用をするのが怖い風邪薬　啓子
信用をされて仏間に泊めてくれ　(矢)五月
無垢の瞳に見上げられてる母冥利　利昭
信用であちこち金を借りている　則彦
無遅刻を重ね高めた信用度　希久子
茄子の花信用できる子がひとり　美籠
信用のない者同士のんでいる　朝子
まごころを積む信用があたたかい　美籠
信用が明日の励みになっている　能子
信じた人と枕並べて寝ています　時雄
頷いているが信用していない　見清
妻の顔見せて信用とりもどし　潤子
捨て猫に信用される顔を持ち　玄也
信用をされ過ぎるのも気が重い　千里
呑み屋なら信用されるとこがある　典子
信用し四月の花を待っている　朱夏
銀行のローンが僕を保証する　(奥)五月
妻と子に信用のない午前さま　柳弘
顔だけで信用してた日の不覚　房子
信用は出来ぬが金は貸してある　義
よい歳をして信用のない男　あやめ
あれ以来シュークリームが嫌いです　(矢)五月
信じてるからほろくそに言える妻　鐘造
信用を武器に続いた小商い　千代
セールスの身振り手振りに買わされる　太郎
絶対に信用出来る酒の瓶　孝一
肩書がとれて信用消えていき　朋月
信用してますと両手を握られる　夕胡
信用貸し悲しい羽目の詐欺にあう　正雄
夫唱婦随けれど信用貸しはせぬ　昭
佳
妻の出すものは信用をして食べる　シマ子
すぐ怒る人だ信用しておこう　郁夫
誓詞読む顔は信じることにする　重人
信じるとたった一言だけの父　幸雀
通帳を好きに使えと渡される　ルイ子
人
信用をされ胃薬を飲んでいる　潤子
地
信用をしきって寝てる妻の顔　愛論
天
追い風を信じ切ってる綿帽子　夕胡
軸
酒癖がまた信用を傷つける

兼題「寒 い」

村上 直樹選

寒さには負けておれないノルマ追う　庸佑
いじめたら心の寒さ消えますか　蕉子
鉛筆を削れない子が持つナイフ　幸雀
寒々と聞くあのニュースこのニュース　美籠
窓口が寒い言葉で吐く福祉　遠野
評論家は寒い言葉を寒く吐き　美義
コンビニの敬語が寒い街にする　楓楽
寒い風赤ちゃんポスト吹き抜ける　富子

人脈が変り左遷の寒い首　正雄
朝刊へ一足で知る今朝の凍て　哲男
気を抜けば猫背に戻る寒の入り　好
ホームシックだろうか寒い膝小僧　朱夏
くちびるがさむくて愛が語れない　雅文
先取りの春着をわらうもどり寒　理恵
休耕田霜寒ざむと融けもせず　見清
懐が寒いと言葉まで尖る　玄也
偽りの正装心は寒いまま　千里
相槌を打って空気が寒くなり　美代子
年金までだんだん寒い国になる　ダン吉
寒くても児童見守るボランティア　尚士
寒いのは懐だけの冬だった　弘風
三寒四温弾けて介護日々ぬるむ　弥生
まだ寒い頃からはしゃぐランドセル　(矢)五月
ふーふーと寒さ追い出す大根炊き　集一
仲直りしようよ寒い夜だから　郁夫
悪寒には妻の情けの玉子酒　鐘造
熱燗と話がしたい帰り道　正雄
凍て付いたこころへ響く津軽三味　富子
ペアマフラー寒いさむいの飛んでゆく　孝一
テンションをあげて寒さを吹っ飛ばす　朱夏
ふところの寒さを見せぬ太っ腹　たもつ
冬枯れの心をほぐす輪が温い　千津子
佳
寒いねと言える相手のない寒さ　桃花
残したい凍てつく夜の囲炉裏の輪　由一
視聴率誤算が続く寒いギャグ　冨美子
三寒四温まだシャックリが止まらない　美代子

寒くない冬に地球の明日憂う　楓楽
人
寒風に男も麺も磨かれる　洋
地
老母さんへ電話をかける寒い夜　朝子
天
時々は止って寒い風も抱く　篤子
軸
ひな祭り桜ちらほら咲く不気味

兼題「マニア」　**大内　朝子選**

父さんがブリキのオモチャ集めてる　(志)千代
少年の目でSLを追う男　みつこ
恐竜のマニア発掘した化石　哲男
マニアからおたくへ息子席を替え　蕉子
がらくたを集めて妻に逃げられる　朋月
マニアではないが孫なら撮りまくる　(矢)五月
マニアックな視線は誰も一直線　比ろ志
サプリメントずらりと並べ飲みもせず　潤子
八十路坂植木マニアも腰庇い　れんげ
趣味の域とっくに越したベレー帽　正雄
内緒だが私お金のマニアです　美智子
宝くじ新幹線で買いにゆく　孝一
玄関に魚拓を飾る釣マニア　好
その道のマニアと呼ばれ逃げられぬ　房子
のらくろを並べて自慢するおやじ　美智子
死ねばすぐゴミに出される物集め　耕治
目的は何か聞きたいゴミ屋敷　(奥)五月
紀香集も持っておりますマニアです　たもつ

堅物の顔で浮世絵マニアです　准一
コインマニア生活のため売り食いす　舞夢
マニア同士の話にそっと場を抜ける　かりん
マニアにも弱点がある風邪薬　美籠
マッチ棒見事五重の塔が出来　正雄
流木もマニアが宝物にする　典子
御馳走の腕よりマニアらしい皿　典子
ブラジルへ蝶を追いかけ行くマニア　東吉
珍品を探し時代屋はしごする　恭昌
つちのこがいると信じて山巡り　集一
見返り美人切手マニアに差上げる　アキ
迷いなど微塵も持ってないマニア　夕胡
九条のマニアだったら買うて出る　ダン吉
母さんがアニマル柄を買い出した　由一
佳
考古マニア古代ロマンを追いかける　千里
ノーベル賞とる人もみなマニアから　蕉子
だんだんと話ふくらむ釣マニア　美籠
天文学マニアで昼は寝ています　楓楽
はまり込みそうで封じる好奇心　求芽
人
妻も子もほったらかしにするマニア　光久
地
霊柩車まで試乗するカーマニア　直樹
天
マニアとは言うなロマンの追求だ　見清
軸
飛びついて三日坊主というマニア

兼題「数」　神夏磯　典子選

一石を投げて味方の数を読む　庸佑
父さんがこっそり抜け毛数えてる　(志)千代
煩悩は無数にあると知る座禅　幸雀
用件は数秒で済む長電話　桃花
数学の時間になると頭痛来る　れんげ
女です五つ六つは若く言う　(奥)五月
やさしさが一たす一を十にする　みつ子
気働き無い大臣も数のうち　あやめ
無駄口の数と溶け合うしまい風呂　茜
数だけは大魚に負けぬ雑魚の意地　鐘造
アイスクリーム好きな男も数に入れ　義
大家族つい割り算をしてしまう　理恵
数時間すれば忘れる他人事　アキ
思い出の数だけ丸く生きられる　楓楽
泣いた数を笑った数がやっと越す　修
数知れぬ星から貰うメッセージ　かりん
失敗の数を重ねた底力　冨美子
ゼロひとつ多くて通り過ぎました　美花
引き算が好きでお金がたまらない　(久)千代
千羽鶴数で勝負をしたくない　孝一
通帳と睨みあってる余命表　直樹
切り捨てた端数に不発弾がある　森子
年輪の数だけ地獄まで覗く　弥生
数の内やっぱり僕が外れてる　ダン吉
五分五分の線が引けない遺産分け　好
弁解の数だけ傷が深くなる　楓楽
暗証の数字がすぐに出てこない　朋月
我慢した数だけ丸くなる器　鐘造
失敗をポロポロこぼし生きている　みつこ
数しれぬ苦労も消して妻の辞書　求芽
幸せは笑いの数の中に住む　篤子
数えきれない思いを抱いているポスト　いわゑ
佳
100点は母を泣かせた数字です　扶美代
未知数の魅力が滲み出る素顔　則彦
蹲いた数だけまるくなってくる　重人
ひいふうみい蕾の数は夢の数　朱夏
一本を育てるために間引く数　保州
人
一人より二人で泣けば荷が軽い　一歩
地
来し方の悔いは数えぬことにする　俶子
天
ありがとう言う回数が増えてゆく　日の出
軸
検査値の数字と戦っている命　瑠美子

兼題「撫でる」　山本　希久子選

頬撫でる春一番に気をもらう　雅明
撫でられてゆっくり海が凪いでくる　朱夏
待ち呆けメールが撫でてゆく時間　アキ
お土産と猫撫で声で切り抜ける　見清
郷愁がこころの襞を撫でにくる　楓楽
おかっぱを撫でてもらった大きな手　理恵
記念樹を撫でて故郷を後にする　哲男
気まぐれに男を撫でていくシャネル　集一
咳込んだ僕をほっとき猫撫でる　瑠美子
時どきは言葉で撫でてくれる友　紀乃
いろいろな願いが撫でた百度石　弘風
撫でた子が親踏み台にして育つ　章久
猫の首撫でて怒りを静めてる　冨美子
手入れしています点字を撫でる指　(矢)五月
軽やかなジョークが頬を撫でて過ぎ　公誠
そっと肩撫でて旧交取り戻す　柳昌
ペコちゃんの首をひんやり撫でる風　幸雀
完走の汗をやさしい風が撫で　重人
転寝のベンチに春が頬撫でる　郁夫
賓頭盧の膝の辺りがよく光り　潤子
ジーンズの破れ撫でてる春の風　見清
火の粉の世生き九条を撫でてやる　ダン吉
札束で撫でて男の骨を抜く　富子
縄文杉太古の風に撫でられて　義子
猫撫でてたっぷり愚痴を聞かせてる　典子
子の頭撫でて私も癒される　アキ
後ろ首撫でて言いわけ考える　朋月
犬撫でる時はやさしい妻なのに　紀乃
土撫でてのぞく新芽と会話する　とし子
疼きにも負けない膝を撫でている　(久)千代
撫でるたび老母がちいさくちさくなる　朝子
大切に撫でて育てた子がニート　東吉
佳
撫でられてがんじがらめになっている　義
約束の時間が撫でるように過ぎる　義
撫で肩に女の業が重すぎる　保州
慰めの言葉が無くて背を撫でる　朝子

猫なで声女に強い武器がある　萬的
人
スカートを撫でに来たのは春の風　扶美代
地
撫でられて五感に風邪を移される　森子
天
愛撫してもらいたいのは心です　夕胡
軸
撫でて撫でて刺をまあるくしてしまう

兼題「錯覚」　**西出　楓楽選**

錯覚と詫びて済むこと済まぬこと　庸佑
オレオレと言われた途端信じ込み　雅明
錯覚が僕ら二人のキューピッド　弘風
錯覚という神様の贈り物　義
交差点彼岸の人とすれちがう　啓子
錯覚の世界に誘うコマーシャル　集一
カクテルのような錯覚だった恋　いわゑ
えくぼではないと分かったハネムーン　則彦
錯覚の恋からさめた飯を炊く　朝子
先生と呼ばれ錯覚してしまう　希久子
錯覚と誤解で地球病んでゆく　修
天才と思いたくなる孫の図画　遠野
錯覚の初体験です哺乳びん　(矢)五月
妻だけは僕の味方と思ったに　一歩
肩書が錯覚起す天狗鼻　章久
錯覚と知らず一生棒に振る　房子
冬苺のあまさは錯覚だよきっと　朱夏
錯覚のまんま一緒に濡れる傘　弥生
錯覚と言う人間の言い逃れ　鐘造
錯覚をしてから愛が深くなる　典子
梅桜錯覚させている陽ざし　なぎさ
妙齢の佳人と決めていた封書　茜
美しい国なんて錯覚してるらし　朋月
優勝を錯覚させるオープン戦　修
人でなくファッション褒めたつもりだが　みつ子
錯覚のまんま別れた蒼い月　千里
錯覚を逆手にとってから元気　アキ
ほめられて錯覚しだすかすみ草　たもつ
病院に行くと病人らしくなり　千恵子
今もまだ電話のむこう母が居る　賢子
錯覚と知らず渡った丸木橋　房子
錯覚をしているうちが花だった　典子
佳
幸せな錯覚だったコンパクト　アキ
錯覚の真ん中辺にある安堵　郁夫
錯覚と言う仕合わせがあるヒト科　昭
泥舟を助け舟だと思い込み　玄也
有頂天いま錯覚のど真ん中　美代子
人
美しく老いる錯覚だと気付く　啓子
地
触れた手の優しさ錯覚だっていい　理恵
天
生きていることが錯覚かも知れぬ　三宅保州
軸
錯覚は錯覚のまま丸くいる

第4回　大野風柳賞作品募集

雑詠五句（未発表）審査大野風柳

—審査方法—

※4月25日締切・千円

※集句は記名選とします

※五句一組として総合力で賞を決めます

—表　彰—

※6月24日（日）**柳都大会**

※大野風柳賞一名（受賞作品のミニ句碑・賞状・表彰式交通宿泊費）**準賞三名**（大野風柳表装半折作品・賞状・副賞一万円）**優秀賞五名**（大野風柳色紙作品額付・賞状）を表彰します

〒956-8691 新津局私書箱15号　柳都川柳社宛

川柳塔のぞみ4月句会

日時　**4月24日**（火）13時から

場所　銀座区民館（地下鉄東銀座③出口）

宿題　「離す」「趣味」「コンビ」

各題2句　自由吟1句

欠席投句　**4月21日必着**　播本充子宛

〒193-0832 八王子市散田町2—31—3

第22回国民文化祭・とくしま2007

川柳 作品募集要項（概要）

～渦 藍 踊り 文化ふれあう阿波の里～

一、**応募受付期間**　平成十九年四月一日（日）～六月三十日（土）（当日消印有効）

二、**応募規定**

(1) **作　品**　一人各題二句詠（未発表作品に限る）

(2) **応募料**　一人につき一、〇〇〇円（但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料とします。）

(3) **応募方法**　所定の応募用紙及び応募票に必要事項を記入し、郵便振替払込金受領証又はその写しを添えて応募してください。

(4) **応 募 先**　〒770―8571　徳島県徳島市幸町2―5　徳島市文化振興課内　第22回国民文化祭徳島市実行委員会事務局　文芸祭「川柳」係

三、**宿題・選者**（事前投句）高校生・一般の部

未　来＝長谷川酔月（秋田）　渦　＝板尾　岳人（大阪）

眉　＝久崎　田甫（福井）　やすらぎ　＝荻原美和子（神奈川）

（事前投句）小・中学生の部

未　来＝赤井花城（兵庫）　たぬき＝駒木一枝（福島）　自由吟＝堀井　勉（神奈川）

（当日投句）

遍　路＝平田朝子（熊本）　徳　＝進藤すぎの（大分）　わくわく＝島田駱舟（千葉）

第二次選者

礒野いさむ（大阪）　今川　乱魚（千葉）　定本　広文（広島）

西出　楓楽（大阪）　山倉　洋子（新潟）

四、**賞**（予定）**文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・徳島県知事賞・第22回国民文化祭徳島県実行委員会会長賞・徳島県教育委員会教育長賞・徳島市長賞・第22回国民文化祭徳島市実行委員会会長賞・徳島市教育委員会教育長賞・㈳全日本川柳協会会長賞・徳島県川柳作家連盟会長賞**

五、**発表会場**　川柳大会（当日投句受付、入選発表、選評、表彰式）

平成十九年十月二十八日（日）10時30分～16時00分　徳島県教育会館大ホール等

入選作品は、「作品集」として刊行し、応募された方（小・中・高校生は入選者）に無料で配布します。

六、**問い合わせ先と募集要項の依頼先**

〒770―8571　徳島県徳島市幸町2―5　徳島市文化振興課内

第22回国民文化祭徳島市実行委員会事務局宛

TEL　〇八八―六二一―五一七八　FAX　〇八八―六二四―一二八一

七、**主催者**　文化庁・徳島県・徳島県教育委員会・徳島市・徳島市教育委員会

㈳全日本川柳協会・徳島県川柳作家連盟・第22回国民文化祭徳島県実行委員会

第22回国民文化祭徳島市実行委員会

コチドリの愛情

阿萬　萬的

コチドリは、自然の河原に巣を作る。そして長い間の習性が河原の石ころと見分けのつかない薄い灰色に茶褐色のまだら模様である。

また、チドリは巣へもどるときも決してまっすぐには戻らない。まず地上に降りると、上下に二三回ひょこひょこと首を伸ばして様子をうかがい、急に向きを変えて反対側に五、六メートル走り、立止まって、安全の確認をする。安全だと見ると、元の方向へ走り、こんな動作を何回となく繰り返すのである。

そして、ヒナがかえるとその愛情はきびしいものになる。即ち擬傷というしぐさである。

ヒナが敵に見つかりそうになると、親鳥はおびえたように首をすくめ、急に翼を左右にひらいてばたばたとたたきつける。あたかも傷ついて飛び立てないようなしぐさで敵の注意を引きつけるようにし、ちょいとその効果の度合をたしかめる。効果がないと知ると再び同じしぐさをくり返す。そして数メートル飛び去ってまた羽ばたく。まことに子どもだましのようなしぐさであるが、親どりは真剣そのもので、その行為をつづけるのである。

コチドリの習性バカだな
ともいえず　萬的

「科学のたわごと」より



嗚呼一〇三歳
乾　喜与志さんを偲んで

森山盛桜

二月六日いつも通り仕事をしていると、突然携帯が鳴り中原諷人さんの声。「喜与志さんが亡くなられただって！」

最近体調が思わしくないという事は聞いていたけど、それにしても急な話で一瞬言葉に詰まってしまった。暫くして頭に浮かんだのは、一〇三歳という川柳会の「至宝」を失ったという事実であった。

喜与志さんとの出会いはどうだったのかと思い返してみると、昭和五十五年のみか月発足記念句会にはその名前は無く、その翌年の一周年記念大会には名前が見える。竹森千代松さん、児島しげをさん、徳重素丘さん達に誘われて入会されたと憶えている。この頃既に七十半ばであった。

昭和十三年春、第6次「満州開拓団」として入植。二十年七月末現地にて召集令状により入隊。終戦のわずか二週間前の事である。そしてシベリア抑留を経て日本の土を踏んだのが二十一年十一月の事。

その後、鹿野町農協、浜村農業共済組合を経て旧和泉荘職員となり、このとき件の発足記念句会をこの和泉荘で行なったという経緯があり、これが縁でみか月との繋がりが出来たと思う。

とにかく元気な人であった。例会には欠かさず出席し、そして必ず家から歩いて来られ、必ず会場の温泉に入っておられた。ご家族のお話によれば、とにかく温泉が好きで、家の風呂に入るのは年に二～三度で、あとはここの温泉に毎日通われたとの事。

あの杖を倒して一人立ちになる
でこぼこの道が今ではなつかしい

あの丘は俺を見つめている先祖

ぎこちない身で精一杯に生きる

勢いがあって卒寿も通過する

石に木に俺のこころを彫っておく

土拝む大根を食う芋を食う

仏の世界に四畳半もらう

渚に立つとシベリアが見えてくる

ぎりぎりの処で地獄から戻る

喜与志さんとの長い付き合いの中で、大陸での話は終ぞ聞いた事が無かった。入隊から帰国までの艱難辛苦は想像に難くないが喜与志さんの顔からはそういう翳りは感じられなかった。

新年句会では「わたしゃ十六満州むすめ…」の歌をよく歌っておられた。満州という土地に愛着を持っておられたのではないかと思う。前掲のわずか十句を見ても彼の地における喜与志さんの息遣いが伝わって来る。

葬儀の折、ご家族により半紙に認められた直筆の句が披露された。

「百歳を越えると天が美しい」

法名「浄喜院釈哲州」　　合掌



ローズ川柳会　山崎　君子報

初めてがいい先生だったのでつづき　てる
約束はないが電話を待っている　みつ子
震度七探し始める入歯から　藍
伝言板あったこの駅恋の駅　哲子
指切りをしても保証のない明日　トミヱ
微笑みを持とうよ花も咲いている　孝一
こころ入替え晩学の筆を取る　美籠
期待され嘘少々もまぶしつつ　いわゑ
期待どおりに森で詩情が生れない　武庫坊
枯れの中早やタンポポが目を覚ます　年代
助走路をたっぷりとってイチ ニ サン　義子
二浪の子まわりの期待重すぎて　君子

三幸川柳教室　喜田　准一報

下町の社長に似合う菜っ葉服　昇
パッチワーク母の古着が蘇る　一歩
親の役目終った頃はくたくたに　桂香
夫逝き妻の役目は終えました　信子
生きている限り誰にもある役目　八重子
配役はもう決まってる鼻薬　和子
役に立つ男後ろの席にいる　公子
自己主義のタクトすべてを迷わせる　三千子
夕張のすべてが雪に埋もれる　町子
談合のすべてを棒に振った知事　嘉平
金婚式すべて思い出ああ夫婦　かずみ
生活のすべてを語るゴミ袋　起世子
一言がすべて白紙になる怖さ　イセ
手の内のすべてを明かすことはない　准一
いきさつをすべて見ていた昼の月　朱夏
夫婦別姓男の中を風が吹く　次根
ゴキブリに聞き逃げされた痴話喧嘩　孝義
添い遂げるなんて思わぬ宇宙人　徑子
政治家を二枚におろす屋台酒　幹子
柚みその香り大根弾ませる　純子
満ち欠けもあってまあるい夫婦の絵　碧
年金で夫婦ごっこをしています　保州
かと言って他人が妻をけなしたら　みね
さん付けでたまには妻を呼んでみる　武
大根めし強く大きく育った子　美枝子
ネイルアート料理をしない娘が増える　幸
薄味にしておきました仏様　章子
木枯らしに大根めしも美味くなる　当代
秘めごとがはち切れそうなオムライス　宏夫
手料理で荒れる命を守りたい　登美代

川柳塔みぞぐち　小西　雄々報

志望校パスで乾杯夢に見た　豊枝
新年の乾杯ふとくなる絆　鈴枝
乾杯へ再出発の旅に出る　弘子
食事会乾杯かさね盛り上がる　公美枝
年長の故の乾杯音頭とる　信雄
乾杯へ三代揃う家族の和　智恵子
猪突とは言わずゆっくりマイペース　久子
猪がスポットライト浴びる年　和代
亥年には元気をもらう年にする　静江
可も不可もなくて亥年の春迎え　正光
猪も生きにくいから里に出る　雄々

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

解きやすいように結んだ母の愛　ひかり
自転車のペダルが重い北の風　あきら
通帳の残を気にせず使いたい　かおり
宝クジ買ってあれこれ皮算用　放任
老骨が腹を決めての笑いジワ　賢
腹立てず利巧に回り丸く生き　よしみ
有利だと甘い言葉の落し穴　八重子
陽にカザス節くれだった大きな手　初恵
一日の疲れを癒やす露天風呂　いさむ
お出掛けで熱燗一本添えてある　寿々女
両輪が揃って有難さを知らず　貞月

高槻川柳サークル卯の花　瀧本きよし報

合格と明るい声で子が帰る　照子
底抜けに明るい嫁に救われる　重人
明るくて強気な妻に支えられ　治三郎
明るさが取柄花嫁福を連れ　武史
四季の花絶やさなかった母の笑み　公子
明るくて美しい国それは何時　活恵
今年こそ明るい一字を清水に　求芽
正月だけは笑顔の仮面外さない　孝一
天下り無縁で今日もぬるい風呂　美義
声だけが混浴でした露天風呂　尚士
いい湯だな母のお腹の心地する　乃りこ
ほんのりと羞らう老母のおむつ替え　かおり
ほんのりの涙落とせる母の膝　典子
よもぎ餅春がほんのり匂いだす　宏章
検問でほんのり頬に出たお酒　きよし
バージンロード父もほんのり頬染める　稲子
アルバムを開くほんのり匂うきみ　幸雀
ほんのりとわたくし色に染め上げる　葉子
一冊の本で変わった処世術　庸佑
狭き門通った後はマンガ本　義一
古本屋店の主人も古くなり　義昭
漱石に帰り着きたい本の旅　勲弘
恋人を探すがごとく古書を選る　昭
一冊の出会いに明日が光り出す　郁夫
背伸びした自分の影が揺れていた　萬的
いつか読むつもりの本が雲がくれ　秀夫
スランプを知ってるネジが回らない　昭二
打たせ湯が肩の力を抜けと言う　恵美子
立ち読みを大目に見てる古本屋　康雄
日々好日あかるく笑うイヤリング　美籠

岸和田川柳会　土橋　房枝報

頭だけでもご馳走だ鯛の粗　寿海
言い分はボトルに詰めて交わす酒　笑司
エースではないが存在感がある　珠子
雛祭り祖母が誰よりうきうきと　ふみよ
子の頭脳とんび鷹とはいかなんだ　弘子
外出に帽子が欲しい年になり　泰弘
うきうきがはらはらとなる子の電話　俊昭
大滑降してる夢見て足をつる　岩夫
すべるよりころび汗かく初スキー　香代
家事忘れ心うきうき友とお茶　淳風
好きですと言うてくれへん帰り道　和美
九条はエース一歩も譲れない　ダン吉
頑固でも医者の言う事だけは聞く　守
もったいないと言うてめしつぶ噛みつぶす　けい子
球団がエース育てて輸出する　仁緑
脳トレのドリルに夢中なのは孫　淳子
エースとは別の生き甲斐黒子役　ゆい
散歩する頭上にきらきらオリオン座　幸子
Tシャツでスキー操る地元の子　昭
石頭また来いと待つ九段坂　蛙城

佳句地十選（3月号から）

中岡　妙

コンビニの灯火へ寄って来る迷子　公子
衣食住片目つむって生きてます　初恵
しっかりとせんからあんた放っとけん　幹治
発明のヒントとなった妻の愚痴　三喜夫
許されて僕でも白い骨になる　たもつ
やがて逝く命だ磨きかけておく　比ろ志
かけひきも偽りもなく花は咲く　楓楽
面倒見よくてちょっぴり疑われ　てるみ
あこがれは美と健康と愛妻家　(本)たえこ
今日の愚痴サプリメントにして飲んだ　和子

おばちゃんは言わにゃ損だとよく喋る　東吉
おなかいっぱい頭からっぽ辞書枕　房枝

川柳塔唐津　仁部　四郎報

目覚ましを止め教室に居る布団　晴翠
愛国心文字にこだわり嫌われる　勝視
アルバムへおさめた賀状多くなり　實
老春の少し艶めく一行詩　正剣
猪鍋で友と天下を飲んでいる　蜂朗
怪事件に作家は髪を掻きむしる　水笑
役所の名変えたが何をするつもり　四郎
若づくり何故か気になるサロンパス　輝夫
理由さえあれば公金毟りよい　高明

川柳茶ばしら　板山まみ子報

温暖に猫は屋根までテリトリー　文男
政治ってコメディアンでも出来るんだ　盛夫
エスカレートしたおしおきへ父の悔い　幸子
強化されても飲酒あと絶たず　百合
あて逃げに破片残したとは知らず　かつ子
約束を忘れ言訳なんとする　秀水
冷や水と笑われ懲りもせぬボール　美千代
ゲンコツは覚悟門限すぎたドア　まみ子

竹原川柳会　時広一路報

ふるさとの山まんまるくあるご恩　蘭幸
母の恩しっかり点す仏間の灯　敬子
無器用な鶴を悩ます恩返し　あゆみ
恩返し何にも出来ず米を研ぐ　淑子
妻の恩どう応えよう五十年　万年
物言わぬ手から伝わる姑の恩　厚子
母の恩においかたちもいろもない　不朽
幸運の始まりあなたに逢ってから　比呂子
天地創造アダムとイブとりんごから　幸子
しがらみに女一人の始発駅　規代
脱皮して明日はわたしの始発駅　汎美
始発駅デッカイ夢を積んで発つ　栄恵
出会いから始まる長い二人旅　鬼焼
始発駅決意をためす風がある　史子
お風呂場でカラオケ隣の犬が吠え　千枝
退屈だ犬があくびで訴える　慶子
回り道しても行きたい親の墓　笑子
一歩二歩私の道を信じ切る　静風
こんなとき欲しい心の道しるべ　節夫
畦道も山道も好き母の里　菁居
三本の道に凡夫は迷わされ　房子
ふりかえり愛ひとすじの道だった　民恵
道なんて要らない自由に飛んでやる　力
息抜きに男が選ぶ道がある　一路
長い道ドラマを幾つ見たろうか

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

クリスマスサンタ待つ子はもういない　伸子
うっかりとメール勝手にしゃべり出す　聖子
うっかりと百八つめを聞きのがし　はるみ
正確な目覚し時計に腹を立て　恵美子
砂時計海のロマンをまきながら　好栄
天からの誘いに乗れぬ曲り角　かつ子
山彦をかえしてくれる山がない　ちよえ
青い天ただ一本の飛行雲　博利
もう少し速度落せと天の声　清泉

川柳ふうもん吟社　夏目一粋報

忍び逢うそこから修羅場幕を開け　洋々
頂点に立つと怪しくなるモラル　美恵子
ばちゃくれば会社困って金を出す　圭一郎
鈍行に乗って行きます老いの坂　春名
境界の杉一本がけんか好き　夢路
ばちゃくるな今名案が出るところ　一瑶
叶姉妹の桁はずれには舌を巻く　無限
役人に問う血税の無駄使い　かをる
裏ばなし孫がばちゃくり話題変え　志げ緒
凡帳面に裏金ためて首にされ　蟹郎
三世代同居モラルは順守する　毅
七十路まだ燃えるものあり歌を詠む　一京
もう直ぐに煮えるけ我慢ばちゃくるな　善夫
鼻息の荒さは猪に引け取らぬ　あしび
公僕がモラルの壁を壊してる　信子
注ぎたした酒で波乱が巻き起きた　節子
永田町ただのお城に舌を巻く　秀夫
三世代波乱を起こす嫁姑　喜子
舌をまく人間越えるいのししだ　はつ江
何ごともお国のためとばちゃくった　行男
ばちゃくった後の波乱がまだ消えぬ　金祥
モラル地に墜ちて日毎の殺し合い　雅女
人間のモラル猿にも引けをとる　昌鼓
ウツ予防ばちゃくる役が来て癒す　孝男
ペコちゃんも消えて業界大波乱　由美子
離婚話波乱の渦は制止せぬ　益子
ペコちゃんの老舗偽装が舌を巻く　義徳
詐欺重ねるおんなの口に舌を巻く　茂登子
禁煙を守らず妻と一波乱　宗明
海に魚がいなくなる大波乱　一粋

うぶみ川柳会　　小谷美ッ千報

花降らす同じ匂いの列につく　美ッ千
ボーナスがサンタになった頃想う　ひろこ
ゴクンゴクン母乳うっすらして来たな　孔美子
這いまわる天職があり恙なし　きみ子
高密度求めて旅する養蜂家　くにお
人類の欲がこの世をわやにする　黙光
眼帯を取ればうっすら母の顔　天人
故郷を這いつくばって生きている　京子
うっすらと一刷入れた絵が光る　和子
国中を這いずり回るノロウイルス　龍枝
分類のゴミに乱心捨てて置く　美知江
子沢山這う子歩く子賑やかい　かつみ
うっすらと西陽を受けて四股を踏む　睦子
商人を儲けさせてるクリスマス　幸恵
ありがとね亡母の口ぐせ胸を這う　尚子
へとへとでもうこれまでと四つん這い　あづま
楽しくも苦しくもないクリスマス　和
人類の最後のひとでいたくない　小鹿
這い上るチャンス狙っている谷間　和枝
新人類歌い踊って職が無い　重忠
うっすらと昼の月から落ち椿　よしえ
煙突が無くてもサンタちゃんと来る　芳江
這い初めの孫に手が鳴る方は春　帆雀
ありがとう命うっすら雪化粧　螢
まだ生きておりますメリークリスマス　完司
ゆず湯からあがり柑橘類になり　石花菜
トナカイのそりが止まった期待感　宣子

京都塔の会　　都倉　求芽報

年金も無くて千年生きる鶴　則彦
鶴頸の花器へ正座を促され　昌乃
温暖化　鶴の飛来も勘狂う　朝子
昔なら鶴の一声父の喝　満子
初夢は鶴舞い降りた青テント　恭昌
求愛の鶴が蹴散らす雪の花　求芽
たっぷりと生きよと教えてくれた紫香さん　和友
ユーモアをかき集めてる山の神　輝美
退職金たっぷり貰い天下る　きよし
母の膝たっぷり涙置いてくる　典子
たっぷりとぜい肉つけたグルメ旅　綾子
たっぷりの春ゆったりの三番叟　欣之
たっぷりの時間がうまく使えない　宏子
生活の愚痴がたっぷり家計簿に　百合子
ワンテンポずれる笑いへ座が白け　庸佑
僕の目の端で妻子が笑い合う　福子
ウフフフと噂を否定する女　萬的
笑ってる間は痛さ忘れてる　啓子
汽車の中笑いのたえぬ少女達　英子
本当の味方黙って笑うだけ　美義
赤ちゃんも笑顔の人が好きらしい　益子
内緒なのにどっち向いても出る笑顔　葉子
食台に空席一つある順序　とし子
筆順を違えた文字が落ち着かぬ　克治
すき焼きに拘る父の具の順序　利昭
三女次女嫁いで後は長女だけ　甘鬼
死に水は取ってあげると妻が言う　尚士
順序などだーれも知らぬ北枕　藤重
熱燗の痛み止めから打ってみる　郁郎

尼崎いくしま川柳会　　春城武庫坊報

節分に五色豆撒く花のよう　正子
早二月日々の流れに追いつかず　千恵
俗論に流されるなよ祝二十歳　宏一
遠い日の想いを秘めて流し雛　純
お喋りの口を封じる蟹の膳　勝巳
ここだけのバントマイムを喋り出す　寛之
あの人が喋るとスープ冷えてゆく　薫
早春の花一輪に背を押され　年代
楽してのダイエットには落し穴　幸子
生年月日夢も影も小さくなる　しづ子
チラシ見て買物行くが金忘れ　忠
丸かぶり高齢化では見放され　矢薫
夢の中何度死んでも生き返る　守弘
レストランひとりの時は隅の席　ゆき子
風花がふっとあの日を連れて来る　紀乃
可愛らしい言葉生れる玩具函　武庫坊
座布団に裏と面のある京都　昭三
急く顔も見下げて止める赤信号　東園

長柳会　　村上直樹報

パン屋から吹く春風と鬼ごっこ　直樹
納戸から懐かし亡母の日和下駄　登美子
苦労した大黒柱魅力増す　史
春雨はしとどあてなしホームレス　輝子
クラス会しわの数見て苦労知る　明信
古稀来ても追い返します天寿まで　靖博
苦労して書いた恋文今メール　もこ
春雨に濡れてペットの御供する　正一
選抜は春雨の中延長戦　正子
妻の愚痴どこ吹く風と聞き流す　明子
八人を育てた母の太い腕　靖子
公園に吹き寄せられた青テント　武男
一歩前トイレの中に人生訓　正博
苦労することに慣れたと笑い皺　良男
二ツ三ツ義理チョコ届く苦労人　淳司
少しだけホラ吹きながら生きてゆく　英美
保証印押して苦労の種を蒔く　マサ
産む機械女性の声が吹き荒れる　たけし
秋風が年中吹いてまだ夫婦　幸雄
団塊の世代へ未知な風が吹く　和子
その皺の数だけ受けた母の愛　敬二
苦労とは思っていない介助犬　冨美子
ホラ吹いて帰る夜道の薄い影　一慧
ゼロからの苦労を共にした絆　三和子
どんな風吹いても母の舵がある　芳野
子も苦労したのか語尾が暖かい　正美
苦労した石だまあるく温かい　和代

川柳ささやま　　遠山可住報

ふるさとに飾る錦も無く老いる　精一
おでん鍋囲む話も輪になって　純子
初日の出寝坊の僕に縁はない　章
飾らない人だがどこか華がある　二英
夜景までメニューに入れておでん鍋　文子
コンニャク煮東北の旅懐かしく　美紗子
七色の味が楽しいおでん鍋　靖子
出初め式虹に変った堀の水　多美子
おでん鍋卵はやはり主の顔　開子
猪と亥の飾りを換えて春を待つ　照代
肩パッド外して空が美しい　かほる
いい顔に飾ってリンゴ旅に出る　つや子
美しい顔を忘れたカニ料理　哲男
ごきれいでだあれも横に坐らない　可住

川柳塔鹿野みか月　　福西茶子報

私には理科や化学の脳がない　実満
替え歌をチョイナチョイナと締めくくる　久江
桃の花咲いたよひ孫ひとりふえ　くに子
ひたすらに我が世の春を歩くなり　ひろ子
輪に入る苦手を一つ売りものに　孔美子
几帳面もほどほどでよい肩が凝る　幸枝
雪しんしん老母への粥が炊きあがる　彩子
真っ先に苦手の饅頭平らげる　節子
優しさにあふれ笑う目糸になる　茶子
騒音は苦手頭が痛くなる　和子
五十年縺れた時もあった糸　弘子
冗談のつもり苦手な話聞く　睦子
大豆噛む三十二本の歯は達者　蟹郎
団塊の世代に春告鳥が啼く　螢
てくてくと戦地で歩く涙の記　宣子
かえ歌を子供歌えば愛らしい　武子
にんげんは苦手と森の声を聞く　忠良
咲いて散る花から学ぶ余命表　美恵子
てくてくと嫁の立場の愚痴連れて　公子
彼岸花喜怒哀楽がにじみ咲く　菊乃
てくてくと生きた証のちびた靴　きみ子
老いこたつ昔話に花咲かせ　房子
宴会に替え歌弾み熱くなり　みどり
てくてくと歩いて花を数えたし　八重
山越えててくてく帰る春まつり　富久江
凛として苦手と四つに組んでいる　はるお
苦手もあって力をつくることになる　汲香
オットット苦手な人がやってきた　みさ子
おだてられ苦手意識をつい忘れ　かおる
ササユリを咲かせる汗は惜しまない　重忠

川柳塔なら　　坊農柳弘報

盃を集めただけで酔うてくる　カズ子
目だつから三三九度を急かされる　博一

祝盃を重ねて夢が近くなる　芙佐女
日の出から今日の命を貰い受け　ふりこ
娘は嫁ぐ今日の日の出は日本一　千梢
風向きがどう変わろうと走り抜く　春雄
冬山の日の出に光る雪の肌　章久
前進がありて今日を喜ぼう　春蘭
前進はするが逃げ道きめてある　利昭
一本の藁になれた日風和む　孝子
最後まで勝負は捨てぬすべりこみ　真理子
前進をやめない恋を持て余す　六助
なごやかな話弾んでいる足湯　富子
雲海を日の出が染めた山の宿　弘風
負けた日の手酌へ窓は雪ばかり　良一
前進へスイッチバックの手を使う　隆盛
生かされた命日の出に手を合わす　一風
独身の輝き日の出より光る　弥生
点滴へ日の出を待っている命　朝子
前進をしたくて辞書を離さない　重人
初日の出今年の抱負は大きいぞ　茂雄
東天紅に押されて昇る初日の出　道子
盃の底から起きてくる噂　美千子
退くことを知らぬ若さが突っ走る　寿美
七彩に染めてすがすがしい日の出　秋雄
前進へ厳しい練習跡があり　笛生
まっ白なこころで祈る初日の出　國治
盃は干しても僕にある主張　ダン吉
前進はせぬが戻りもできぬ恋　理恵
梅咲いて母はお粥をみな食べた　俊彦

ほたる川柳同好会　水野　黒兎報

お二人も産んだ機械と誉められる　宇乃子
核爆弾ミスでストンと落ちるかも　契子
二番手をほろほろ生きて日向ぼこ　勇治
胃袋へすとんと落ちるトコロテン　幹治
言うだけ言うて椅子にすとんと腰落す　肋骨
車内ではしっぽ隠して化粧する　黒兎
寒空に立退き迫る青テント　柳童
気温の格差四季を忘れてしまいそう　桂子
ライバルがすとんと抜ける淋しい日　長一
二度寝してのんびり春の雨を聞く　香代
もう二度としませんという三回目　見清
二番目に生れ気楽に育てられ　雪子
一位より二位が好きです明日がある　禮子
転倒も夢のすとんでほっとする　信男
隠しつつ知っても欲しい片思い　正三郎
鍵っ子へすとんと秋の陽が落る　蛍柳
お隣の外車格差を見せつける　祥風
エアポケット実感させる税の月　勝

西宮北口川柳会　黒田　能子報

チャンスの風窓全開で誘い込む　わこ
決断の時に佇む窓がある　富喜子
梅いち輪心がなごむ窓をあけ　光子
窓ぎわのトットが語る好奇心　順子
ワンテンポ遅れて笑う母がいる　房子
アドリブで笑わせ舞台の人気者　奮水
夫唱婦随アンタが笑うから笑う　鹿太
あの人の笑顔を見ればすむ用事　耕治
ひらひらと舞う蝶追ってる猫も春　いたる
追風に馴れて人間惰眠する　嘉代子
夢一つ追うて春待つさくら草　たず子
何を追うあくまで白い赤児の眼　章子
若者に追い抜かれても喜べる　松煙
名人芸指先を追う目のくばり　一之
地下街ではぐれた恋を追いかける　朋月
養殖でも殺然鯛の目光ってる　孝一
魚の目を仇の顔でほじり出し　直
生いたちは何も語らぬ冷凍魚　遠野
魚は無口で潮の流れに逆らわぬ　比ろ志
大漁旗はためく先に妻が待ち　折抗
新緑の季節約束する冬芽　紀乃
出直しへ覚悟を決めた児の笑顔　光久
明日の事魚眼レンズで透視する　宏一
車間距離あけた夫婦が長つづき　五月
世界遺産なりたやゴミの富士の山　二英
軽はずみな言葉に結び目が緩む　美籠
涙腺は弛みがちだが背を伸ばす　哲男
梅の香が梅の色紙からこぼれ　求芽
生き下手な男がひとり秋刀魚焼く　美代子
今日と言う二度とない日を華にする　婦美子

すみよし川柳会　岩崎　公誠報

財布のひも母がにぎって父ピンチ　文香
ブランドの財布に中身伴わず　明江
財布のひも堅い嫁さん頼もしい　定子
とうさんの汗が染みてる皮財布　かりん
値打ち出た娘のくれた古財布　俊夫
お財布と自問自答して暮し　日の出
ずっしりと重い財布は小銭だけ　萌
財布から手品のように札が消え　桃花
財布には手紙写真をしのばせて　舞夢
男のポッケ財布替りの裸銭　遠野
財布にも亭主にも紐つけてある　蕉子
二次会はやめろやめろと言う財布　一歩
午前四時礼文の宿で日の出見る　ヒロ
初日の出テレビで拝む富士の山　幸子
初日の出テレビで巡る名勝地　公誠
生きよ生きよと大きな声で日が昇る　たもつ

川柳大阪　長井　善純報

離婚して眩しくなったのは女　鉄心
逆光がボクの目を射るバラ一輪　孝一
定年後息抜きばかりしています　勝弘
いびき止み息してるかと手をかざす　花笑
息継ぎができないほどのプロポーズ　柳昌
ダイエット餅がカタキのお正月　かよこ
脇役の或る日決意の花が咲く　洛酔
今年こそ今年こそはと日記買う　彦太
謝ると決めたら軽いペダル踏む　一歩
決意した男の眉にきつい風　まつお
マイウエイ決意に光る未来像　一風
安倍総理やらせさくらで付けが来る　紀雄
追伸に母の小言をもろて春　柳弘
陽溜りが眩しい白内障らしい　美花
キッチンを眩しく変える嫁が来た　章久
決意だなど肩の力を抜きなさい　ダン吉
甲子園出場めざす丸坊主　五月
決意だけしっかりしてる意思表示　照月
緑児の寝息に誓う平和の世　東吉
大き目の決意小さな花が咲く　喜楽
国民の獲れる全てを義務化する　川童
晴れ着の娘外輪大また脱ぎなはれ　ひろゑ
神の声ゆっくり聞いて年初め　信酔
体調が話す感謝の有り難う　福世
早春の風が囁く良い予感　朝子
お喋りも腕の内ですサンパツ屋　重人
派手かしらなどと買う気になっている　民
眩しいよ君の瞳とそのハート　青道
決意したきのうの事はもう忘れ　和
ライバルの息づかい聞く上り坂　善純

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

やる気満々赤をわたしの色にする　輝子
辛抱する道を選んで満ちている　寿子
アングルの外は土砂降りだと思う　大輪
美しすぎてカメラアングル決まらない　みつ子
赤貧の頃人間は温かった　夕胡
アングルを変えてうっとりする魔法　よりこ
辛抱も感謝に変える底力　和香
辛抱は筋金入りの戦中派　保州
団塊で育ちアングル他人まかせ　英子
辛抱の二字に情けも教えられ　稚代
辛抱の箍がはずれてきた夕日　あきこ
りんご真っ赤に言いたいことは胸にある　朱夏
どの角度から見ても非のない美人とか　三男
ストレスと辛抱揺れる日々生きる　冨美子
黄昏にも夢をくれます赤トンボ　泰女
赤まとい古稀も華やぐクラス会　怜
アングルを変えて父ちゃん好きになり　紀久子
辛抱を笑顔に変えたのは月日　和子
赤い毬抱いて女の長い冬　裕美
アングルを変えても老母は老母の顔　克子
アングルを変えると不思議気も晴れる　よしこ
真っ赤なバラ貰ってからの物語　紀子
ほとばしる赤い気炎はペンで吐く　徑子
辛抱は和解に欠かせない薬　千代子
アングルを変えても九条は立派　ダン吉
赤い靴履くと跳べそう水溜まり　登美代
アングルを変えねばわたし狙われる　豊太
見直すと別の角度がよさそうね　三喜夫

母ちゃんは機械じゃないと赤ん坊　佐一
辛抱をすれば明日が見えてくる　順子

八尾市民川柳会　宮西　弥生報

笑う日がくると信じて二浪する　ますみ
モナリザの笑いペーソス秘めている　秋雄
寒気団また来て春を遠ざける　耀一
やんわりとゲートボールを辞退する　浩三
また来るね孫のやさしい処方箋　民
残酷な雪だ夕張にも積もる　賢子
品のいい笑い会話にはずみつけ　宏至
あるがまま生きて心の皺がのび　朝子
やんわりと空気ほぐしたハートチョコ　あかり
健康へ笑い袋ははなさない　一風
よく笑う夫婦で毬がよく弾む　まつお
ペコちゃんも安倍内閣も支持を下げ　紀雄
生きるとはバリバリ音のする命　美代子
やんわりと言われてみれば反省し　芳香
やんわりの合間に愛の鞭を打つ　欣之
生臭い色を捨てたら雪になった　定男
寒気団私にばかり下りてくる　ダン吉
肘鉄もできずやんわりかわすママ　柳伸
あたたかい節分おにも笑ってる　レイ子
忍び笑いしながら金を数えてる　たもつ
もういいかい夫婦げんかの花枯れる　きらり
八つ裂きの情を紡ぐ雪の夜　弥生

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

ビリで良い毎日食べて暮らせたら　真一
まわれ右したらトップになれる位置　六点
ビリだって元気に走る孫がいい　ヨシ枝
夕焼けが好きでしんがり気にしない　扶美代
気にするな父さんもよくビリとった　いさお
ビリの子へ風が伴走してくれる　美代子
尻尾切り頭は更に罪重ね　章司
頭痛のたね薬呑んでも治らない　アヤ子
高い方はあかんと妻が頭振る　耕策
頭打ち汗流す他ないだろう　ダン吉
パソコンが漢字の貯金消してゆく　かつみ
頭数足らぬ時だけ来る誘い　志洋
酸欠の頭を冷やす青い空　りつえ
切れすぎる頭出世の邪魔をする　一壺
先頭になって姿勢を崩せない　泰子
当選の喜びつかのま組違い　正子
優勝を喜ぶ顔がはちきれる　敏
内定の通知思わず跳び上る　一知
百点は母が喜ぶ薬です　喜久子
喜びは人それぞれで胸の中　静子
喜びを祝うその日に咲くさくら　悦子
喜んで見せると遣る気出して来た　光男
カーネーション贈られクシャクシャになった　重人
万雷の拍手いそいそ表彰台　獏沓
いそいそとするから妻に疑われ　恵勇
いそいそと母が待ってた月給日　久仁子
いそいそとわが家を目指す退院日　庸佑
菜の花にいそいそ蝶も私も　みつこ

いずも川柳会　佐藤　治代報

煩悩を捨てて今宵はよく眠る　律子
満月の欠けた所と巡りあう　美江子
別々に生きて浄土で巡り逢う　祐次
枯葉一枚冬の出口で巡り合う　桂子
人間に疲れどこでも良く眠る　敬子
トゲひとつ抜けて安堵の飯を食う　たえこ
ほころびを繕い安堵して眠る　佳子
安穏な日にも時々吹く嵐　治代
やわらかい雨だ眠りの中で消え　徳子
むっくりと春の眠りを呼び覚ます　幸
御転婆を安らかにする母子手帳　テル子
活火山仮眠中です触れないで　久子
わたくしが乾かぬように側にいて　多喜
何ごとも溜めて安らぐ象の耳　すみこ
許された豆腐安心して崩れ　玲子
塩ふって私の位置を確かめる　歌子
巡っても巡っても治まらないほむら　喜子
祖父母に似た五百羅漢に巡り合う　多輝子
まあまあまあ外野は少し黙ってて　富恵
雪女たった一度の巡り逢い　芙佐子
進化論人の命が安くなる　淞丘
安売りへ才女も並ぶ市場かご　房子

愛めぐる便箋ばかり薄くなる　蘭水
ひと巡りすると仏の知恵貰う　町紅
母の海安定剤が置いてある　寿美
弾まない毬を駆使して季が巡る　多賀子
星屑の中のひとりに巡り合う　きみえ
安住の地が無くなった温暖化　文子
敵に塩送った道に詩がある　茂美
蓋のある箱で安心して眠る　章峰

川柳塔まつえ吟社　三島　淞丘報

顔色をほめられてからついその気　町紅
春うららあなたの色を懐かしむ　礼子
故郷の色は何もかも温かい　博子
チョコレート色がハートをゆり起こす　たけし
色めがねで見れば何方も狂ってる　茂美
色褪せた布も形見で懐かしく　政子
雪囲い木々の命を温める　幸
雪しんしんこの世の汚れ消すように　多喜
一杯の地酒に解ける春の雪　房子
雪が降ったら美しい国になる　螢
雪だるま旦玉残して消えていた　英子
雪だるま行方不明になった冬　喜美子
リタイヤの父そわそわとイライラと　薫
そわそわとアバンチュールの回り道　治代
そわそわになる百歳のふみたしか　日出子
入れすぎた気合そわそわして困る　繭
そわそわのもとは電話の声にある　邦代
瀬戸際になるとそわそわしてしまう　静恵
レンタルで暢気に暮らす独り者　ちえこ
薬づけレンタルできぬこの体　捷子
レンタルのトラック静か春を待つ　和歌子
レンタルで買えない宝家族の和　幸子
レンタルの過去は問わない方が良い　昌枝
母胎までレンタルできる世が怖い　淞丘
景気いい話聞かせよ都鳥　知恵子
景気には遠く梅酒をのんでいる　桂子
景気良くケータイだけが鳴っている　柳歩
不景気をとばす朝市セリの声　きみえ
景気良い音で他人の家が建つ　紫晃
白い飯食べているからよい景気　注湖

岩美川柳会　石谷美恵子報

機械と呼ばれ大和撫子が泣く　蟹郎
団塊の機械あなどってはならぬ　一瑶
内臓の機械は無傷われ八十路　重忠
汗かかぬ機械にひとは操られ　忠良
新しい機械に慣れず弾む汗　清帆
たっぷりの愛にぎくしゃくする息子　一粋
ぎくしゃくと浮世の舟をこいでいる　一京
ぎくしゃくとしつつ一緒に呑む親子　和枝
ぎくしゃくの空気和ます人が好き　たぬ
ぎくしゃくは夫と私の愛言葉　菖子
水入らずぎくしゃくしてもすぐ戻る　和子
ぎくしゃくを丸くおさめるお人柄　雅女
父も母も疑うことを教えない　螢
疑った時から不幸始まった　圭一郎
妻の所作疑心暗鬼の渦となり　孝男
疑えばペットにも背を向けられる　よしえ
物忘れ疑いの目がよく動く　睦子
疑いが晴れて仲よくお茶にする　公乃
疑えば二倍の疑心はね返る　稔
疑って飲むから薬効いてこぬ　かつみ
恥かいたことは妻には言ってない　はるお
恥入っただけで反省せぬヒト科　茶子
バーゲンで恥も買います後の悔い　節子
羞恥心とうに卒業翔んでいる　公子
かいた恥肥やしにしては生きている　幸枝
疑心暗鬼人と言う字の不信な日　美恵子

川柳クラブわたの花　山本　宏至報

定年に慣れてオールが合う小舟　はじむ
叱って褒めて抱いて子育てした記憶　妙子
庶民派の塗りはげ落ちる知事の顔　八寿子
あこがれのスターの親にあこがれる　克美
あこがれの君の隣でVサイン　愛子
露天風呂富士を眺めて朝酒を　孝子
菊咲くや君あこがれた無垢の頃　和子
恥じらいもなく車内で塗っているルージュ　ますみ
褒められてきれいに咲いた寒ぼたん　ミツ子
褒め言葉眠る能力開花する　君江
褒めるとこないけど何故か貴方好き　耀一

ライバルの後姿に見る余裕　民
ペコちゃんの姿が消えた街寂し　知佐子
過ぎし日の苦労をバネにジャンプする　美代子
年老いて信頼できる友先に　荘治
余生とは立派な人の一ページ　博子
姿見は正直者と影法師　俊子
独り者皆良かった子沢山　たえこ
美人とは顔とスタイルあと化粧　正春
硝子窓無事定年で明け渡す　浩三
朝冷えの血圧同志のご挨拶　幸枝
亡母の残像里の景色に住んでいる　晴美
塗りたて注意そっとさわってみたい指　宏
開発か破壊かきょうも土煙　美はる
痛いとこ絆創膏を貼って生き　欣子
亥の年の夢を滾らす寒ぼたん　ふりこ
友の名を時どき使う午前様　義明
合格は絵馬に頼んでけせらせら　いつふみ
子育ての母の勇気に鬼も逃げ　宏至
あこがれも願望となり絵馬ゆれる　一風

川柳ねやがわ　森茜報

まずまずの運を天から頂いた　あやめ
人間のおごりに報い温暖化　頂留子
天満宮繁盛亭も見て帰る　さち子
天秤に掛けた妻とは思えない　冬葉
天仰ぐ蟻と私の武者震い　とし子
上天気大根一本買いました　かすみ
差し向かい天にも昇る酒の味　修
こんな世じゃ御天道様におこられる　鈍甲
終章へ天地に恥じぬ舞納め　房子
豆の木を登り天国目指す蟻　郁夫
とぼけても天知る地知る黒い金　仁清
天と地を結んで朝日今昇る　たもつ
平和っていいなと思う青い天　洋
図にあたる作戦気持悪くなる　亜成
蟻の列作戦どおり乱れない　弘一
離縁状書き終えました青い空　ただよし
作戦に乗ったふりして遊ばれる　博泉
孫の作戦知らない顔で乗ってやる　一風
作戦は月夜の晩の薄化粧　あさ子
核とラチそして援助の三すくみ　柳弘
作戦は平常心と決めました　茜
料亭の襖は策を聞き流し　じゅんこ
場の風を読んで作戦立て直す　集一
願わくば作戦なんかない平和　朝子
占いで高いはんこを買わされる　九好
占いを信じて妻はついて来る　勇太朗
女にはご縁が無いという手相　弘風
中吉でよし欲張らぬことにする　ルイ子
占いを信じぬ妻とよくもめる　恵子
許す気の親がおみくじ引いている　重風
天変地異分からないからよく眠る　典子

川柳塔きゃらぼく　福代天雀報

回り道する猪もたまにある　千代
朝の雪犬の足跡みだれてる　雪江
また一人鬼籍に入りし日記閉ず　寿々子
春が来るわたしを泣かす杉花粉　恵子
お年玉もらう笑顔の年始め　亜弥
真っ直ぐに歩く芝居がむつかしい　冨美子
瑞雲にのりやって来た風邪の神　ゆき
歳月の遠景晴れたり曇ったり　てい子
おみくじを引いて大吉とび上り　章江
猫を飼う人だんだん猫に似てきたよ　晶子
おだやかな正月生きる足音が　田鶴
八十路の坂半ば登って見る世相　繭
今もなお亡母の教えが胸の中　玲子
春になる独楽へ油を注いでおく　やえ
虫達も何処へ行ったか雪の中　春枝
ふっくらと布団ふくらむ満足感　日枝子
年賀状書いて貰って祝卒寿　紫泉
何げないお洒落でおんな夢を漕ぐ　瑞枝
そこそこのくらしができる身に余る　ふみ
両脚を姉とさすって兄送る　那珂子
孫達は手作りおせち懐かしむ　初枝
とんど焼き今年よろしく声交わす　天雀

打吹川柳会　野口節子報

求愛に元気も出ると渡り鳥　善江
落ち椿枝に元気な芽を宿す　玲子

死ぬまでは私は元気ほんとだよ　和子
途中から元気出てくる梯子酒　三津子
選んだらとたんにいばり出した人　やえ
無農薬選ぶ消費者目が光り　小生
お祝に選んで置いた春財布　睦子
ふとるものばっかり選ぶバイキング　玲坊
色気ある口紅選び若返る　禎元
来る来ない夜のブランコ揺れている　美ッ千
選ばれて肩が凝る凝る幹事役　紀美恵
子を叱る言葉を選ぶ母の知恵　美知江
一億の中の一人と添い遂げる　幸子
永遠のテーマは世界平和です　芙美子
テーマから外れ話が馬鹿受けし　滋
永遠のテーマ亭主の操縦法　公恵
人生のテーマは空とお釈迦様　克枝
健康のテーマに嵌り騙された　龍枝
婦唱夫随テーマに隠し味つける　照彦
やんわりと妻が握っているテーマ　孝恵
よろこびをテーマに梅の盆栽展　螢
減肥料のテーマに励む土作り　重忠
にんげんであり続けるというテーマ　芳光
永遠のテーマポックリ大往生　石花菜
保育園もう好きな子と手をつなぐ　よしえ
豆腐好き手間のかからぬお酒飲み　京子
好きですと言えないままで雪になる　きみ子
好きな色を夫に着せて連れ歩く　みち子
ペット呼ぶその名は昔好きな人　和枝
耳掃除してラブコール待っている　節子

豊中もくせい川柳会　江見　見清報

初見合い親の姿に一目惚れ　則彦
駐禁効果イチョウ並木が長長と　寅次郎
手の皺が一番嘘のない私　玲子
寝て食べてそれで不足を言う勝手　啓生
喧嘩ばかりしてる夫婦で信じ合う　石舟
定年離婚あさきゆめみしえひもせす　美代子
二人とも掘り出し物と思ってる　美義
人間は仮の姿と千の風　早人
波長合いいつもふらふらフルムーン　巴子
成人の孫がとってもチャーミング　正坊
あなたにはとても勝たれぬその化粧　和子
息子には僕の姿を見せておく　重人
さよならのうしろ姿は振り向かず　慶子
さくら餅うぐいす餅に春が来た　タミ
落し穴掘ったが誰も落ちはせず　寿美子
神戸は神戸の姿で人待つハイヒール　萬的
掘り下げて我が人生を振り返る　知香子
用立てはとても無理だと釘を刺す　庸佑
庭の苔猫に掘られて泣いてます　勇治
晩学の熱が埋れ木掘り起す　千代
娘の家系長寿のようで決めました　郁子
あの発言とても貴重だメモしよう　肋骨
跳び跳ねる姿に焼けた鯛の意地　志津子
言い負けた姿のままで沈む風呂　求芽
合格はとても無理です絵馬の誤字　宇乃子
作業服長ぐつすてきお父さん　都代子
遠景はとても奇麗な富士の山　幸雀
九十歳小さくなって師は逝けり　夢
こんどこそ先回りしてつかむ夢　満寿巳
今日よりも明日へ大きな穴を掘る　たもつ

川柳塔おおとり　福田　登美報

うきうきの出端をくじく憎い雨　由多香
ひとりよりふたりうきうき日向ぼこ　螢
還付金うきうき詐欺にねらわれる　小生
合格の通知うきうき飛びはねる　知恵
どろぼうも入らぬ家に鬼がいる　真一
北風へ鬼面の下も鬼女だった　艶子
鬼がいて楽しく遊ぶかくれんぼ　以和乃津
神仏に縋る時には信者です　ヒロ子
年金の糸に縋って二人旅　幸次郎
友情へ縋る思いの泣きぼくろ　清子
善人が縋る親鸞目をさます　雄々
一本の藁にも縋りたい老後　風花
老いの坂杖に縋って明日を待つ　道子
男一匹縋りつかれる木になろう　芳光
若者にいずれは縋る時が来る　登美

川柳若葉の会　宮﨑シマ子報

格差社会激しさを増す日本国　香住
激怒するわたしを笑う影法師　加津子

我が街へ激震あしたかもしれぬ　ますみ
裏切りに激しく揺れる髪その他　シマ子
慣例を少し崩して新春の風　弘直
便利さに慣れて忘れる有難味　あずき
貶される事には慣れているけれど　烈
慣れるって恐いそのうち朱に染る　能子
慣例と言い越えられぬ垣根あり　喜美子
慣らされて犬も毎日同じ餌　慶子

高知川柳社　川竹　松風報

反省をしたかこの頃おとなしい　徳子
何もかも反省だらけ十二月　みどり
百八十度方向変えて出直しだ　栄美子
反省は人の噂の消えるまで　房恵
反省をして少しずつ太くなる　初江
反省の度に座右の銘を変え　暖
子育ても慣れて写真の数も減り　典雄
告別式少し写真が若過ぎて　和江
セピア色になってしまった青写真　幸子
アルバムを開き昔にあいにゆく　良雄
番茶も出ばな見合い写真はおとなしい　美々
嘘のない戦火の中のカメラマン　京子
写真より生の私を見てほしい　美智恵
仏壇の笑顔に少し救われる　松風
引退をさすには惜しい父の鍬　功
それなりに写る写真を良しとする　てるみ

南大阪川柳会　吉川　寿美報

持ち味を職に生かして友が増え　弘泰
最高の持ち味君は聞き上手　ダン吉
古都の街持ち味生かす石畳　祥昭
持ち味を生かした母の大根炊き　尚士
原点に戻れば強い妻がいる　雅洋
悔んでも過去に戻れぬ落椿　志華子
後戻りばかりしている妥協癖　集一
白紙には戻れぬ悔いを抱いている　楓楽
忘れずに迷わず戻る母の川　千里
めちゃくちゃな言い分だけど芯がある　栄子
めちゃ温い寒の陽気に眉間寄り　ただよし
めちゃ一つ袈裟掛けにして風を読む　柳弘
二で割って聞いております妻のめちゃ　ばっは
めちゃ好きな温泉母の腰伸びる　柳伸
少子化とニート日本の影うすれ　萬的
日本を愛して腐葉土になろう　雅文
海外で日の丸日本の良さを知る　章久
日本の未来適塾からのぞく　憲太郎
すっきりとするには欲も物も捨て　叡子
生き過ぎた言いつつ飲んでいる薬　弘子
一年の計もとにかくお神酒から　(吉)修
ペコちゃんが大粒涙ためている　東吉
戦争をしない憲法なぜ変える　勝弘
もう少し翔んでみたいとルージュ選る　更紗
盃で嘘も誠も受け止める　昌紀
青春燦燦線をはみ出す娘の音符　寿美
私がどこにもいない以下余白　重人
日本人のトップが欲しいチャンコ鍋　あや子
持ち味がうまくかみ合う名コンビ　直子
マスコミも自分のめちゃは分からない　初太郎

岬川柳会　八十田洞庵報

亡父に恩返す徳利のひと雫　令子
気まま旅迷路で出合う明かり窓　富美子
折折の句会を巡り合う笑顔　和香
いつ返す友情の灯を消えぬ間に　廣作
大いなる老いの不安の虹かかる　洋子
名水を手のひらで飲む山歩き　里子
庭の木に四季の巡りを知らされる　俶子
まだ若さ誇りぬるま湯よりシャワー　蛙城
誤解とけ笑顔すっきり春近い　年子
陽焼けした親父の顔が持つ魅力　東吉
五年日記今日も無事と記す筆　桜琴
性格が出て大胆になる仮面　茂平
平和な時に巡り合わせた幸恵う　とみ
日蔭の愛すっきりしない日が続く　洞庵
ぐいと手を引かれた夜の雪あかり　和美

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

飢餓の子へ一億人の一円貨　きよし
損得を抜きの炊き出し食べている　あすなろ
しがらみの絡まる糸に逮捕され　美鈴

罹災地へ見舞を送る名を伏せて　成柳
奨学金で卒えたと燥ぐクラス会　順風
嫁ぐ娘に嬉し泪を拭いている　銀波
自販機の音がわびしく無人駅　ふさゑ
自衛隊の援助が決め手雪祭り　花匠
身も心も逮捕されてる片思い　愁女
夏祭りみんなの援助ネブタ出し　井蛙
古傷に抱く僕だけの北斗星　黙人
今宵また慚愧の酒を独り酌む　岳水
残雪を押しのけ咲いた福寿草　花峯
川底でひっそり春を待つ岩魚　慕情
剪定の援助は惜しまない鋏　劭
こっそりと貧者の一灯置いて来る　五楽庵

むらくも川柳会　毛利幸報

すきやきの肉が飛んでる孫の口　信夫
すきやきの奉行の一言さからえず　宣雄
ワイワイとすきやき囲んで和が踊る　彰
女ども卓に付く頃すきやきは　定子
すきやきの具が各々に自己主張　幸
新年はやたら希望が渦を巻く　蘭水
ときめきの胸が奏でる早春賦　瑞枝
温泉でサビを落して初詣で　俊夫
まだまだと神の死角で飲んでいる　秀夫
元旦の屠蘇に今年の夢誓う　恵美子
息災をとんどに祈る斐伊の里　ます美
独り身になれて聞き入る風の音　義良
老いなれどかしこく生きるわが余生　喜美

京の風二人で歩く渡月橋　美保
竹スキー昔の遊び思い出す　英男
ストーブをつけて私の朝にする　秀子
猫たちが土足で平気あまえ声　安男
迎春に次々予定書ける幸　美恵子

川柳さんだ　北野哲男報

正直な鋏何でも切りたがる　紀乃
正直に申告をして罰せられ　正和
爪を研ぎ夢とロマンの的狙う　雅司
ピンク色した爪だからがんばれる　千代子
文明が地球の寿命縮めてる　修
朝帰る夫につのを引っ込める　和代
このチョコが三倍返し荷が重い　聖也
反対をされて自信が湧いて来る　忠
光ってるレールは正に現役だ　二英
荒海へ危険を冒す笹の舟　光久
引力に逆らわないで生きている　キヨミ
暗闇を抜けて命がよく弾む　朋月
うっかりと二つ返事が不安生む　開子
よく笑う母の背中に仁と書く　順子
爪弾きされても群の後を行く　好文
嘘ついたことなどないと嘘をつく　章子
老婆の手見ては値切れぬ朝の市　藤朗
鼻息の荒い噂がついてくる　美紗子
機嫌よく飲んでいたのに荒れ模様　歳子
極楽は爪先上りの先にある　哲男

大原川柳社　山本玉恵報

正論は部屋の隅での一人言　敏夫
恵比須顔中年過ぎて艶を増す　さちこ
団塊の中年余生の色を塗る　地佳平
中年よだからあるのだこの気迫　南花
あれ以来隅に置けない人となり　辰江
中年から背なが重たい男です　悦子
重箱の隅をつついている雀　喜美子
元日で定めて三日でもう忘れ　巴子
子も孫も隅に置けない口をつく　芙佐子
初恋は心の隅に秘めておく　みさえ
隅に居る雑魚も大海夢見てる　たづ子
物置きの隅で昔がうずくまる　あすなろ
また隅をほじくり出した爪楊枝　はじ芽
中年のバトンを渡す子が居らず　真
すまし顔隅に置けない人が居る　とめの
大掃除隅からすみへ年の暮れ　文代
世渡りを覚え中年強くなり　あやこ
中年になって少しは丸くなり　エミ子
中年を無事乗り越えて来た至福　己吉子
隅に居た無口が正論をずばり　玉恵

川柳花の輪　妻谷重風報

祝い事金婚式まで有りません　隆盛
賞味期限切れでも元気朝散歩　ミヨノ
言い勝った後味悪い喉仏　髙栄
今朝もまた医者がすすめる老い散歩　一笑

朝立ちの夫見送りひと寝入り　一幸
年かさね朝のくるのが早いこと　やすの
怒ってもすねても朝めしちゃんと出し　薫
新聞が休みで朝をもてあます　勉一
一茶師は正月冥土一里塚　義恭
厄年も無事にすごせて初詣で　隆子
食養生一時預けたお正月　善栄
孫来ても孫帰ってもお正月　音成
きっかけは合コンでした雨でした　重風
きっかけは何だったかな夫婦です　一炊
退職のきっかけは子の自立かな　泰子
痛い目にあってやさしさとりもどす　賢山

富柳会　池森子報

試運転までは順調だった恋　和子
散髪代バーコード様五割引　淳司
行先が決っていないチョコレート　扶美代
要するにお金出すのはみんな嫌　冬虹
二階から狂想曲が降りてくる　アキ
要するに老化ですかと念を押す　あかり
枝豆の他には何かないですか　ダン吉
飲み放題ほんとに得をしたのかな　隆彦
この先を考えているこぼれ種　浩子
価値感の違いカプセル埋めなおす　紅紫朗
雑音を集めて温い春の耳　鐘造
ほっこりと出来たて豆をおすそ分け　千華
マイワイフ賞味期限はありません　高鷲
まだ続く命に魔性トッピング　澄子

お願いへ神の返事はないまんま　巳代一
それもみな運命しんしんと雪　奏子
冬の灯へ仮面の彩がこいすぎる　鬼焼
足踏みをしながら妥協せぬ冬木　登子
家庭円満ふわふわのたまご焼き　よりこ
ふるさとの雑煮恋しや倦怠期　深雪
一年振り苦労話を聞くみかん　義子
すんなりと得心させた母の味　佳子
福耳の左が少し遠くなり　伸雄
残り火に点火余白の彩を溶き　信子
太陽が笑って得をしたひと日　ひろこ
損得を九合目にて振り返る　彦次
納得のいく真ん丸はまだ未完　欣之
眠らせる牙へ充電欠かさない　萩乃
人格がきらりと光る一通話　泰女
腰痛を欲の深さで耐えている　宏至

倉吉川柳会　竹信照彦報

子守唄うたうロボット買いに行く　よしえ
機械化が出来ぬ棚田が荒れて行く　(前)喜美子
拳骨で叩くと動きだす機械　石花菜
人と機械思いを込めて動き出す　勝誉
部品換え動く機械が羨まし　風露
機械では作れないのが長寿です　瑞子
機械化は幸と不幸をもたらした　満
お袋に睨まれたなぁ通信簿　次男
秀吉が天下睨んだ一夜城　賀寿恵
山門の仁王の役は睨むこと　鬼一

睨んでも通じないので口が出る　日出子
消費税上げるだろうと睨んでる　龍枝
午前様妻が睨んで口きかず　由紀子
度の合わぬメガネで睨むお義母さん　玲子
不燃ゴミまた増えそうな機械好き　京子
私に勇気与えてくれた母　幸子
立つ勇気あるが先輩たてておく　かつみ
手を上げて黒は黒だと言う勇気　重忠
反対の意見を述べる勇気いる　泰輔
年重ね赤いファッション勇気いる　貞子
勇気出し派手な洋服袖通す　和子
絶頂期やめる勇気はもてぬもの　玲坊
勇気出し渡って見よう丸木橋　美津恵
六・三制の漫画総理も読んでいる　螢
ペコちゃんの顔に泥塗る不二家族　秋草
漫画から貰うスパイス潤滑油　節子
教科書の蔭で漫画を読んでいる　和枝
マンガ文字書いてワタクシ六十路です　茶子
マンガとは無縁左脳が邪魔をする　萩江
漫画しか読まず格差をつけられる　照彦

翠洋会　谷口義報

森は静かに縄張り主張する　千歩
人間の森でにんげん泣いている　尚士
青春の森で迷ったことがある　集一
森の中震度七でも大丈夫　日の出
命ためて裸の森が春を待つ　理恵

開発へ森の童話も共に消え　楓楽
何かある何かありそう森の奥　みつ子
人間がひとの都合で森を消す　すみ子
ひこばえは大きな森の夢を抱く　志華子
生涯の癒し鎮守の森神楽　叡子
のんびりと見えるがあれは眠る獅子　れんげ
のんびりと糸を垂らして見る浮世　満作
のんびりが良いと田舎を出ない祖母　正雄
申告書のんびりするもはや期末　絹子
ひきこもりには長かろう一日は　蕉子
鈍行で来た仕合せに宿を貸す　昭
一流のライセンス取りホームレス　舞夢
海征かば屍となった父しのぶ　春
捨て駒が終盤戦で生きてくる　捷也
飴玉を基地周辺になめさせる　久峰
駄駄っ児がひとり勝ちした六ヵ国　桃花
夕やけこやけ払ってほしい給食費　義
一本の電話花屋へ走らせる　富子
花の春詩の津波に酔いしれる　千楠
盆梅の古里を恋う梅木立　水昇
春までに掌にのるほどの雪見たい　さと美
南国の蝶も北国旅をする　照子
走りっこ爺ちゃん本気出してくる　恭昌

堺川柳会　河内月子報

左遷地の酒で夢見るカムバック　恵勇
気にいらぬ人も写っている写真　鐘造
年金の枠をはみ出す妻の夢　像山
夢だから賞味期限はありません　よりこ
同じ夢見ていたはずの離婚劇　半銭
人相もよくなりました棺の中　つづや
人の目をさけたい時に人に会い　舞夢
我慢して苦手な人と喋ってる　朋月
百歳になったら恋に溺れたい　楓
わたくしの心に夢をくれた人　篤子
跳ね上がるチャンスを狙う消費税　崩
ロボットに夢中少年まだ子供　なぎさ
ぼくの夢ことわりなしに獏が食べ　冬虹
六十路未だ昔のままの跳ね返り　八千代
今やもう人の噂も七日ほど　みつこ
初春にワイキキの浜いい気分　伸子
傘寿まで元気に生きてボランティア　ルイ子
会いたいと友の賀状が跳ねている　梓
しばらくはトイレに立てぬ怖い夢　時雄
夢いっぱい太平洋をひとっ飛び　千代
夢ばかり追ってソロバン出来ぬ人　玄也
修正はするが棄てない青写真　五月
肩書きがなくても跳ねる母だった　日の出
やごの夢今に見ておれ鬼やんま　俶子
夢ならば覚めて下さい花柩　潤子
百までの大きな夢を抱いている　りつえ
投げつけたつぶて自分に跳ね返り　かりん
飛び跳ねたあとで寂しさ増してくる　さくら
跳ね返す言葉微熱を持っている　扶美代
美しい国夢だけが水ぶくれ　公誠

川柳藤井寺　高田美代子報

秀句揃いずっしり重い三百号　耕策
票集めなり振り構わない選挙　史郎
核ゼロへヒト科の知恵を集めよう　いさお
大阪のおばちゃん集まると凄いッ　淳司
人垣をのぞいてなんぞおましたか　六点
巣作りの親はなんでも集めます　葉
セレモニーパンダが期待されている　重人
蜜集め女王蜂が課すノルマ　大八
同窓会来るでなかった奉賀帳　かつみ
寄せ集めでも気が合うて勝ちました　井竿
集めましょ飢餓も救える一円玉　悦子
談合じゃありません今家族会　アヤ子
集まれと何度いっても皆来ない　春蘭
節分の鬼を集めて相撲とる　鐘造
集まればおのずと決まる席の順　龍一
風景を画集にスケッチしてみたの　静子
渡り鳥みんな揃って北帰行　武義
群集の中に潜んでいる黒子　みつこ
入院で集まり退院で別れ　扶美代
今日の集いお利口さんにしていよう　シルク
イエスマンばかり集めて社が転び　恵勇
赤い花ばかり集めている箒　瑠美子
柵を集めて温い川にする　アキ
晴れたからふたりでバードウオッチング　月子

集まれば二三杯では終らない　登志子
どんぐりの集まりだからすぐ揃う　昭子
風を集めてプランコが歌いだす　美子
人間の集大成は軽い骨　欣之
喜んでついて行ったら定休日　雅枝
柳に風利口な人の生きる知恵　志洋

城北川柳会　小谷　集一報

言い負けて良かった妻が上機嫌　睦子
ニコニコとしてたら人は寄って来る　順三
聞いてないことまで喋る上機嫌　集一
余命にも完全燃焼果したい　東吉
懸命に生きて命を輝かす　ルイ子
団子汁命つないだ戦中派　福世
胎動を感じたあの日忘れない　麗
春キャベツ青い命を巻いている　志華子
三分粥味に命の重さ知る　はじめ
保護色で命をまもる虫の知恵　萬的
いつ死んでもよい命だが休肝日　一歩
妻の愚痴逃げて書斎で日向ぼこ　弘風
愛想が良すぎるさては逃げる気か　郁夫
逃げ道を作って叱る母だった　達子
逃げだした奴が真実喋り出す　利昭
八十路なりふたり仲良くすがり合い　叡子
よろよろとしてるあいだはまだ達者　正
なんでやろ頭に叛く膝の骨　あやめ
鼻歌の出る湯加減でいやされる　美智子
貢献をしてます酒税たばこ税　明子
絵手紙に老母の咲かせた梅便り　朝子
節分の豆を肴に鬼と呑み　とし子
ワンカップ大きなことは希むまい　典子
ペコちゃんが寒いつらいと泣いている　倫子
決断の鉛筆折れてばかりいる　千里
意地悪な拍手だ音が出ていない　和夫
土に還るときめて慌てることはない　たもつ
人間の形を忘れ大鮮　昭
福寿草群れ咲くあたり春のいろ　天笑
念のため八方向いてすし醤る　修

あかつき川柳会

日　時　5月11日（金）14時から
会　場　北区民センター
（地下鉄扇町2号B出口）
兼　題—音楽・コップ・映る・時事吟
投句先—〒599—0232阪南市箱作
1586—14—102　森村美花

お願い

須崎豆秋句集『ふるさと』の再版（昭和三〇年四月三日発行）をお持ちの方、コピーさせて下さい。川柳塔事務所へ連絡お願いします。

第三回　各地川柳会代表者会議

2月17日、第三回の各地川柳会代表者会議をアウィーナ大阪で開催、近畿圏を中心に22名の会長にご出席を頂いた。

天笑主幹の挨拶の後、総会での誌友拡大の方向付けを再確認し、拡大の現状報告が同人誌友部長からなされ、各会長との討議に入った。各川柳会からは、

＊川柳会新人に、例会とは別に勉強会を開催。結果として誌友になって貰う。
＊新しく川柳会を立ち上げ、会員を誌友に勧誘し成果が出ている。
＊行政の協力を得て、全く始めての方のための「塾」を開いた。今後に期待。
＊待ちではなく、ニーズのある所への出前川柳という発想が必要である。

などの多くの事例が発表された。

勧誘ツールとしての近刊川柳塔誌とその関連費用、遠隔地も含めた全川柳会への公平性等につき意見交換を行い、これらは常任理事会に持ち帰り、更に具体的な施策に反映することとなった。

最後に、この会議は、規約上の位置づけはないが、総会・常任理事会への提言の場として、継続したいと確認された。

（渉外部）

2007年度反戦反核平和詩歌句文集第21集
作品募集要項

部　門　俳句　川柳　散文　詩　短歌
体　裁　A５版
発行予定　2007年秋　**締め切り**　**４月30日**
送　稿　所定用紙又は原稿用紙、ジャンル名、(川柳、散文等) 明記、作品に表題（８字以内）をつけてください。
ジャンル別詳細
川　柳　１人半頁７句１行書きにすること。参加費半頁2000円（２冊配本）
送り先　〒536-0024 大阪市城東区中浜 1-1-27　川端一歩
Tel･Fax 06-6336-3395
散　文　エッセイ、ノンフィクション等６頁以内（400字詰め原稿用紙１～９枚）参加費1頁につき2000円(2冊配本・郵送500円)
送り先　〒551-0011　大阪市大正区小林東 3-6-9　コーポ昭和7号
横田昌則　Tel･Fax 06-6553-7132
送金は郵便小為替にて作品と同時にお願いします。(送料別途500円)

第８回 井笠川柳会笠岡大会
(第22回　蘗　大会)

と　き　**５月19日**(土)
開場　９時30分　　締切　11時30分
ところ　笠岡市保健センター　℡ 0865-62-5701
題と選者
第一部　「油　断」（事前投句・２句）　河内　天笑／大森　一甲／前川千津子　共選
第二部　「無　駄」（年間賞対象）（当日投句・２句）　濱野　奇童／久本にい地／小島　蘭幸　共選
特別課題　当日発表(一句)　高木　勇三　選
会　費　2000円(投句のみ1000円)(昼食･発表誌呈)
事前投句　指定の用紙又は便箋 (4月30日必着)
投句先　〒714-0081 笠岡市笠岡507-68　井笠川柳会 宛
Tel･Fax 0865-62-6200(戸田さだお)
今年から**年間賞**を制定しました。年間を通じての入選句上位10名の方に「蘗」年間優秀賞を贈ります。(各題天位句から選ばれた句碑獲得者を除く)
賞品･賞状　第一部・二部各一位の方に句碑贈呈、その他賞多数
主催　井笠川柳会　　**後援**　岡山県 他

京都塔の会　三十五周年記念大会

日　時　**５月28日（月）**　正午開場
会　場　ハートピア京都　三階大会議室
京都市中京区烏丸丸太町(地下鉄「丸太町」⑤出口エレベーター)
℡ 075-222-1777
お　話　阿萬　萬的　氏
兼題と選者(題はすべて京都の通りの名です)
「　条　」事前投句　都倉　求芽 謝選
「　柳　」　小谷　集一 選
「押　す」　藤井　則彦 選
「　錦　」　宮崎シマ子 選
「　堀　」　谷垣　郁郎 選
「　高　」　西出　楓楽 選
各題二句　投句締切　１時30分
事前投句の締切　**４月末日**
会　費　二千円（呈 茶・軽食 合同句集）
投句先　京都塔の会　都倉　求芽
〒600-8428 京都市下京区諏訪町通り松原下る弁財天町328-202
℡ 075-351-4109

川柳塔みちのく20周年記念句会

と　き　**６月３日（日）**正午～
締め切り　13時
ところ　弘前市駅前1-3-4
「弘前プリンスホテル」
℡ 0172-33-5000
会　費　4000円(懇親会･記念品･発表誌)
宿題と選者（各題２句、共選）席題なし
「　雪　」　西山　金悦　選
北野　岸柳　選
「　月　」　佐藤　古拙　選
千島　鉄男　選
「　花　」　加藤　彩人　選
西出　楓楽　選
★謝選（２句）「栞」波多野五楽庵　選
賞　合点20位まで　投句拝辞
宿泊はお早めに、要予約「弘前プリンスホテル」(一泊朝食付き　5400円)
連絡先　〒036-0161 平川市杉館宮元53-1　小寺　花峯
Tel･Fax 0172-44-7378

柳界展望

○第15回天領倉敷川柳大会での同人天位。
秋の城家来はみんな出て行った　新家　完司

○第58回三原市神明祭協賛川柳大会、三原市市民福祉会館にて2月11日開催、同人特選句次の通り。
もう底値愛が無色になったから　池　森子

○第56回西大寺会陽川柳大会は2月18日(日)岡山県西大寺ふれあいセンターで開催、参加者183名。同人の特選句
幻とこの世に酔うたのは蛍　池　森子
ランク付個性は美しいものだ　小島　蘭幸

○せんりゅうぐるーぷ　GOKEN第6回誌上大会、同人特選句
球根をこっそり埋めた句読点　古久保和子

○城北川柳会の平成18年度最優秀賞　大内　朝子

○川柳塔わかやま吟社の18年度年間各賞決定、同人の句は次の通り。
葵水賞
蝉しぐれ妻の小言が聞こえない　喜田　准一
あおい賞
弱者からじりじりじりと切りすてる　細川　稚代
課題吟賞
ホーホケキョ絶好調な気分です　堂上　泰女
マジックが解けてにやにやしてる亀　武本　碧

○同人北野哲男さんの「ロボットの手伝いに行く通勤車」の句はNHK学園の文部科学大臣奨励賞を受賞。

▽御芳志御礼△

長浜美籠さん（常任理事）から切手拝受。

▽出　版△

川柳藤井寺では句報300号を記念して句集『川柳藤井寺』第5輯A5版122頁を発刊。

▼御供養拝受▲

沖浜正宏氏御遺族より金一封拝受。

▼訃　報▲

□岸本吟一氏（番傘前主幹）2月22日逝去。86歳

□時実新子さん（川柳大学主宰）3月10日逝去。78歳

▽同人動向△

○2月18日の第56回西大寺会陽川柳大会出席のため、楓楽理事長他7名岡山県西大寺行。

○三幸川柳教室（三宅保州主幹）は四月一日より和歌山県三幸川柳会と改称した。

○六甲川柳会「メダカの学校」開校。四月から初心者を対象に勉強会を開く。月1回第2土曜日14時～16時、無料。世話人、山口光久、伊勢田毅、両川無限。

○近藤豊子さん（同人堺市）は18年度NHK全国短歌大会に於て特選を受賞（選者俵万智）

○本誌に「川柳讃歌」を執筆いただいている木津川計氏は四月から和歌山大学の客員教授に就任された。

▽訂正とお詫び△

○2月号120頁ひとこと下段4行目、晴彦→春彦。

○3月号112頁下段13行目、日を捨てる→目を捨てる。

○3月号77頁、『川柳展望』現代川柳大賞の応募料千円→二千円、発表誌は別途二千円→発表誌は別途千円。

削除2月号57頁上段1行目、笑ったら笑い返してくれましたの句を本人申し出により削除。

常任理事会＝3月7日(水)出席14名。①各地川柳会代表者会報告②定例確認事項各地川柳会への対応等③各部報告事項④同人一名承認次回は4月7日(土)

――○**お願い**○――

○近々、**同人名簿**を発行しますから変更のある人は申し出て下さい。

○郵便振替の番号が変っています。旧用紙は使わないで下さい。

新同人紹介

長井善純（ながいよしずみ）

―重人・一歩・柳弘推薦

句会名	日時と題	会場と投句先
岬川柳会	15日(日)午後1時半締め切り 垣根・バラバラ・波乱	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 ねやがわ	15日(日)午後1時半締め切り 登る・パソコン・争点・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9 高田博泉
川柳 藤井寺	15日(日)午後2時15分締め切り 覚悟・カーテン	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時半締め切り 帰る・式・ちぐはぐ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4 江見見清
川柳 さんだ	17日(火)午後1時から しゃぼん玉・土・演じる 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553—12 北野哲男
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木)午後1時半締め切り 眠い・部屋・しっくり・音 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3—28—13 神野節子
岸和田 川柳会	**21日(土) 吟行 いよやかの郷** 油・痛める・旨い・オリジナル	集合：南海本線 岸和田駅東口 午前10時 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
はびきの 市民 川柳会	22日(日)午後2時締め切り ダブル・首・抱く・「あっさり」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	**22日(日) 日置吟行会** イケメン・水増し・無言	**問い合わせ** 〒680-0824 鳥取市行徳2—632 田中かをる
京都 塔の会	23日(月)午後2時締め切り なるほど・穏やか・助走	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328 ブァン青雲202 都倉求芽
南大阪 川柳会	23日(月)午後6時から 栄える・鉛筆・どんどん・未知	住まい情報センター（大阪くらしの今昔館・5F） 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔 みぞくち	23日(月)午後7時半から 飾る・門出・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前9時半から 相談・辞書・スタート・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	28日(土)午後6時から ゲーム・騒ぐ・背中・風	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21 片岡湖風
和歌山 三幸 川柳会	28日(土)午後1時から 列・包む・寝る	勤労者総合センター4F 会議室 〒640-8111 和歌山市新通7—17 古久保和子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

4月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	5日(木)午後1時から しっかり・情・縁起	奈良市立中部公民館4F（近鉄奈良駅④出口歩5分） 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62—6 渡辺富子
尼　崎 いくしま	6日(金)午後2時締め切り (桜)さくら・吹く・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	7日(土)午後2時締め切り 手軽・サロン・自由吟	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池　森子
倉　吉 川柳会	7日(土)午後2時締め切り 闇・写真 かる(刈る・狩る・駆る・借る)	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 わかやま	8日(日)午後2時締め切り 魅力・多い・アクション 「のみ・だけ・ばかり(限定の助詞)」	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
八尾市民 川柳会	8日(日)午後1時から 新人・もくもく・産む・雑詠	山本コミュニティーセンター3F　学習室 （近鉄山本駅） 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時から 廊下・試す・芋・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515 山本義子
川柳塔 唐　津	9日(月)午後1時半締め切り 午後・遺伝子・コンビニ	唐津市　栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13 宗　水笑
尼　崎 尾　浜 川柳会	10日(火)午後2時締め切り 糸・足る・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47 田辺鹿太
ほたる 川　柳 同好会	10日(火)午後1時から 未来・話す・ぴったり	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1 水野黒兎
城　北 川柳会	14日(土)午後1時半締め切り 目玉・興奮・レーダー・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
堺川柳会	14日(土)午後2時締め切り 蓋・びっくり 「ロシア(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打　吹	14日(土)午後2時締め切り 先頭・伸びる・茫然	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3 牧野芳光
川柳塔 みちのく	14日(土)午後5時半締め切り 心理・図る・憎い	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53—1 小寺花峯
川柳塔 まつえ	14日(土)午後2時締め切り 宴・髪・囲む・ぽかぽか	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22 三島淞丘

編集後記

○同人稲葉冬葉さんから昭和35年9月発行の川柳雑誌400号特集（麻生路郎主宰）という貴重な資料をお貸しいただきました。3月号には温故知新というコーナーをもうけ、その中から数人の句を載せています。これをきっかけに早川棲世さんも、その前後の『川柳雑誌』を保存されていることがわかりました。これからも出来る限り先輩作家の句を紹介させていただくつもりです。

○400号特集の中の路郎先生の言葉を少し紹介させていただきます。

「明治時代の心ある川柳人は、狂句的川柳の打破、新川柳への転換を願っていましたが久良伎、剣花坊達によって、その狼煙があげられたのです。明治37年頃から川柳に手を染めた私はこれに続きました。川柳雑誌社をおこしましたが、雑誌を出す以上社会へ進出して行けるものを目指しました。川柳の社会化、初心者指導、古句研究の三つの旗印をかかげ寄贈ではなく売れる雑誌にした。その代わり読んで値打ちのあるものにしたのです。

○この路郎先生の志は、昭和40年10月号からは『川柳塔』として引き継がれ、昨年7月、通巻950号を迎えた次第です。『川柳塔』誌創刊号は、合本になったものを古今堂蕉子さんからお借りしました。父君で西尾栞三代目主幹の書架にあったものだそうです。

○先日俳人伊丹三樹彦氏から葉書拝受。「麻生路郎、橘高薫風氏とは面識がありました。天笑氏の巻頭言、木津川計氏の川柳讃歌いつも拝見」とありました。（希）

ひととひと

華やかな表紙

月末になると川柳塔が届く。きり絵のカラー表紙の華やかさにしばし見とれ、何か癒される思いに浸る。本年一月号の表紙「猪乗り天神」。囃し立てる宮司さんも猪もにこやかで微笑ましい。亥年が明けた。決めたら一直線、必ず良い成果があがるようにやろう。

眼を転じ創刊大正十三年とは八十三歳。雨露を凌ぎ傘の骨は達者、骨太の足でしっかり歩み、傘寿を越えた。もう五年で米寿を祝う。

きり絵に変わった表紙十八冊を並べて眺めた。カラフルな表紙が現代の動と静を切り取って見せる。

これら表紙絵を頭に大型書店で俳句など同人雑誌の表紙をしばし眺めた。川柳塔表紙の良さを並べ、比べて見たい程だ。この表紙の中にわが句が選ばれ載るとまた投句の意欲が湧いてくる。（小川注湖）

★春狐独眼鏡はずせば
なお孤独　薫風

★特集「私の宝もの」いかがでしたか。有形無形の宝ものの一つ二つは誰にもあるでしょう。あなたの宝もののはなんでしょう。

★四月二十四日は薫風先生の三回忌。先生は大変筆まめでした。鳩居堂の美しい絵葉書に、ブルーのインクも清々しい、折々のお便りを下さいました。

★私が同人になった時「初便りであります」との書き出しで頂いたのは、月と題した版画の葉書でした。日付は昭和六十三年一月五日。

★薫風先生の親友、故寺尾俊平先生も筆まめでした。最初にお目にかかったのは、平成六年十一月の「鹿野みか月大会」の前夜祭でした。

★その年の十二月二十八日付け、毛筆の達筆なお葉書を頂きました。「いよいよ押しつまりました。今年は朱夏に会えて識ることができてこころぬくもる年でした。どうもありがとう」。

★川柳に行き詰まるたびに、私は額縁にいれたこの葉書を眺めます。その都度、喝を入れられ、励まされ、初心に還ります。

★薫風先生、俊平先生、そして故小出智子先生に頂いたお便りの数々、それが私の宝ものです。（朱）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（**6月号**）地名

都道府県市　姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

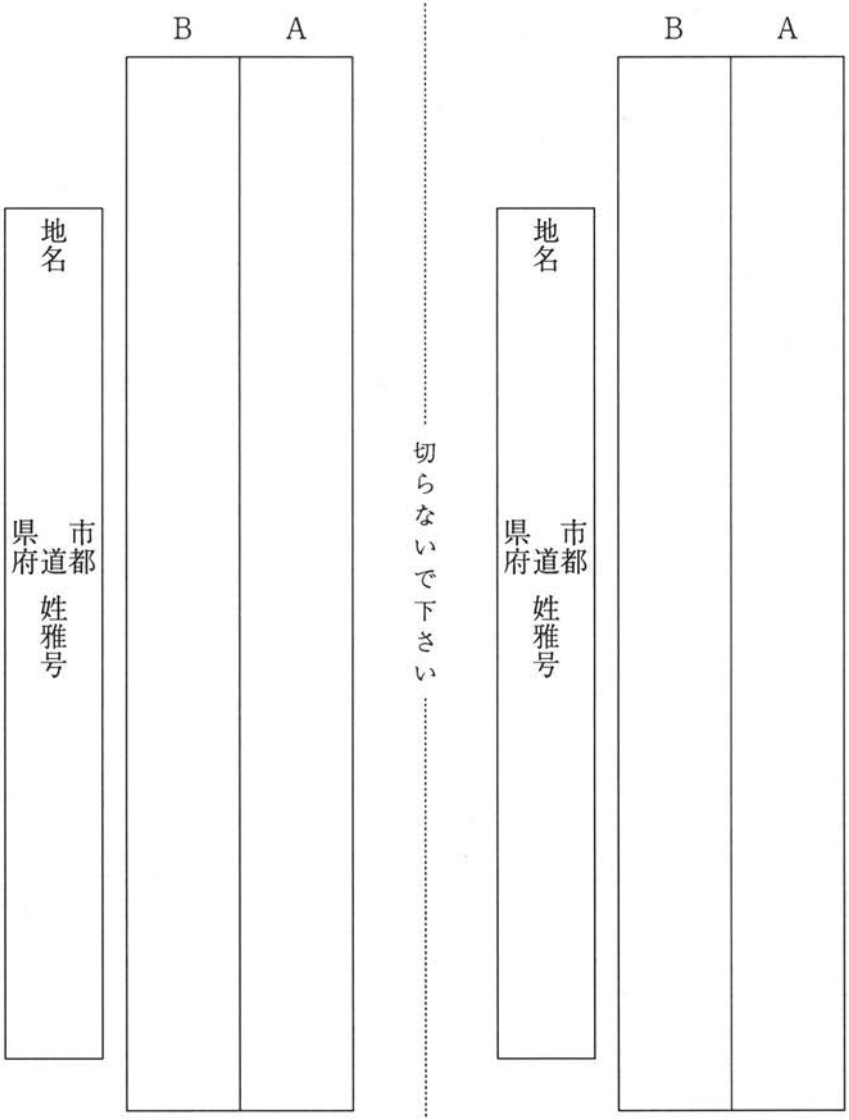
投句先　〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202

檸檬抄投句用紙

「デザイン」　（4月15日締切）

6月号発表

松本　文子　選 ―― 共選 ―― 川上　大輪　選



左右に同じ句を書いて下さい

本社４月句会

とき　4月7日㈯ 午後5時半開場・6時半締切り
―開催時間が変わりましたのでご注意下さい。
ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
おはなし　橘高　充
席題「　」　籠島恵子選
兼題「さばさば」　太田扶美代選
「　柱　」　太田　昭選
「スマート」　西口いわゑ選
「滅　る」　鶴田遠野選
「突　然」　河内天笑選
会費　1000円　投句料　500円（切手可）
（各題2句以内）

本社５月句会

7日(月) 午後5時半から
兼題「いとしい」「　艶　」「ルーツ」
「励ます」　「味　方」

作品募集

6月号発表（4月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　奥田みつ子選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄「デザイン」（2句）　（川上大輪共選／松本文子共選）
一路集（3句）　「午　後」　前たもつ選
「遺伝子」　中村金祥選
「コンビニ」　岩崎公誠選
初歩教室　「　傘　」（3句）　三宅保州担当

7月号
檸檬抄　「痒　い」
一路集　「地　球」「ひたすら」
「脱　ぐ」
初歩教室　「浴　衣」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

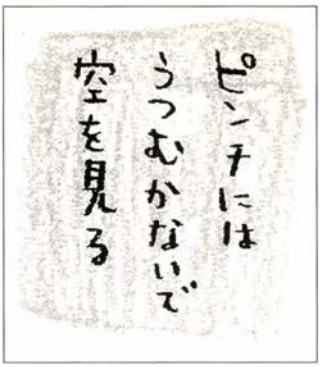
第25年度　夜市川柳募集

第11回「　銀　」大野風柳選
ハガキに3句　4月末日締切
投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇〇七年（平成十九年）四月一日発行
発行人　河内權治
編集人　山本希久子
印刷所　美研アート
〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六六二九―六九一四番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

ホームページアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成十九年四月一日発行（毎月一日発行）

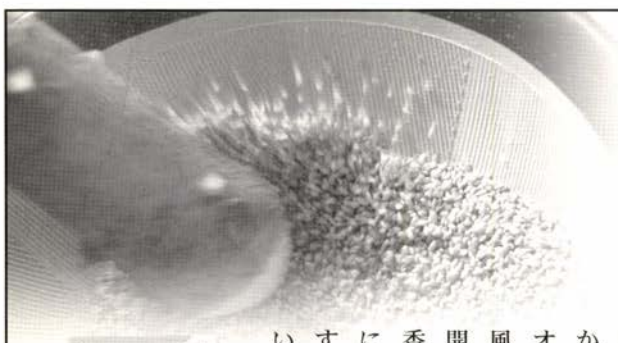


奥田みつ子

第一章　あるがまま　あるがまま
　対談　やすみりえ×奥田みつ子
第二章　注文の多い病人
　川柳のココロ――麻生路郎の言葉―
第三章　白い部屋
第四章　旅立ち
　対談　遠藤千舟×奥田みつ子
第五章　アシタ天気ニナアーレ
　川柳イロハのイ―川柳へようこそ―
第六章　転んでも遠くても

★御希望の方は最寄りの書店からお取り寄せください

発行　美研インターナショナル
発売　星雲社
定価（本体1300円＋税）



オニザキの
すりごま

自宅の台所で始めた手洗いのごま加工・販売から50年。
オニザキでは、手作りの風味にこだわり、独自に開発した製法で、ごまの香りと味わいを最大限に引き出し、美味しいすりごまを作り続けています。



株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050